

今小路西遺跡 (No.201)

御成町 176 番 7 地点

例 言

1. 本書は、鎌倉市御成町176番7地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。資料整理の際の遺跡の略記号はI N Eである。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成18年7月18日～9月25日である。
3. 調査団の編成は以下の通りである。

調査の主体	鎌倉市教育委員会
調査担当	滝澤晶子
調査補助員	安達澄代・安藤龍馬・下江秀信
調査協力者	秋田公佑・倉澤六郎・片山直文・佐藤美隆（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の執筆・編集は以下のものが行った。

第1章：宮田真	第2章～第4章・編集：滝澤晶子
---------	-----------------
5. 本書の図版および写真撮影は次のものが行った。

遺構図版	滝澤晶子	遺構写真	滝澤晶子
遺物図版	宇賀神雅子・渡辺美佐子	遺物写真	滝澤晶子
6. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。(各々の図にスケールを載せている)

遺構図	1 / 40・1 / 80 (遺構図の水糸高は海拔高を示す)
遺物実測図	1 / 3
7. 遺構実測図には次の記号が使用されている。

釉の限界線	-----	調整の変化点	-----	使用痕の範囲	←-----→	加工痕の範囲	<----->
攪乱の範囲	-----	推定ライン	-----	調査限界ライン	-----		
8. 遺物寸法表は計測可のもののみ表にしている。遺物およびPit寸法表の記号は以下の通り。

遺物寸法表	：() = 復元値・[] = 遺存値・単位はcm
-------	----------------------------

目次

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	121
1. 調査地の位置	
2. 歴史的環境	
3. 周辺地域の発掘調査	
第二章 調査の概要	125
1. 調査の経緯と経過	
2. 調査区の位置とグリッド配置	
3. 基本土層	
第三章 検出遺構と出土遺物	129
第1面	
第2面	
第3面	
第4面	
第4b面	
第5面	
第6面	
トレンチ1・出土遺物	
中世層出土の古代遺物	
第四章 まとめ	180

挿図目次

図1 遺跡周辺図	121	図17 2面出土遺物(3)	140
図2 敷地と調査区	125	図18 3面遺構配置図	141
図3 遺跡位置図	126	図19 3面板壁建物1・落込み1、 掘立柱建物1・土坑1・2・7	142
図4 グリッド配置図	127	図20 板壁建物1出土遺物(1)	143
図5 1面遺構配置図	129	図21 板壁建物1(2)、落込み1(1)出土遺物	145
図6 1面据甕1・土坑5	129	図22 落込み1(2)出土遺物	146
図7 据甕1出土遺物	130	図23 掘立柱建物1・土坑1・2・7出土遺物	149
図8 土坑5出土遺物	131	図24 3面出土遺物(1)	151
図9 1面出土遺物(1)	132	図25 3面出土遺物(2)	152
図10 1面出土遺物(2)	134	図26 3面出土遺物(3)	153
図11 2面遺構配置図	135	図27 4面遺構配置図	155
図12 2面溝1・柱穴列1・土坑6	136	図28 床状遺構・土坑9	156
図13 溝1出土遺物	136	図29 土坑9出土遺物(1)	157
図14 土坑6出土遺物	136	図30 土坑9出土遺物(2)	158
図15 2面出土遺物(1)	137	図31 4面出土遺物(1)	159
図16 2面出土遺物(2)	139		

図32 4面出土遺物(2)……………	160	図40 土坑3・10出土遺物……………	169
図33 4面出土遺物(3)……………	161	図41 5面出土遺物(1)……………	171
図34 4面出土遺物(4)……………	162	図42 5面出土遺物(2)……………	172
図35 4b面遺構配置図……………	165	図43 6面遺構配置図……………	174
図36 4b面板壁建物2……………	166	図44 6面柱穴列2・3……………	175
図37 4b面出土遺物……………	167	図45 6面出土遺物……………	176
図38 5面遺構配置図……………	168	図46 トレンチ1出土遺物……………	178
図39 5面土坑3、土坑10……………	168	図47 中世層出土の古代遺物……………	179

図 版 目 次

図版1……………	181	図版10……………	190
A. I区1面全景(東より)		A. I区5面全景(北より)	
B. II区1面全景(北より)		B. II区5面全景(北より)	
図版2……………	182	図版11……………	191
A. I区1面据甕1出土状況(北より)		A. II区5面舟形出土状況	
B. I区1面据甕1内土層断面		B. I区5面宝塔出土状況	
図版3……………	183	図版12……………	192
A. 据甕1三鱗叩き文		A. I区6面全景(北より)	
B. 据甕1完掘(北より)		B. II区6面全景(北より)	
図版4……………	184	図版13……………	193
A. I区2面全景(南より)		A. II区6面Pit19(東より)	
B. II区2面全景(北より)		B. トレンチ1(北壁)	
図版5……………	185	図版14……………	194
A. I区3面全景(南より)		A. I区東壁土層断面	
B. II区3面全景(北より)		B. II区東壁土層断面	
図版6……………	186	図版15……………	195
A. I区3面建物1東部(西より)		出土遺物(1)	
B. II区3面掘立柱建物1(北より)		図版16……………	196
図版7……………	187	出土遺物(2)	
A. II区3面土坑7人形出土状況		図版17……………	197
B. I区4面漆器出土状況		出土遺物(3)	
図版8……………	188	図版18……………	198
A. I区4面全景(北より)		出土遺物(4)	
B. II区4面全景(北より)		図版19……………	199
図版9……………	189	出土遺物(5)	
A. I区4面建物2(北より)			
B. II区4b面全景(北より)			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 調査地の位置

本調査地は鎌倉市御成町176番7（図1-1）に所在し、今小路西遺跡（No.201）の遺跡指定範囲内に位置する。調査地は現在のJR鎌倉駅を基点にすると北西約200mにあり、地勢的に見ると、旧鎌倉市街地を形成する沖積地の平野部の西端に当たる。また、旧市街地を取り囲む谷戸の一つ「無量寺ヶ谷」の開口部前面に位置する。調査地の北西に展開する谷戸は「無量寺谷」と呼称されており、無量寺があったとの伝承が今に残る。現在、調査地の北側には佐助ヶ谷に抜ける市道があり、「銭洗い弁天」「佐助稲荷」へつながっている。また、調査地東50mを南北に通る道路は遺跡の名称に含まれる通称「今小路」と呼ばれる道路で、鎌倉の基幹道路「若宮大路」とほぼ並行し、東の「小町大路」と対になっている。また、「今小路」は北は「武蔵大路」につながり、「亀ヶ谷」あるいは「化粧坂」の切通しを越え、武蔵方面へ抜け、南は鎌倉を東西に横切る「大町大路」の西部である「長谷小路」へと連結している。

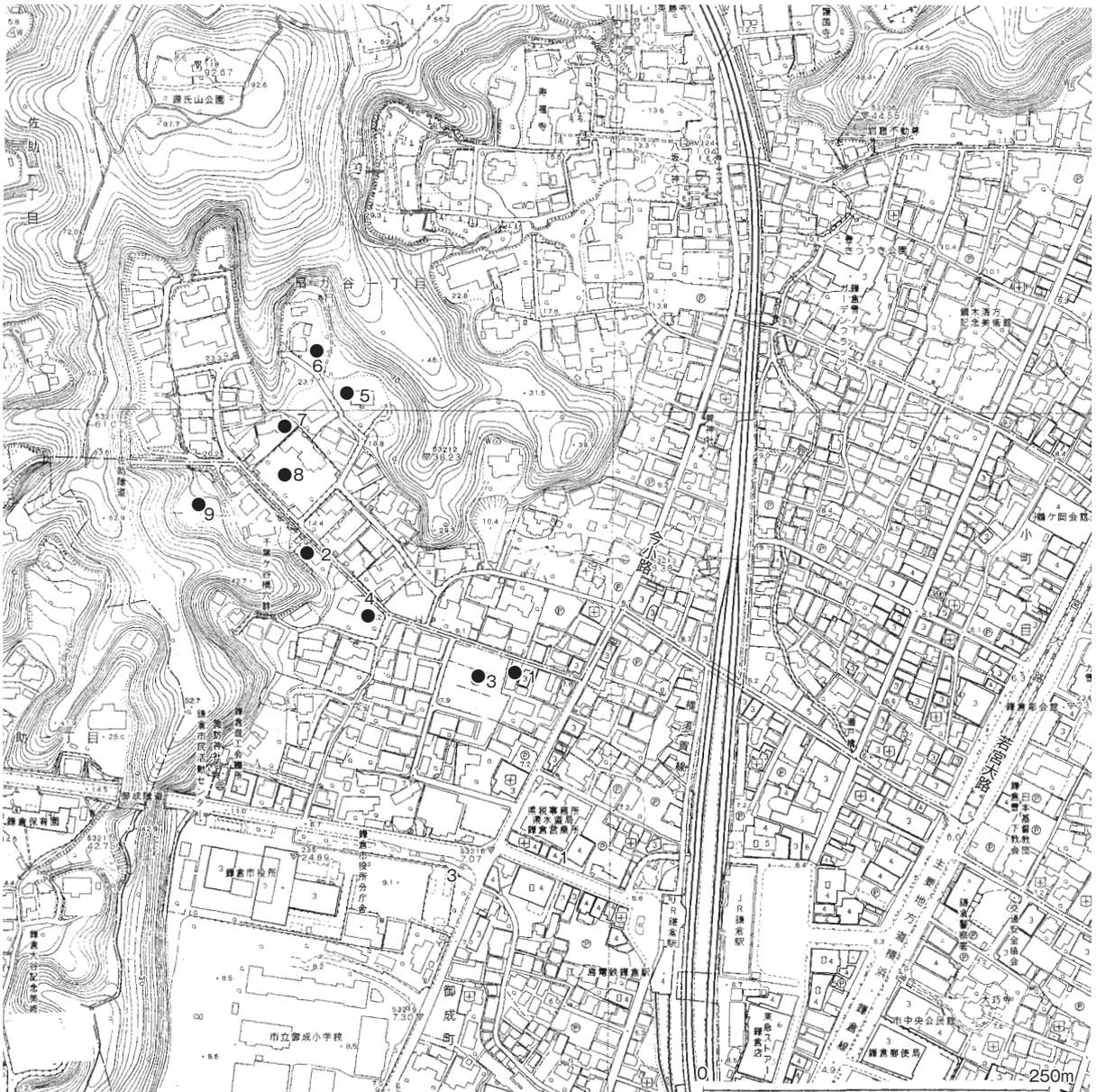


図1 遺跡周辺図

1. 調査地点
2. 正宗井戸
3. 御成町171番1外
4. 御成町25番1外1筆
- 5~8. 扇ガ谷一丁目26番14地点他（無量寺跡第1次~第4次）
9. 御成町39番36

2. 歴史的環境

当調査地点を含めた周辺一帯は、近年、文献史学と考古学の成果から考察して、『吾妻鏡』に記述されている「甘縄」という地域であるということが認識されている。以前は、現在の長谷地域が、甘縄神明社があることから、「甘縄」であると云われてきたが、江戸期以降からの誤解であることが判明している。この「甘縄」には鎌倉の有力御家人一族の安達氏の邸宅があったとされており、北西部には安達義景十三回忌を行った安達氏縁の寺「無量寿院」があったとされる「無量寺ヶ谷」がある。

また、「無量寺ヶ谷」には江戸時代、相州伝正宗の血を引く刀工綱廣の屋敷があったと伝えられ、「綱廣谷」と称され、図1-2地点付近には「正宗井戸」1基があり、また本調査地点の北方山腹には「正宗相槌稻荷」が近代まで祭られていた。

さらに時代が下った明治～大正時代頃には、温暖な気候や風光明媚などの理由から、東京や横浜在住の政治家・実業家・文人・学者・華族といった著名人達が次々と鎌倉に別荘を構え、調査区南方にある御成小学校はその名からもわかるように皇室御用邸跡である。

3. 周辺地域の発掘調査

本調査地の周辺地域ではこれまでに大小様々な規模の発掘調査が実施されてきた。本項ではその内、ごく近隣に限って紹介する。

《今小路西遺跡（御成町171番1外地点）（図1-3）》

当調査区の西隣の調査である。調査面積が1,640㎡と鎌倉市内では規模が大きい発掘調査である。調査の結果、古代6期（7世紀前後～9世紀）、中世4期（13世紀第2四半紀～14世紀後半以降）の遺跡が検出された。古代遺跡は古代建物11棟、古代溝13条など、中世遺跡は中世建物43棟、井戸21基、道路2条などが検出された。発見された中世建物群は「権力を有する御家人クラスの屋敷地か庇護の厚い寺院などであったことが想定できる」と報告されている。また、出土遺物は日常生活具をはじめ、工具・武器・遊戯具・仏具・呪術具と多岐にわたり、どれも、種類、量ともかなりのものであったが、中でも、文永二年(1265)銘のある墨書木札が注目された。木札には3人一組9名の御家人と思われる人物名が記され、屋敷の警護を担当する順番が書かれていた。この遺跡が先述した「甘縄」にあった安達一族の屋敷の一部ではないかとの見方が、現在のところ有力になっている。

《今小路西遺跡（御成町25番1外1筆地点）（図1-4）》

調査の結果、13世紀末～15世紀前葉に至る合計4枚の良好な土丹地業面が検出された。中でも13世紀末～14世紀初頭頃に時期を置く3面からは、市内でこれまでに見つかった大路側溝と護岸構造を同じくする、断面方形の溝が調査区の北側で、北面する道路と並行して検出されるなど、当時の谷戸内の土木工事の実態を知る上で大きな成果を上げている。

《無量寺跡（扇ガ谷一丁目26番14地点等）（図1-5～8）》

財団法人センチュリー文化財団の博物館建設計画に伴うもので第1次～第4次にわたって調査が実施された。

第1次調査（図1-5地点）

調査の結果、谷戸を形成する山裾の岩盤（切岸）に沿って4基のやぐらが検出され、やぐら前面の岩盤面には排水のための溝や複数個並ぶ播鉢状の土坑が穿たれていた。さらに調査区の北部からは、北方の上段平場（第2次調査区のある平場）へと通じるつづら折れの坂道が見つかった。

第2次調査(図1-6地点)

調査地点は第1次調査地の北方上段の谷戸最奥に位置しており、周囲は切岸に囲まれている。また北方の山腹には「正宗相槌稻荷」が近世以降祀られていたといい、切岸岩盤を直接穿った階段の痕跡が山腹に通じている。調査の結果、調査区の南端から中央部かけた範囲で、この石段に向かう近世の道遺構がまず検出された。さらに調査区の中央から北側では、13世紀末～14世紀前半にかけて並立した建物遺構と池遺構が発見された。この建物は安山岩の礎石建ちで南北6間×東西3間に西側が半間分張り出しをもっており、池側を望むように縁が設けられていたようだ。池は岩盤を彫り抜いたもので池底には玉砂利が敷かれ、中央西よりに「中ノ島」が彫り残されていた。池の北側には北方の山裾に源を有するであろう「遣水」が屈曲して流れ落ち、流路には池底同様玉砂利が敷き詰められていた。この建物は火災に遭っており遺存する礎石は激しく焼け表面が爆ぜている。また周囲の地面も焦土化し炭化物が堆積する。この炭化物層からは夥しい数のかわらけがかわらけ溜りの様相を呈して出土した。この焼土層は池遺構も埋め尽くしており、火災をもって建物と池が同時に廃絶したことを物語っている。仮にこの地が寺院跡の中にあると考えても、発見された建物はその形態から堂宇的な建築ではなく、「庫院」や高僧の隠居所的な色合いが強く、平場規模から察して14世紀初頭頃の「塔頭」のような空間ではなかろうか。と報告されている。

第3次調査(図1-7地点)

第3次地点は近代以降の大型土丹塊による埋め立層が厚く4mの深さに及んだ。オープンカットの調査のため一部に確認トレンチを設定し、4m以下の深度に中世包含層の存在を確認して調査を断念した。ただ調査区の西端部に、第2次調査で検出した近世道遺構につながると考えられる土丹で舗装した、南北方向に軸を持つ道遺構を検出した。

第4次調査(図1-8地点)

調査の結果、13世紀～14世紀前半の小規模な掘立柱建物や礎石建物、道路遺構が検出され、寺院などの宗教的な遺構は検出されず、谷戸全体からみると、最下部にあたり、谷戸の両端をつなぐ空間であった可能性が高いと報告されている。

《鎌倉城(図1-9)(御成町39番36地点)》

調査地点は無量寺ヶ谷の最奥部に位置する支谷の一つに立地し、2次にわたって調査が実施された。両調査はこの谷戸の平場のほぼ全域に及んだ。平場からは13世紀～14世紀前半頃の堂宇や庫裏と考えられる建物群が検出された。開山堂的な建物か。中でも基壇を有する礎石建物の床下には、火葬骨を充填した小型の曲げ物が埋納されていた。また北西側の山裾からは4基のやぐらが検出されており、小型寺院あるいは塔頭の構成要素を整えている。

上記、「无量寺跡」と「鎌倉城」の発掘調査からは、谷戸の北の支谷(図1-5・6)地点あたりに塔頭あるいは庫裏(私的空間)、谷戸の南支谷(図1-9)地点あたりに本堂ではないが、宗教施設(宗教的空間)、それらをつなぐ(図1-8)地点の道路や町屋(公共的空間)が展開していたようであることが分かる。とはいっても、谷戸全体の面積に対しての調査範囲はまだ少量といえよう。これらが、无量寺あるいは无量寿院であるとの証拠はどこにもないが、无量寺ヶ谷全体の様相がおぼろながらに見えてきたといえよう。蛇足であるが、谷戸の最深部にはまとまった平場があるが、未だ調査された地点はない。ここに本堂等の伽藍が展開されていたらとつい、想像を逞しくしてしまう。

以上、近隣の主だった調査事例を紹介したが、本遺跡の立地する周辺地域には多種にわたる中世遺跡が高密度で存在していることが理解されよう。

《参考文献》

- 『鎌倉廃寺事典』貫達人・川副武胤 1980年 有隣堂
- 『鎌倉の地名由来辞典』三浦勝男編 2005年9月 東京堂出版
- 『鎌倉55号「甘縄無量寿院考并北京律関東弘教序論」』大森順雄 1987年
- 『鎌倉市史 社寺編』1959年 鎌倉市・吉川弘文館
- 『都市鎌倉の中世史 吾妻鏡の舞台と主役たち』秋山哲雄 2010年8月 吉川弘文館
- 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8「無量寺跡」』田畑佐和子 1991年 鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉考古21号「無量寺跡出土の白かわらけについて」』田畑佐和子 1992年 鎌倉考古学研究所
- 『今小路西遺跡発掘調査報告書(御成町25番1外1筆地点)』2003年 有限会社博通
- 『無量寺跡発掘調査報告書(第2次調査・扇が谷一丁目26番74外)』2004年9月 株式会社博通
- 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21「無量寺跡」第2分冊(第1次調査・26番27外)』2005年3月 鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉城(No.87)発掘調査報告書(御成町39番36地点)』2006年3月 株式会社齊藤建設
- 『鎌倉城(No.87)第2次調査報告書』2007年9月 株式会社齊藤建設
- 『無量寺跡発掘調査報告書(第3次調査・26番89地点)』2007年3月 株式会社博通
- 『無量寺跡(第4次)発掘調査報告書(鎌倉市扇が谷一丁目26番14地点)』2008年8月 株式会社博通
- 『今小路西遺跡(No.201)発掘調査報告書(御成町171番1外地点)』2008年3月 株式会社齊藤建設

第二章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

調査は鎌倉市御成町176番7地点における個人住宅に伴う調査として鎌倉市教育委員会が主体となって実施された。平成17年7月18日～平成17年9月25日にわたって本調査が実施された。調査対象面積は55㎡である。調査は排土の都合上、南北2区画に分割して実施された。資料整理の際の遺跡の略記号はI N Eである。遺物は遺物収納箱26箱出土した。

調査経過

南部（Ⅰ区）を先に調査し、その後北部（Ⅱ区）を調査した。

- 平成17年7月18日 I区重機による表土掘削後。
- 7月20日 手掘りによる調査開始。表土層除去。
- 7月25日 1面より据甕1検出。
- 7月28日 1面全景撮影・測量。3級基準点移動し、調査地点の海拔測量基準点設置。
- 7月31日 2面まで掘り下げ。
- 8月1日 2面全景撮影・測量。
- 8月4日 3面板壁建物1検出。
- 8月8・9日 台風のため作業中断。
- 8月10日 3面全景撮影・測量。
- 8月11日 4面全景撮影・測量。
- 8月16日 5面全景撮影・測量。
- 8月18日 6面全景撮影・測量。
- 8月21日 I区調査区東壁土層測量。
- 8月22日 I区調査終了。4級基準点移動し、国土座標値との合成測量。
- 8月24日 重機によりI区埋め戻し。
- 8月25日 II区重機による表土掘削。II区調査開始。
- 8月28日 手掘りにより表土層除去。
- 8月30日 1面全景撮影・測量。2面まで掘り下げ。
- 9月4日 2面全景撮影・測量。
- 9月7日 3面全景撮影・測量。
- 9月11日 4面全景撮影・測量。
- 9月12日 4b面検出。
- 9月15日 4b面全景撮影・測量。5面まで掘り下げ。
- 9月20日 5面全景撮影・測量。6面まで掘り下げ。
- 9月22日 6面全景撮影・測量。6面下トレンチ設定し調査。
- 9月25日 調査終了。現場撤収。

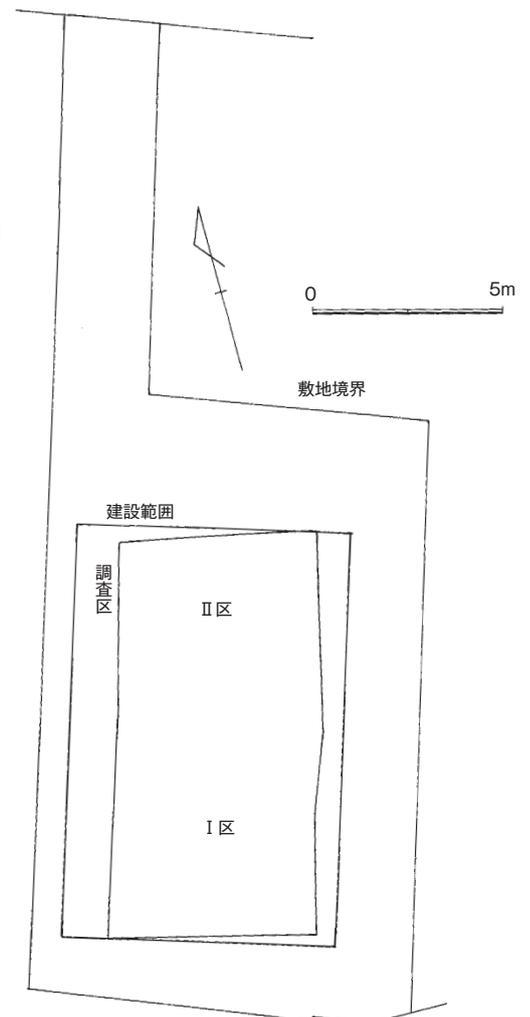


図2 敷地と調査区

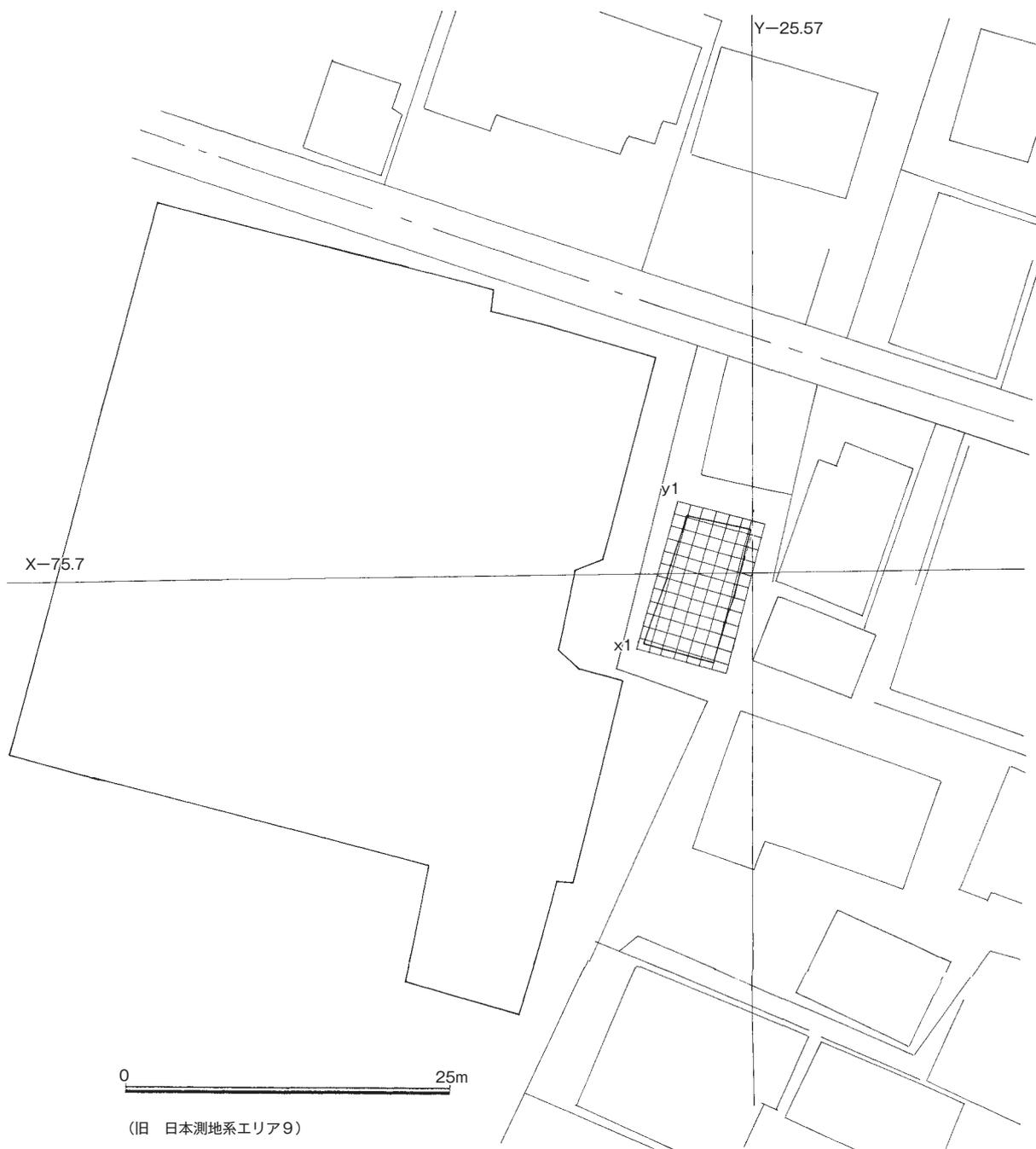


図3 遺跡位置図

2. 調査区の位置とグリッド配置 (図2・3・4)

敷地と建築範囲と調査区の関係は図2に示したように設定された。位置は北緯35度19分14秒、東経139度32分56秒である。

グリッドは調査区の形状に合わせて任意に設定した。(図3・4) グリッドと国土座標(エリア9)の関係は以下の通りである。世界測地系には国土地理院提供のソフトを使用して変換した。

A地点:グリッド(x 9.998、y 7.684) = 国土座標[旧日本測地系](X - 75698.2、Y - 25570.0) = 国土座標[世界測地系](X - 75041.514、Y - 25863.413)

B地点:グリッド(x 6.962、y 8.455) = 国土座標[旧日本測地系](X - 75701.3、Y - 25570.0) = 国土座標[世界測地系](X - 75344.609、Y - 25863.413)

C地点:グリッド(x 8.112、y 7.768) = 国土座標[旧日本測地系](X - 75700.0、Y - 25570.4) = 国土座標[世

界測地系] (X - 75343.309、Y - 25863.813)

D地点：グリッド (x 6.799、y 2.589) = 国土座標 [旧日本測地系] (X - 75700.0、Y - 25575.7) = 国土座標 [世界測地系] (X - 75343.309、Y - 25869.113)

グリッド x 軸は北から12度東に傾いている。なお、本文中では便宜上、グリッド x プラス方向を北として呼称し、正確な方位は各図に矢印で示している。

3. 基本土層 (図 43)

基本土層の測点は図 43 に記してある。現地表面は海拔 8.5 m 前後のほぼ平坦面。表土層は現地表面から 160 cm であった。1 面は海拔 6.9 m 前後、2 面は 1 面下約 20 ~ 30 cm、海拔 6.6 ~ 6.7 m 前後、3 面は 2 面下約 20 cm、海拔 6.4 ~ 6.5 m 前後、4 面は 3 面下 20 ~ 30 cm、海拔 6.2 m 前後、4 b 面は II 区のみを検出され、4 面下 10 cm、海拔 6.1 m 前後、5 面は 4 面下約 20 ~ 30 cm、海拔 5.9 ~ 6.0 m 前後、6 面は 5 面下 20 cm、海拔 5.7 m 前後に検出された。

6 面以下は II 区にトレンチを設定し、掘り下げた。土層注記は以下の表の通りである。

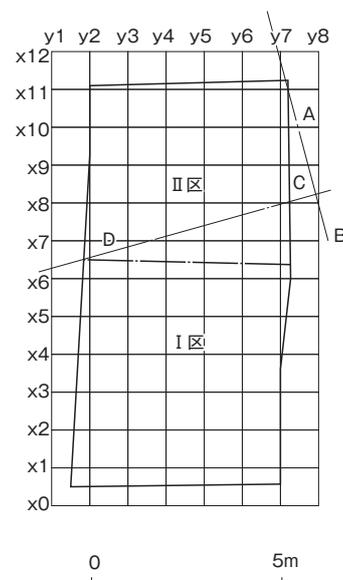


図 4 グリッド配置図

番号	色調	土質	内容	粘性	締り
1	暗灰褐色	粘質土層	1 ~ 5cm大の土丹(多)・炭化物・かわらけ片・木片(少)	ややあり	ややわるい
2	暗灰褐色	粘質土層	1 ~ 5cm大の土丹(やや多)・かわらけ・炭化物	ややあり	よい
3	暗灰褐色	粘質土層	1 ~ 3cm大の土丹(多)・かわらけ細片・炭化物	ややあり	よい
4	暗灰褐色	粘質土層	1 ~ 5cm大の土丹・炭化物・かわらけ片	あり	よい
5	暗褐色	粘質土層	全体に炭化物(多)・かわらけ片・1 ~ 5cm大の土丹・木片(ごく少)	あり	ややわるい
6	暗褐色	粘質土層	1 ~ 3cm大の土丹・かわらけ細片・炭化物(やや多)・木片(ごく少)	あり	よい
7	暗灰褐色	粘質土層	1 ~ 5cm大と10cm大の土丹(密・多)・炭化物・かわらけ細片・木片(ごく少)	なし	よい
8	-	有機物堆積層	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒(少)	-	わるい
9	暗灰褐色	粘質土層	かわらけ片・炭化物・0.5cm大の土丹・木片(少)	あり	よい
10	暗灰褐色	粘質土層	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒(少)	あり	ややわるい
11	-	有機物堆積層	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒(少)・貝殻細片(ごく少)・木片	あり	ややわるい
12	暗褐色	粘質土層	炭化物(多)・木片(多)・かわらけ片・0.5cm大の土丹(少)	あり	よい
13	暗灰褐色	粘質土層	炭化物・0.5cm大の土丹・木片・かわらけ片	あり	よい
14	暗灰褐色	粘質土層	0.5cm大の土丹・木片・炭化物	あり	ややわるい
15	暗灰褐色	粘質土層	3cm大の土丹(多)・木片・炭化物	あり	よい
16	黒褐色	粘質土層	かわらけ片・常滑片・炭化物・0.5 ~ 3cm大の土丹・木片・貝殻細片(ごく少)	あり	よい
17	黒褐色	粘質土層	炭化物・0.5cm大の土丹・木片・有機物	あり	ややわるい
18	暗褐色	粘質土層	かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹・貝殻細片(ごく少)	ややあり	よい
19	暗褐色	粘質土層	1 ~ 10cm大の土丹・木片・貝殻細片・炭化物	あり	ややわるい
20	暗褐色	粘質土層	炭化物・0.5cm大の土丹(少)・貝殻細片・木片	あり	とてもよい
21	黒褐色	粘質土層	目立った混入物なし	あり	よい
22	黒褐色	粘質土層	炭化物・木片・貝殻細片(少)	ややあり	ややよい
23	茶褐色	粘質土層	かわらけ片・小土丹粒(とても多)・炭化物	なし	とてもよい

番号	色調	土質	内容	粘性	締り
24	暗茶褐色	粘質土層	小土丹粒・かわらけ細片・炭化物(いずれも少)	あり	よい
25	茶褐色	粘質土層	3～10cm大の土丹(とても多)・かわらけ・炭化物	－	とてもよい
26	土丹地業層		細かく砕いた土丹による版築	－	とてもよい
27	暗褐色	粘質土層	かわらけ・炭化物・小土丹	あり	よい
28	土丹地業層		大土丹による地業	－	とてもよい
29	黒褐色	粘質土層	貝殻片・砂・炭化物・小土丹粒・木片・石等、混入物とても多い。	－	よい
30	黒灰色	粘質土層	貝殻片・砂・炭化物・0.5～3cm大の小土丹(特に多)・木片・石等、混入物とても多い。	－	よい
31	－	有機物堆積層	黒褐色粘土と混じり合う	－	－
32	暗褐色	粘質土層	貝殻細片・かわらけ片・小土丹粒	あり	よい
33	暗褐色	粘質土層	木片・かわらけ片・貝殻細片・0.5～5cm大の土丹・炭化物	なし・ザラザラしている	よい
34	暗褐色	粘質土層	かわらけ片・小土丹粒(混入物やや少ない)	つよい	わるい
35	黒灰色	粘質土層	炭化物・灰(共にとても多)・貝殻片・小土丹	ザラザラしている	よい

第三章 検出遺構と出土遺物

今回の調査の結果、当遺跡からは合計6面の遺構面が確認された。6面より下層は調査の安全を確保するため、サブトレンチを設定し行ったが、地山までには達せずに調査を終えた。

第1面 (図5)

第1面は現地表下160cm、海拔6.9m前後に検出された。ほぼ平坦な地業面である。部分的にしっかりとした地業が施され、南部は鎌倉石粒によって、北東部は土丹粒によって地業されている。据甕1個・土坑1基・Pit2口が検出された。また、調査区北西縁に南北幅210cmを測る落ち込みが検出されたが、そのほとんどが調査区外のため、井戸等の可能性があるが、詳細は不明である。

据甕1・出土遺物 (図6・7)

据甕1はグリッド(x6、y4)付近、海拔6.9m前後に検出された。常滑の大甕である。口縁部はその大半が消失しており、小破片が出土したにとどまるが、全体的には9割程度が遺存していた。甕内部の埋土の土層注記は以下の通りである。

1層：暗褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・0.5cm大の土丹粒・鎌倉石細粒を含む。粘性があり、締り良い。

2層：暗褐色粘質土 1層に似るが、炭化物がやや多く含まれ、締りやや悪い。

3層：暗褐色粘質土 かわらけ片・常滑片・炭化物・0.5～5cm大の土丹・茶褐色粘質土を含む。粘性あり、締りやや悪い。

4層：暗褐色粘質土 かわらけ片・炭化物・0.5～1cm大の土丹を含む。粘性あり、締り悪い。

常滑の甕は図7-1に実測図を載せている。年代は常滑編年第7形式(14世紀前半)にあたり、直径55cm、底径22.4cm、器高85cm、最大胴径87.2cmを測り、肩部分には三つ鱗の叩き目が施

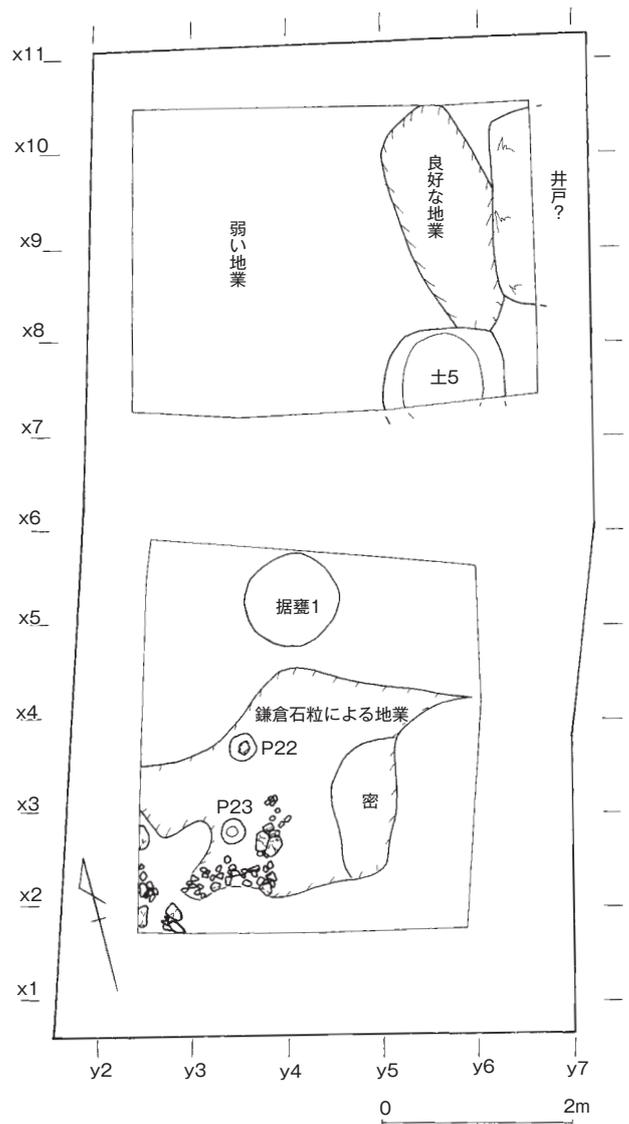


図5 1面遺構配置

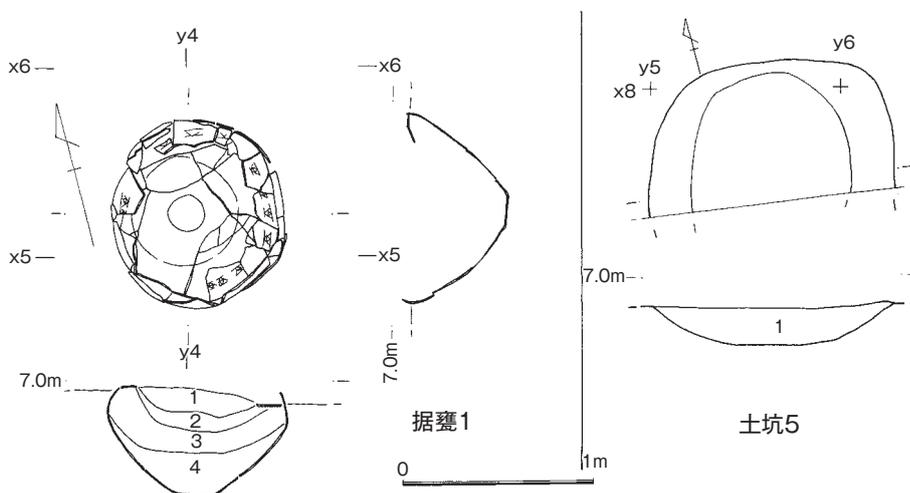
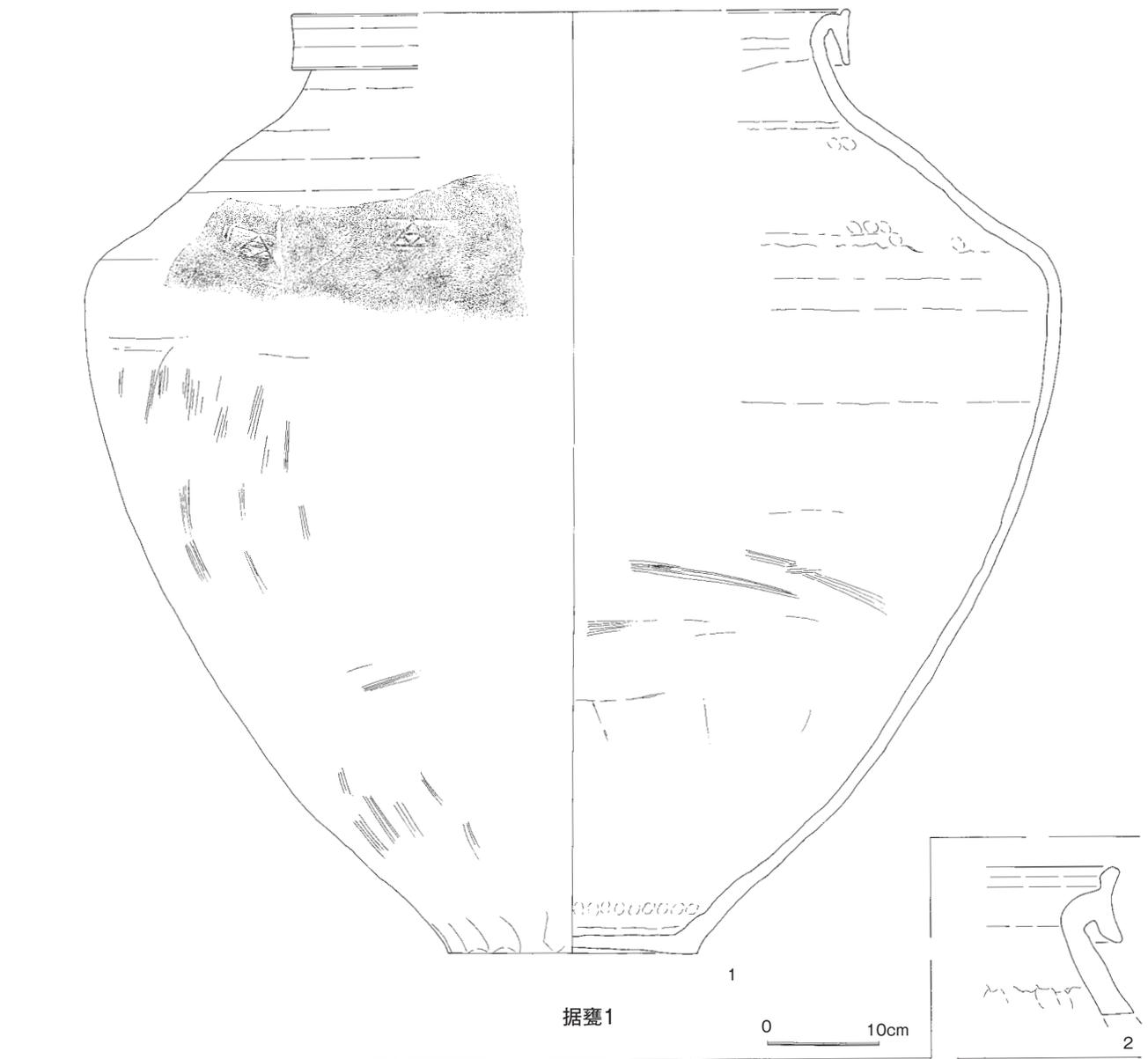


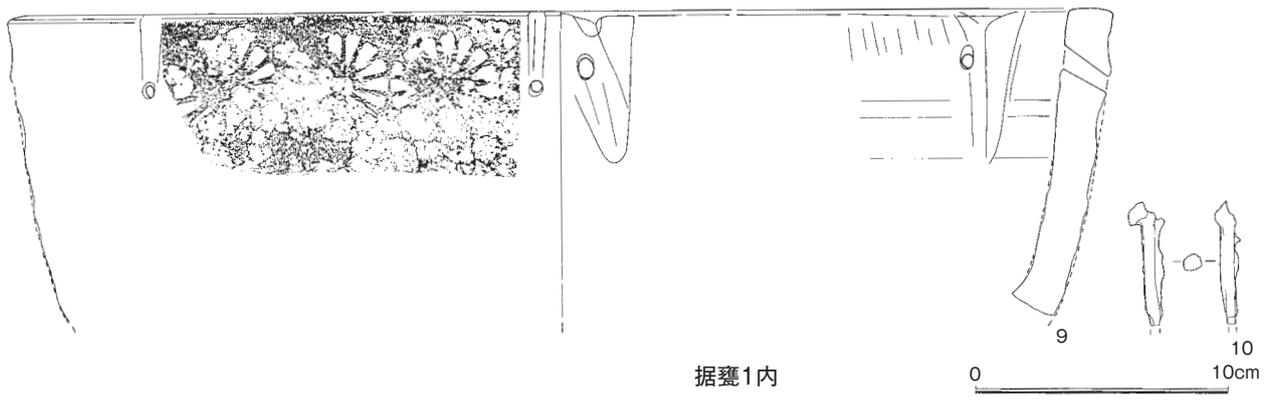
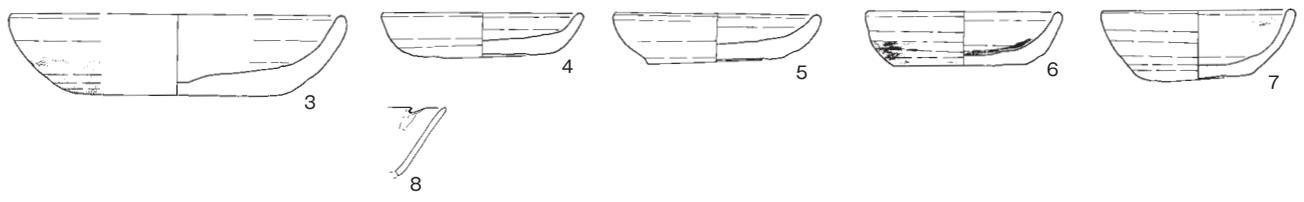
図6 1面据甕1・土坑5



据甕1

0 10cm

2



据甕1内

0 10cm

图7 据甕1 出土遺物

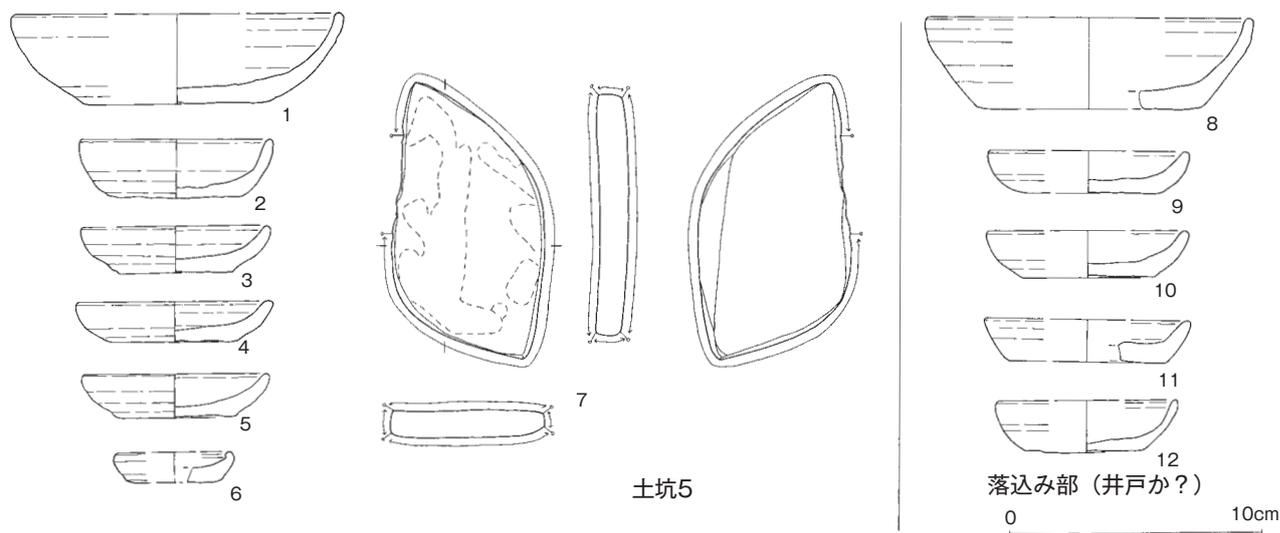


図8 土坑5出土遺物

されている。

図7-2は埋甕1の周囲、3～10は内部からの出土遺物である。2は常滑の甕の口縁部片。胎土は濃灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。器表は茶褐色を呈し、外面は自然釉が掛り、一部剥離している。3～7は轆轤成形のかわらけ。底部は糸切り。3は大皿、4～7は小皿である。7は器高が高く、深さがある。胎土は概ね淡橙色～肌色を呈し、粉質。3・6・7は器表に煤が付着している。各々寸法は以下の通りである。口径は(13.4) cm・8.0cm・8.2cm・7.8cm・7.7cm、底径8.3cm・5.6cm・5.2cm・5.3cm・4.5cm、器高は3.2cm・2.3cm・2.1cm・2.2cm・2.8cmである。8は瀬戸の輪花型入れ子の口縁部片である。小破片のため傾きは不確かである。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含み、硬質。焼成は良好。内面には自然釉が掛る。9は輪花型手焙り。器表は黒色処理され磨きが掛けられているが、著しく爆ぜている。菊花文スタンプが施されている。また、それぞれの輪花の頂点に孔が穿たれている。口径は(44.0) cmを測る。10は鉄製釘。

土坑5・出土遺物(図6・8)

土坑5はグリッド(x 8, y5)付近、海拔6.8 m前後に検出された。南部は調査区外であるが、平面形はおそらく円形あるいは楕円形を呈す。深さは検出面から20cm前後を測り、埋土は炭化物を非常に多く含む黒色粘質土で、粘土・かわらけ・小土丹・木片を含む。粘性があり、締り悪い。

図8-1～7は土坑5出土遺物である。1～6は轆轤成形のかわらけ。底部は糸切り。1は大皿、2～5は小皿、6は内折れかわらけである。大皿、小皿ともに底径は比較的小さく、器壁中位に強めの稜線を持ちそこから上方に角度を変えて立ち上がる。胎土は概ね淡橙色を呈し、微砂を含み粉質である。各々寸法は以下の通りである。口径は(13.2) cm・7.7cm・7.5cm・7.8cm・7.4cm (4.8) cm、底径は7.2cm・5.1cm・4.6cm・5.1cm・4.6cm・(3.2) cm、器高は3.6cm・2.4cm・1.9cm・1.7cm・1.8cm・1.2cmを測る。7は常滑の甕の胴部片で、周囲および両側面に研磨痕がある。

落込み部出土遺物(図8)

図8-8～12は調査区北西縁に検出された落込み(井戸か?)からの出土遺物である。轆轤成形のかわらけ。底部は糸切り。8は大皿、9～12は小皿である。胎土は8が橙色、9～12は肌色を呈し、微砂を含み粉質。10の器表には煤が付着している。各々寸法は以下の通りである。口径は(13.0) cm・(8.0) cm・(8.0) cm・(8.2) cm・(7.2) cm、底径は(9.0) cm・(5.5) cm・5.2cm・(6.2) cm・4.8cm、器高は3.6cm・

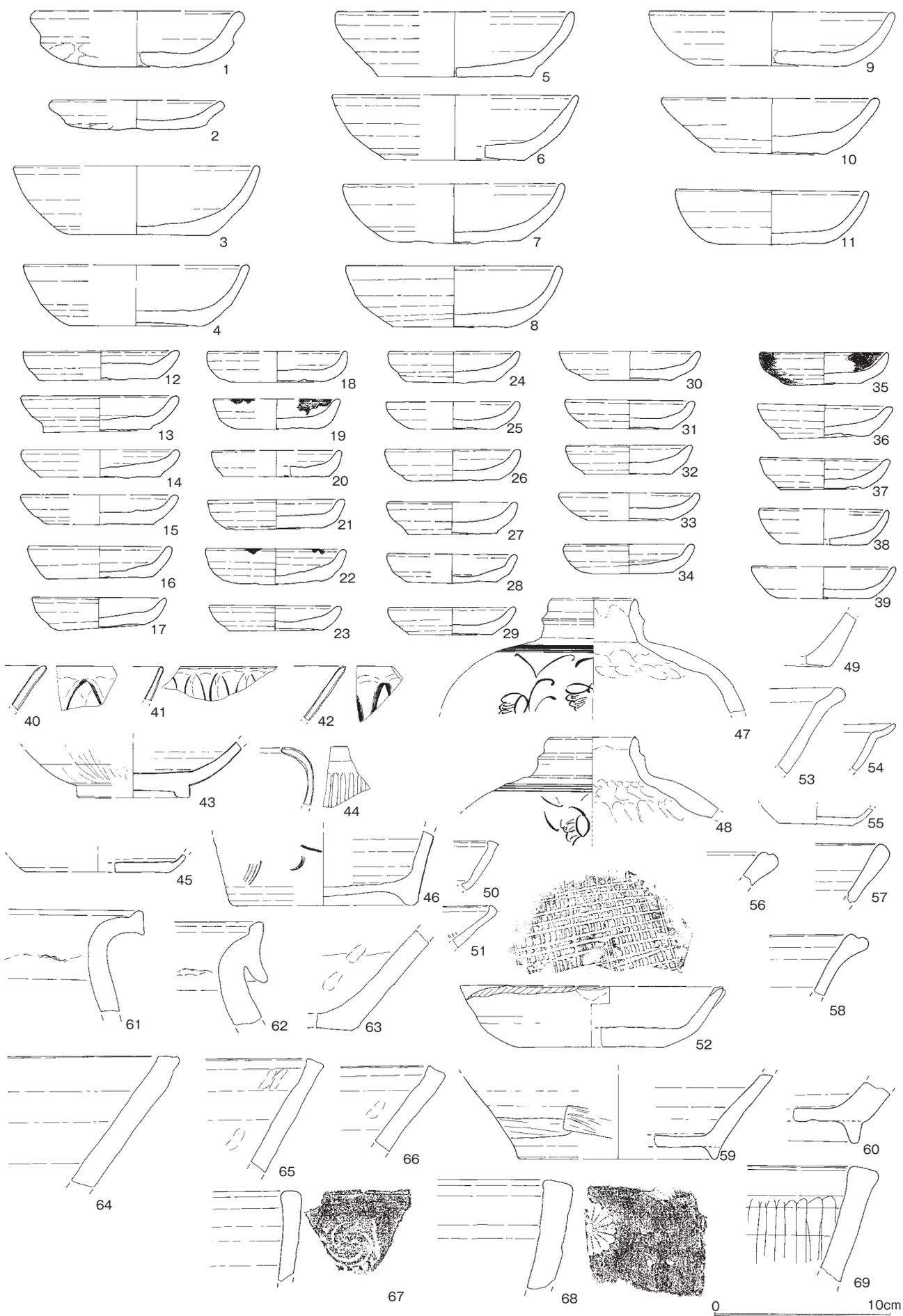


图9 1面出土遺物(1)

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
9	1	1面	-	かわらけ	手づくね	(12.2)	-	3.2	橙色系
9	2	1面	-	かわらけ	手づくね	(11.0)	-	1.7	橙色系
9	3	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	7.5	3.9	淡橙色系
9	4	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.8)	7.6	3.5	淡橙色系
9	5	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.6)	8.8	3.7	淡橙色系
9	6	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.0)	3.7	淡橙色系
9	7	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.6)	7.6	3.4	淡橙色系
9	8	1面	-	かわらけ	轆轤成形	13.3	6.8	3.5	淡橙色系
9	9	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.3)	3.1	淡橙色系
9	10	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	6.5	3.2	淡橙色系
9	11	1面	-	かわらけ	轆轤成形	11.0	6.5	3.1	肌色系
9	12	1面	-	かわらけ	轆轤成形	8.9	6.9	1.7	淡橙色系
9	13	1面	-	かわらけ	轆轤成形	9.0	6.2	2.1	橙色系
9	14	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.0)	(6.9)	1.6	淡橙色系
9	15	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.0)	(6.2)	1.7	淡橙色系
9	16	1面	-	かわらけ	轆轤成形	8.2	6.0	1.9	肌色系
9	17	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.1	1.9	肌色系
9	18	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.6	1.7	淡橙色系
9	19	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	5.2	1.8	淡橙色系
9	20	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	6.0	1.5	橙色系
9	21	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.4	1.7	淡橙色系
9	22	1面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.4	2.0	淡橙色系
9	23	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.5	5.4	1.5	淡橙色系
9	24	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.5	5.0	1.8	橙色系
9	25	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.0)	1.6	淡橙色系
9	26	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.3	1.8	淡橙色系
9	27	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.1	1.8	淡橙色系
9	28	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	5.0	1.7	淡橙色系
9	29	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.3	4.8	1.6	淡橙色系
9	30	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	4.6	1.7	淡橙色系
9	31	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.0	1.6	淡橙色系
9	32	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.2	5.0	1.7	淡橙色系
9	33	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	4.6	1.6	淡橙色系
9	34	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.1	1.7	淡橙色系
9	35	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	4.3	1.9	橙色系
9	36	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	4.8	2.0	淡橙色系
9	37	1面	-	かわらけ	轆轤成形	7.2	4.7	1.8	淡橙色系
9	38	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	5.0	2.0	橙色系
9	39	1面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(5.2)	1.8	肌色系

1.7cm・1.9cm・1.7cm・2.1cmを測る。

1面検出Pit (図5)

1面からは2口のPitが検出された。Pitはいずれも南部の良好な地業面に作られていた。平面形は直径30cm前後を測る円形を呈し、深さは検出面から10cm前後を測る。Pit22の底部には上面が平らな土丹が据えられていた。

1面出土遺物 (図9・10)

図9-1～39はかわらけである。1・2は手づくね。その他は轆轤成形、底部は糸切りである。1・2は天地返し混入品であろう。3～10は大皿、11は中皿、12～39は小皿。12～17は底径が広く、器壁は外向きにやや直線的に立ち上がる。3～11・18～39は概ね底径が小さく、器壁は丸味を持って立ち上がる。寸法は以下表のとおりである。胎土は微砂を含み粉質である。19・22・26・35は器表に煤が付着し、灯明皿である。

図9-40～46は舶載磁器である。40～43は青磁蓮弁文碗の口縁部片。いずれも釉調は緑青色を呈し、光沢は良い。微気泡やや多く、失透気味。素地は灰味白色を呈し、緻密。43の底径は(6.4)cmを測る。44は青磁の小壺である。外面には蓮弁文が施されている。釉調は緑青色を呈し、光沢は良い。微気泡

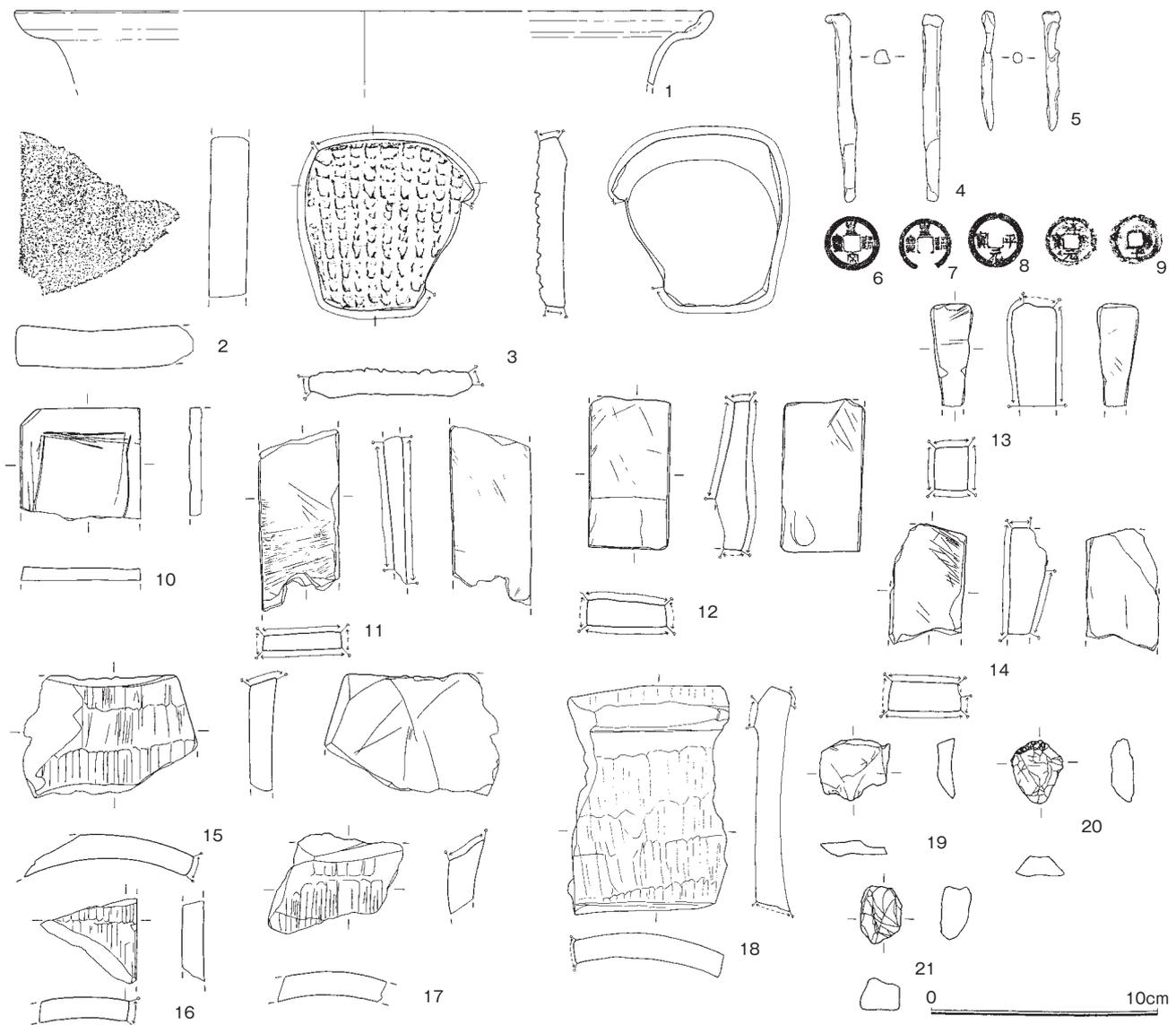


図10 1面出土遺物(2)

多く失透している。内側面は釉層薄い。素地は灰色を呈す。45は白磁口元皿の底部片。釉調は青味白色を呈し、光沢・透明度ともに良い。素地は白色を呈す。底径は(8.0)cmを測る。46は青白磁梅瓶の底部片。渦紋が描かれている。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度ともに良い。素地は灰味白色を呈す。外底面は無釉。底径は(10.2)cmを測る。

図9-47~55は瀬戸である。いずれも灰釉。胎土は灰白色~白褐色を呈す。47・48は梅瓶。接合できない小破片が複数ある。49は壺の底部片。50~52はおろし皿。52は口縁の一部が研磨され磨り減っている。52の口径は(15.0)cm、底径は8.2cm、器高は3.5cmを測る。53・54は折縁鉢の口縁部片。55は入れ子の底部片。底径は4.2cmを測る。

図9-56~60は山茶碗窯系こね鉢である。56~58は口縁部片。56・58の口縁上端には深く沈線がめぐる。59・60は底部片。59の内面には厚く自然釉が掛る。底径は(11.4)cmを測る。

図9-61~66は常滑。61~63は甕、64~66はこね鉢である。概ね胎土は灰色を、器表は赤茶褐色を呈す。64の内面は磨滅している。

図9-67~69は瓦質手焙りである。胎土は灰色を呈し、石粒を多く含み粗い。67の器表は黒色処理及び磨かれ、巴文スタンプが施されている。68・69の器表は磨かれている。68は菊花文スタンプが施され、

おそらく輪花型を呈す。

図10-1は伊勢系土鍋。口径は(31.0) cmを測る。口縁は外に大きく引き出され端部は内側に折り返されている。内面には煤が付着している。胎土は肌色を呈し、胎芯は黒灰色に残る。微砂、金雲母を含み、硬く焼き締まる。

図10-2は平瓦。胎土は黒灰色を呈し、硬質。小破片のため叩き目は不明。

図10-3は研磨痕のある瀬戸おろし皿の破片。

図10-4・5は鉄製釘。図10-6～9は銭。6・7は皇宋通宝(初鑄1038年)、8は(治)平元寶(初鑄1064年)、9は淳熙元寶(背・十)(初鑄1174年)である。

図10-10～21は石製品。10は硯。一端割れた破片を再加工しようとしているが、完成していない。11～14は砥石。11は鳴滝産仕上げ砥。12～14は中砥。12・14は上野産、13は伊予産。15～18は滑石鍋転用品。いずれも外面には煤が付着している。用途は不明。19～21は火打石。19・20は透明な白色、21は不透明の白色。

図示したものの他に、スラグ1点(172.7 g)、骨の小破片8点が出土している。骨は小破片のため詳細は不明だが、人の歯が2点(大臼歯1点・切歯1点)含まれている。

第2面(図11)

第2面は1面下20～30cm、海拔6.6～6.7m前後に検出された。土丹地業が部分的に施されている。溝1条・柱穴列1列・土坑1基・Pit1口が検出された。土坑6北側の一帯の土丹地業は大土丹が使用されていた。

溝1・出土遺物(図12・13)

溝1はグリッド(x5、y5)付近、海拔6.6m前後に検出された。検出し得た全長は3m35cmを測り、調査区南東隅で東に曲がり、調査区外へと延びている。上端幅50cm、下端幅40cm、深さは検出面から10cm前後を測り浅い。また、底面レベルは一定している。底部からは板材や杭が検出されているが、護岸施設の一部の可能性はある。南北軸線方向はN-8°-Eである。埋土は暗褐色粘質土で、かわらけ片・0.5～1.0cm大の土丹粒・鎌倉石粒・炭化物を含み、粘性があり、締りはやや悪い。

図13は溝1出土遺物である。1～4はかわらけである。轆轤成形、底部は糸切りである。3・4は深いタイプ。胎土は肌色を呈し、微砂を含み、粉質。5は瀬戸の輪花型入れ子。小破片のため傾きは不確か。胎土は灰色を呈し、堅緻。

柱穴列1(図12)

柱穴列1はグリッド(x11、y2)付近、海拔6.6

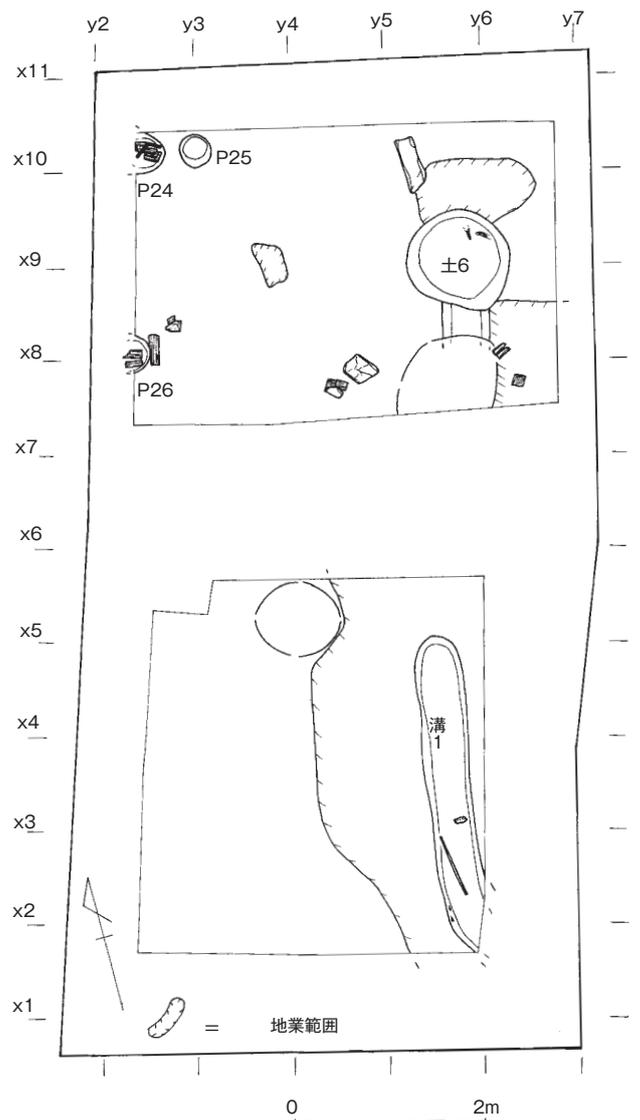


図11 2面遺構配置図

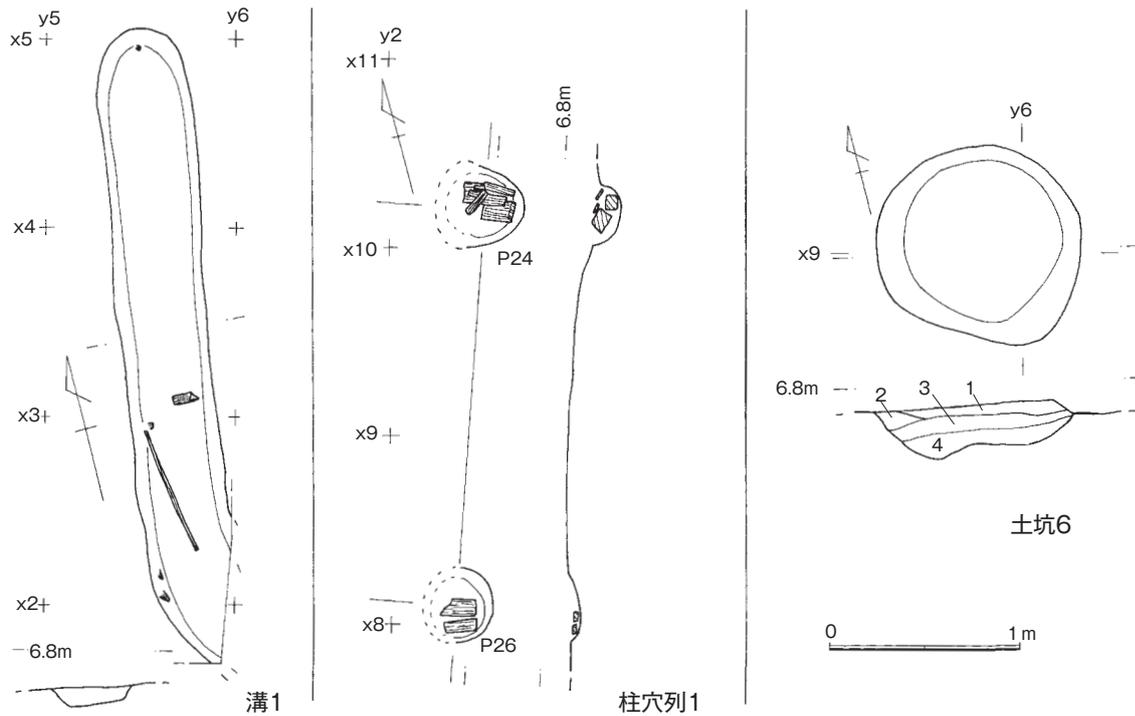


図12 2面溝1・柱穴列1・土坑6

m前後に検出された。2口の柱穴が南北方向に並んでいる。この柱穴列は掘立柱建物の一部であろう。さらに北・西・南に展開するが、調査区外のためその全様は不明である。柱穴間の距離は芯々で210cmを測る。柱穴は平面形が直径40cm前後の円形を呈し、深さは検出面から10cm前後を測り浅い。当該面より上層からの掘り込みである可能性が高い。柱穴内部には複数の礎板が遺存している。南北軸線方向はN-20°-Eである。

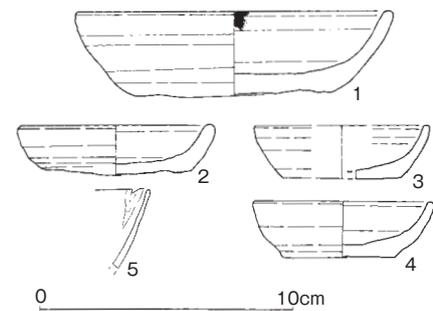


図13 溝1出土遺物

土坑6 (図12・14)

土坑6はグリッド(x9、y6)付近、海拔6.7m前後に検出された。平面形は直径110cm前後の不整円形を呈し、深さは検出面から26cmを測り、西部が深い。埋土の土層注記は以下の通り。

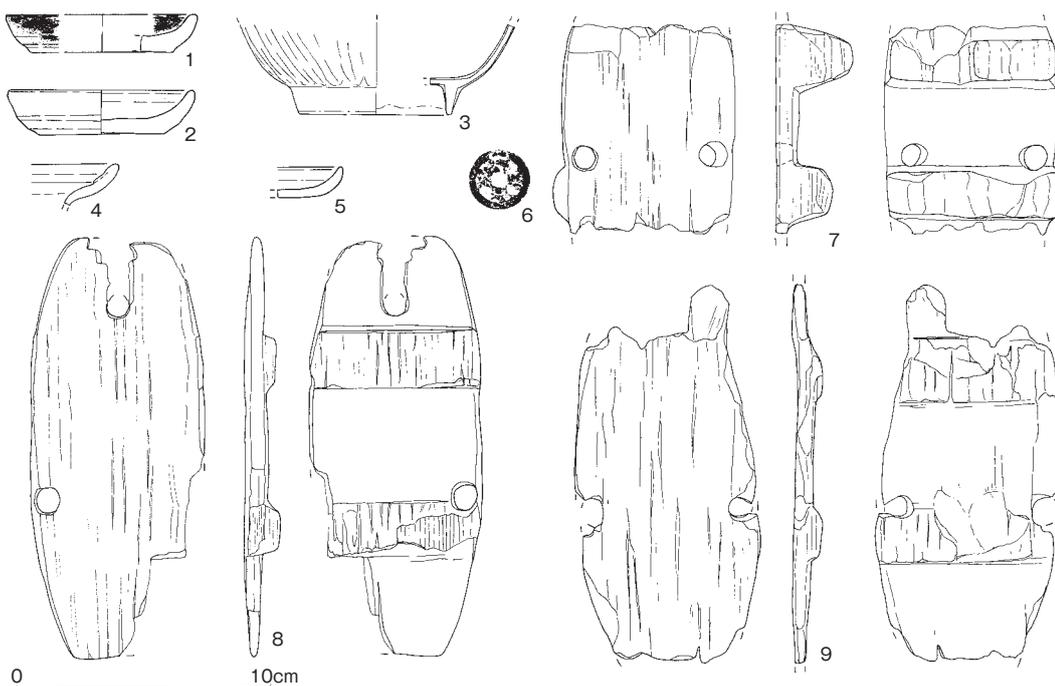


図14 土坑6出土遺物

1層：黒色粘質土 炭化物をととても多く含み、木片・1～3cm大の土丹粒を含む。粘性があり、締りは悪い。
 2層：暗茶褐色粘質土 3cm大の土丹・木片・かわらけ片を含む。粘性が強く、締り悪い。
 3層：黒灰色粘質土 炭化物・3cm大の土丹をいずれも少量含む。粘性があり、締り良い。
 4層：黒灰色粘質土 炭化物を多く、3cm大の土丹をやや多く含み、かわらけ片・木片を含む。粘性

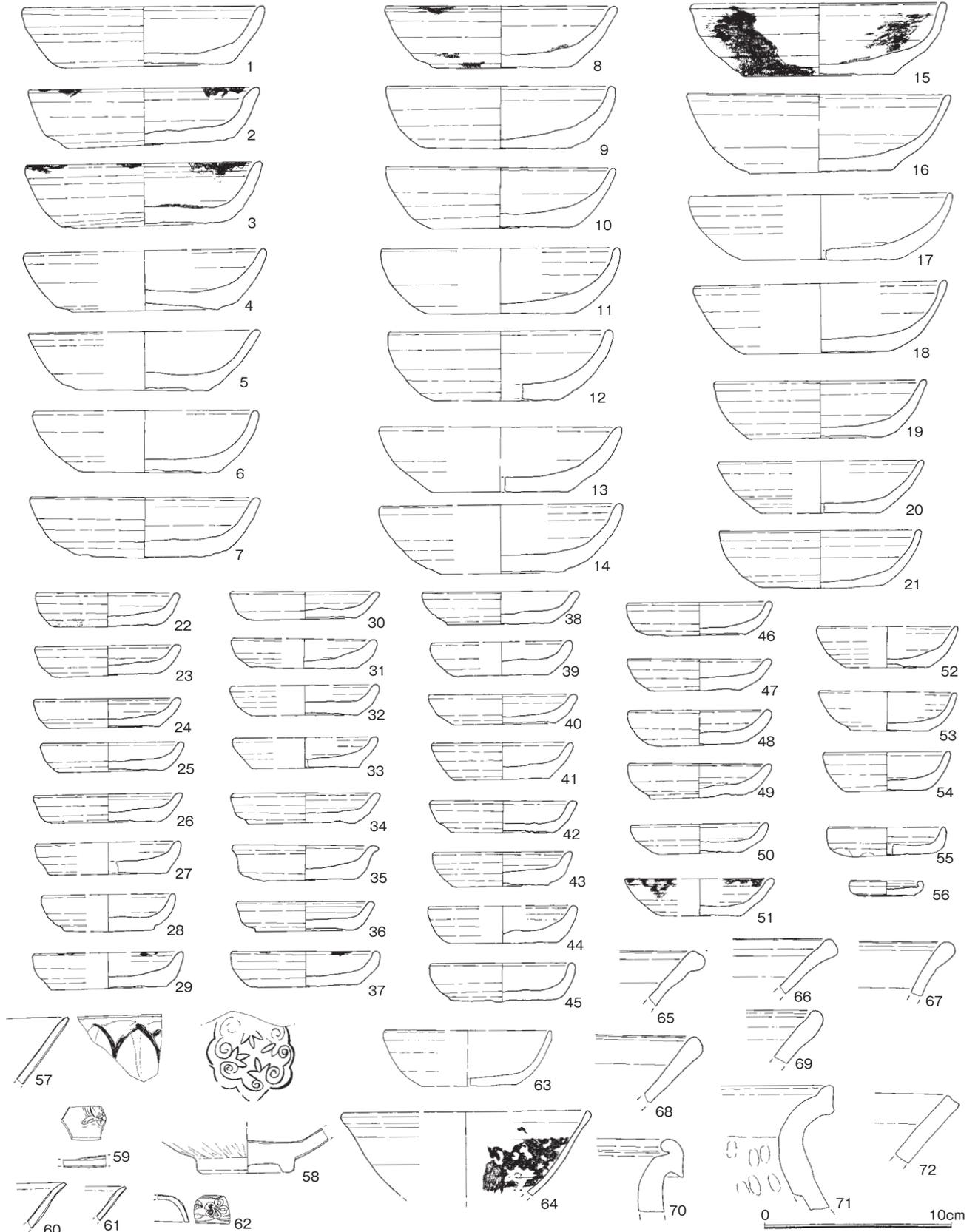


図15 2面出土遺物(1)

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
15	1	2面	-	かわらけ	轆轤成形	13.0	9.2	3.2	橙色系
15	2	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.4	8.2	3.2	橙色系
15	3	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.7	8.6	3.4	肌色系
15	4	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	7.8	3.3	肌色系
15	5	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.4)	7.2	3.2	肌色系
15	6	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	7.4	3.4	淡橙色系
15	7	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.3	7.5	3.3	淡橙色系
15	8	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.4	7.5	3.3	肌色系
15	9	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.3	7.8	3.4	肌色系
15	10	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.3	7.7	3.3	肌色系
15	11	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.8)	8.0	3.5	肌色系
15	12	2面	-	かわらけ	轆轤成形	12.0	(6.8)	3.8	淡橙色系
15	13	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(7.4)	3.5	橙色系
15	14	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(6.8)	3.7	肌色系
15	15	2面	-	かわらけ	轆轤成形	13.8	8.4	3.9	淡橙色系
15	16	2面	-	かわらけ	轆轤成形	14.1	8.1	4.3	橙色系
15	17	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)			肌色系
15	18	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.6)	7.8	3.7	肌色系
15	19	2面	-	かわらけ	轆轤成形	11.4	7.1	3.1	肌色系
15	20	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.0)	(6.2)	3.2	肌色系
15	21	2面	-	かわらけ	轆轤成形	10.8	6.6	3.1	肌色系
15	22	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.7	1.8	肌色系
15	23	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.7	1.7	肌色系
15	24	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.8	1.6	肌色系
15	25	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.5	1.6	肌色系
15	26	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.8	1.5	肌色系
15	27	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(6.2)	1.7	肌色系
15	28	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	(4.8)	2.0	淡橙色系
15	29	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.1)	6.2	2.0	肌色系
15	30	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.7	1.5	肌色系
15	31	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.6	1.6	淡橙色系
15	32	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.6	1.6	肌色系
15	33	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.8	1.7	肌色系
15	34	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.7	1.7	肌色系
15	35	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.5	2.0	肌色系
15	36	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.1	1.6	肌色系
15	37	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.7	2.0	肌色系
15	38	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.4	5.5	1.8	肌色系
15	39	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	5.0	1.8	肌色系
15	40	2面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.4	1.6	淡橙色系
15	41	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.1	2.0	肌色系
15	42	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.4	1.7	肌色系
15	43	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.5	5.1	1.9	淡橙色系
15	44	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	6.0	2.0	肌色系
15	45	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.6	2.1	肌色系
15	46	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.3	1.8	肌色系
15	47	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	4.8	1.7	橙色系
15	48	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.0	2.0	肌色系
15	49	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.1	1.9	肌色系
15	50	2面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	4.4	1.6	淡橙色系
15	51	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(4.4)	2.0	淡橙色系
15	52	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(4.8)	2.2	淡橙色系
15	53	2面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	4.2	2.1	淡橙色系
15	54	2面	-	かわらけ	轆轤成形	6.8	4.5	2.1	肌色系

があり、締りやや良い。

図14は土坑6出土遺物である。1・2はかわらけの小皿。轆轤成形、底部は糸切り。器壁中位に稜を持ち、そこから上方に立ち上がる。胎土は肌色を呈し、微砂を含み粉質。器表には全体的に煤が付着している。3は青磁蓮弁文折縁鉢の底部片である。底径は(6.0)cmを測る。釉調はくすんだ緑青色を呈し、微気泡多く、

白濁し失透している。光沢は良い。素地は灰色を呈し、緻密。4は伊勢系土鍋の口縁部片。横に引き出された口縁は端部が内側に折り返されている。胎土は白褐色を呈し、胎芯は黒灰色に残る。金雲母・微砂を多く含む。5は白かわらけ。手づくねである。胎土は白色を呈し、水簸され緻密。6は祥符元寶(初鑄1009年)。7～9は木製の連歯下駄。8の寸法は長さ16.7cm、幅6.7cm、高さ[1.4]cmを測る。7・9は破片のため詳細は不明だが、おそらく、8と同様な寸法であろう。特に9は歯の減り具合から7と対であった可能性が高い。図示したもの他にシカの上腕骨の破片1点、ウメの果核1点が出土した。

2面検出Pit (図11)

2面からは、柱穴列1の他にPitが1口検出された。Pit25はグリッド(x10、y3)付近、海拔6.6m前後に検出された。平面形は直径35cmの円形を呈し、深さは検出面から20cm前後を測る。

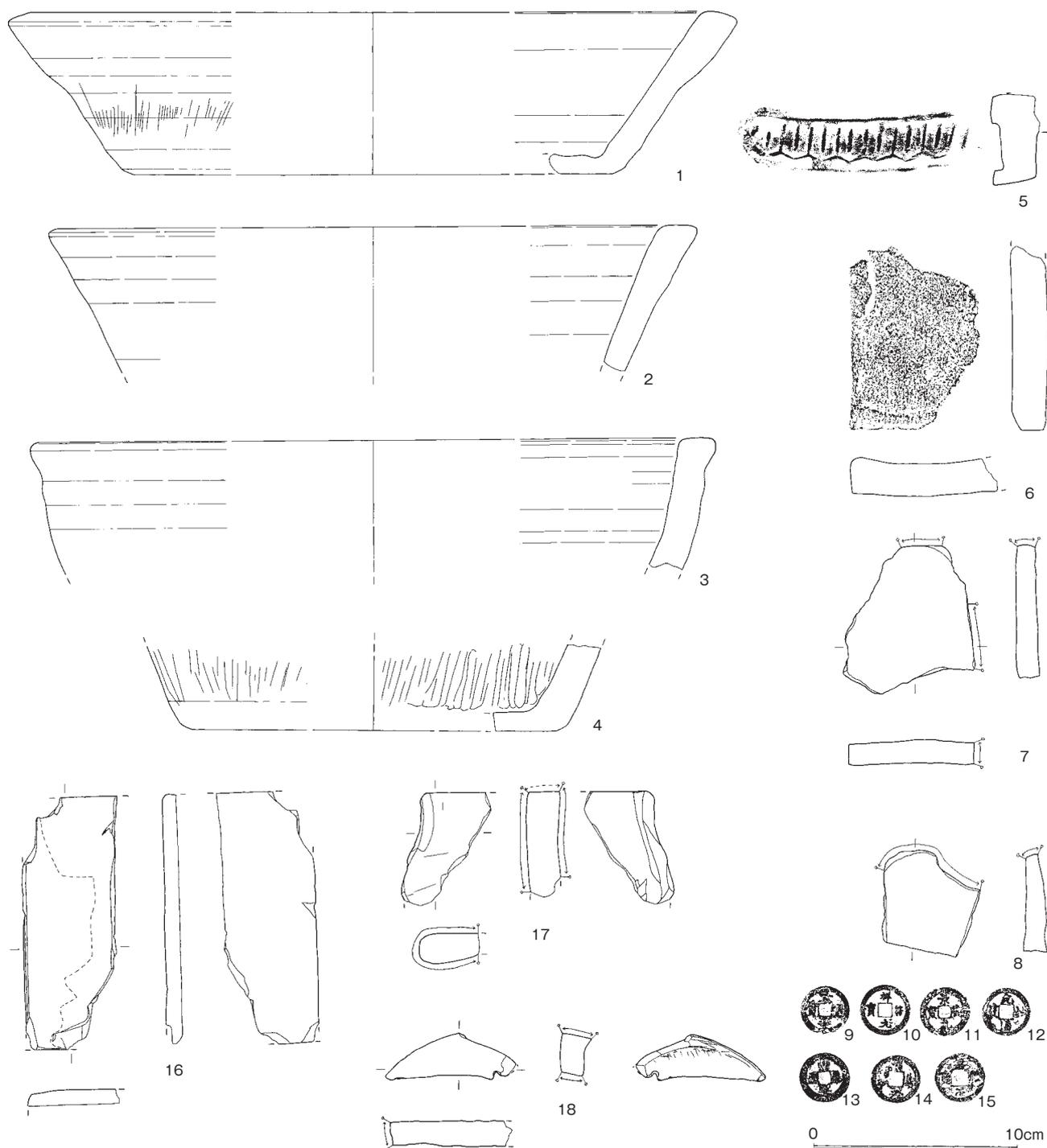


図16 2面出土遺物(2)

2面出土遺物 (図 15 ~ 17)

図 15 ~ 17 は 2 面覆土出土遺物である。図 15 - 1 ~ 54 はかわらけである。轆轤成形、底部は糸切り。1 ~ 18 は大皿、19 ~ 21 は中皿、22 ~ 54 は小皿である。15 ~ 18 の大皿、19 ~ 21 の中皿、52 ~ 54 の小皿は薄手丸深型系。22 ~ 27 の小皿は底径が広く、器高が低く浅いタイプである。その他は概ね側面観が丸味を帯びた逆台形を呈し、厚手である。また、35 の小皿は口縁端部が外反し、特殊な形状である。胎土は概ね微砂を含み粉質。胎土の色調・寸法は表のとおりである。2・3・8・15・17・29・37・51 は煤が付着しており、灯明皿である。

図 15 - 55 は特殊かわらけである。手づくね成形。器壁は垂直に立ち上がる。口径 6.4cm、底径 6.0cm、器高 1.5cm を測る。胎土は肌色を呈し、微砂を含み、硬く焼き締まっている。図 15 - 56 は内折れかわらけ。轆轤成形、底部は糸切り。口径 4.0cm、底径 3.1cm、器高 0.8cm を測る。胎土は肌色を呈し粉質。

図 15 - 57 ~ 62 は舶載磁器。57・58 は青磁蓮弁文碗。釉調は、57 は青緑色を呈し、光沢・透明度共に良い。58 は緑青色を呈し、光沢は良いが、微気泡多く失透している。素地は共に灰色を呈す。59 は青磁双魚文鉢の底部片。釉調は緑青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈す。60・61 は白磁口兀皿の口縁部片。60 の口縁部には漆が付着している。覆輪の痕跡であろう。釉調は灰味白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰味白色を呈し、緻密。62 は青白磁合子の印花文蓋。型作り。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は白色を呈し、緻密。

図 15 - 63 は瀬戸の入れ子。胎土は灰色を呈し、白色石粒を含みやや粗い。口径 (9.0) cm、底径 (5.0) cm、器高 3.0cm を測る。図 15 - 64 は美濃系山茶碗である。口径は (13.4) cm を測る。胎土は灰白色を呈し、

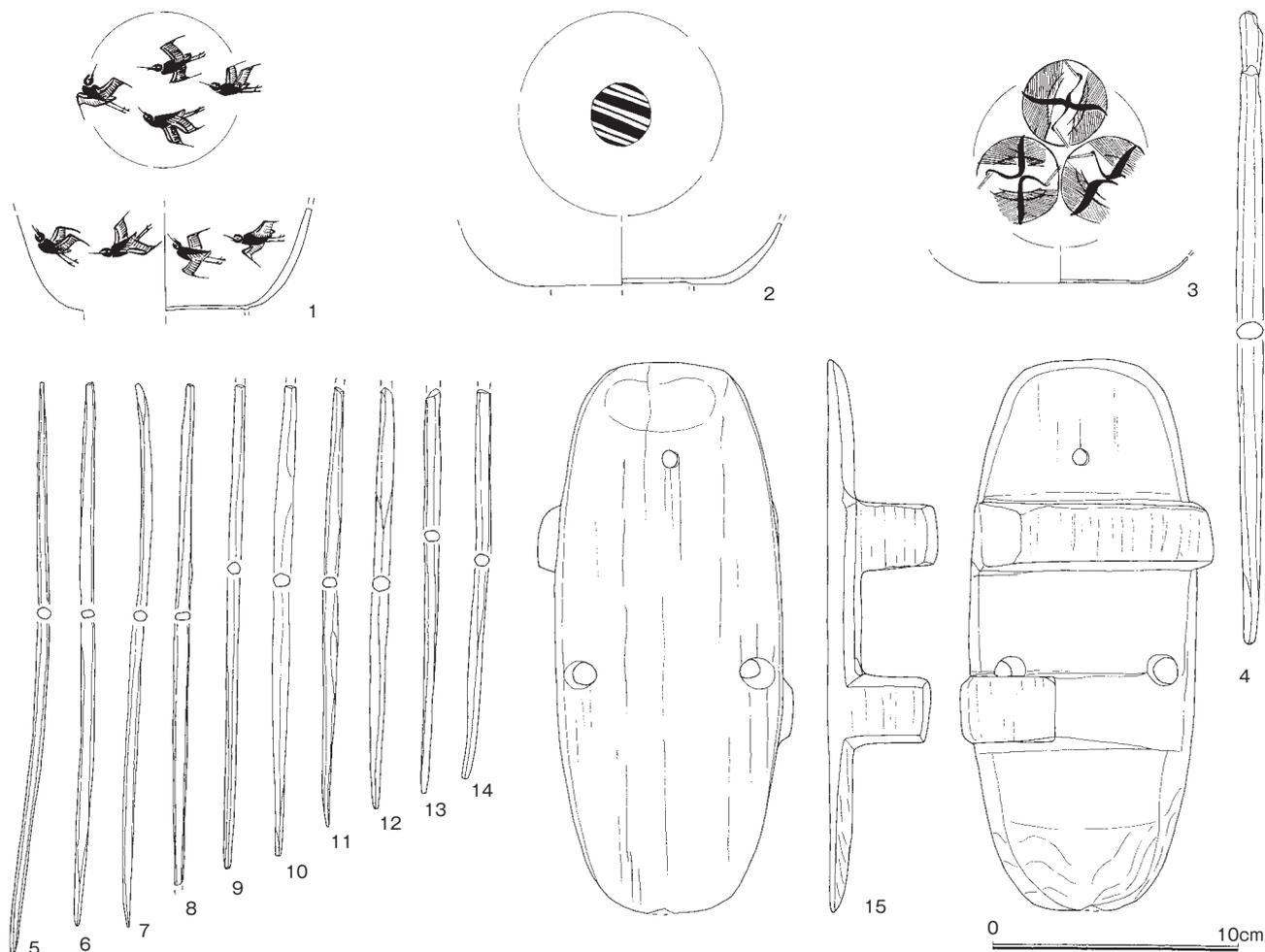


図 17 2 面出土遺物 (3)

緻密。硬く焼き締まる。内面には漆が付着している。

図15-65～69は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片である。胎土は灰色を呈し、石粒等多く含み粗い。65～68は口縁が肥厚している。内面を中心に自然釉が掛る。

図15-70～72は常滑である。70・71は甕の口縁部片、72は甕の口縁部片である。70は縁帯の幅の狭いn字口縁、71は上方に摘まみ出されるタイプの口縁である。72の口縁端部には浅い沈線状の窪みが廻る。胎土は濃灰色を呈し、石粒を含み粗く、硬質。70・72の内面には自然釉が厚く掛る。

図16-1～4は瓦質手焙り。胎土は微砂・石粒を多く含み粗く脆い。3は淡橙色、その他は黒灰色を呈す。2は器壁上位に孔が穿たれている。1～3の内面はナデ調整、外面は1は篋調整、4は縦位の磨き、2・3はナデ調整。底部は離れ砂痕がある。

図16-5・6は瓦。5は軒平瓦の瓦当部。上面に研磨痕がある。下向剣頭文。6は平瓦。

図16-7・8は研磨痕のある陶片。7は常滑の甕の破片、8は山茶碗窯系こね鉢の破片である。割れ口に研磨痕がある。

図16-9～15は銭。太平通宝(初鑄976年)・祥符元寶(初鑄1009年)・景祐元寶(初鑄1034年)・元祐通寶(初鑄1086年)・元祐通寶・判読不明2枚である。

図16-16～18は石製品。16は硯の破片。裏面に漆が付着している。17は砥石。伊予産中砥。18は滑石鍋転用品。用途は不明。外側面には煤が厚く付着している。

図17-1～3は漆器。1・2は椀、3は皿である。いずれも黒漆塗りに朱漆で手描きの文様が描かれている。1は千鳥が内外側面及び内底面に飛んでいる。2は内底面中央に縞模様の円。3は内底面に鶴の文様が描かれている。

図17-4～15は木製品。4はまな箸。5～14は箸。15は連歯下駄。長さ22.6cm、幅9.2cm、高さ4.5cmを測る。

また、図示したもの他に骨が出土している。内訳はウマ:中足骨1・指骨(基節骨)1、ウシ:肩甲骨[1]、イヌ:橈骨1・肩甲骨[1]・脛骨[1]・歯1、小動物:大腿骨1、不明:寛骨[1]・腓骨[1]、サメ:椎骨[1]、小破片12である。

第3面(図18)

第3面は2面下20cm、海拔6.4～6.5m前後に検出された。全体に強弱はあるものの、調査区南部は鎌倉石粒、調査区北部は土丹により地業されていた。また、調査区北西隅の一角は複数回の版築が確認された。落込み1ヶ所・板壁建物1棟・掘立柱建物1棟・土坑3基・Pit9口が検出された。

板壁建物1、落込み1・出土遺物(図19・20～22)

落込み1・板壁建物1はグリッド(x4、y4)付近、

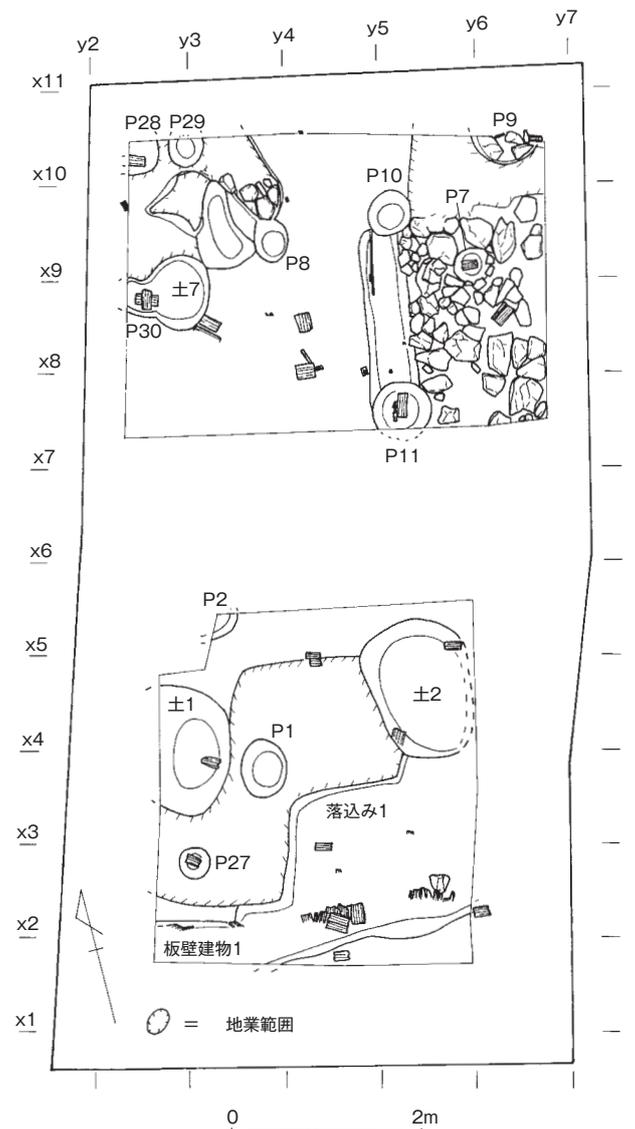
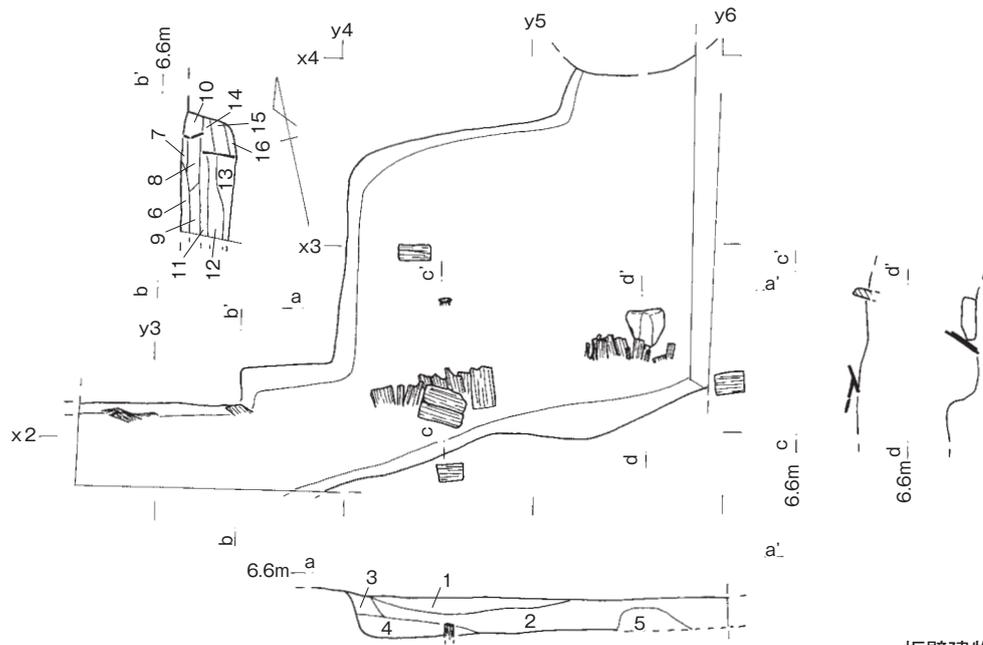
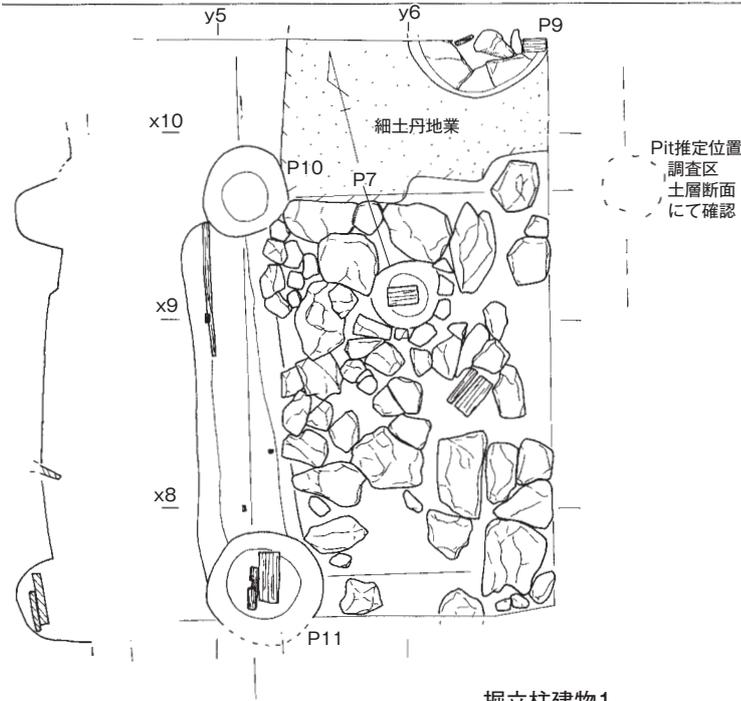


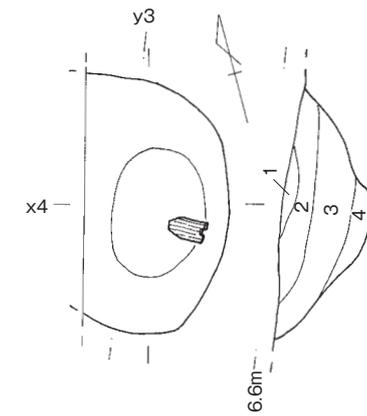
図18 3面遺構配置図



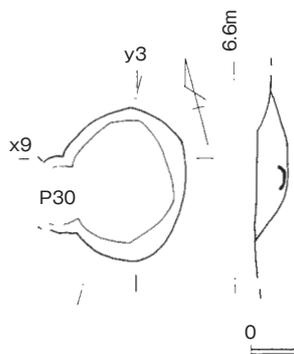
板壁建物1、落込み1



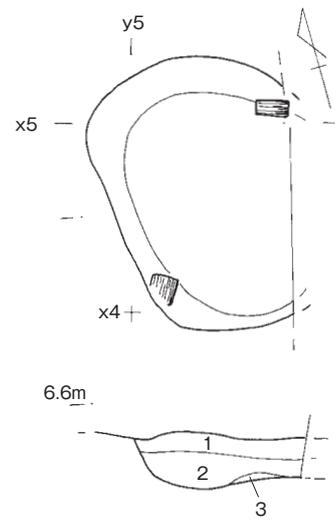
掘立柱建物1



土坑1



土坑7



土坑2

図19 3面板壁建物1・落込み1、掘立柱建物1・土坑1・2・7

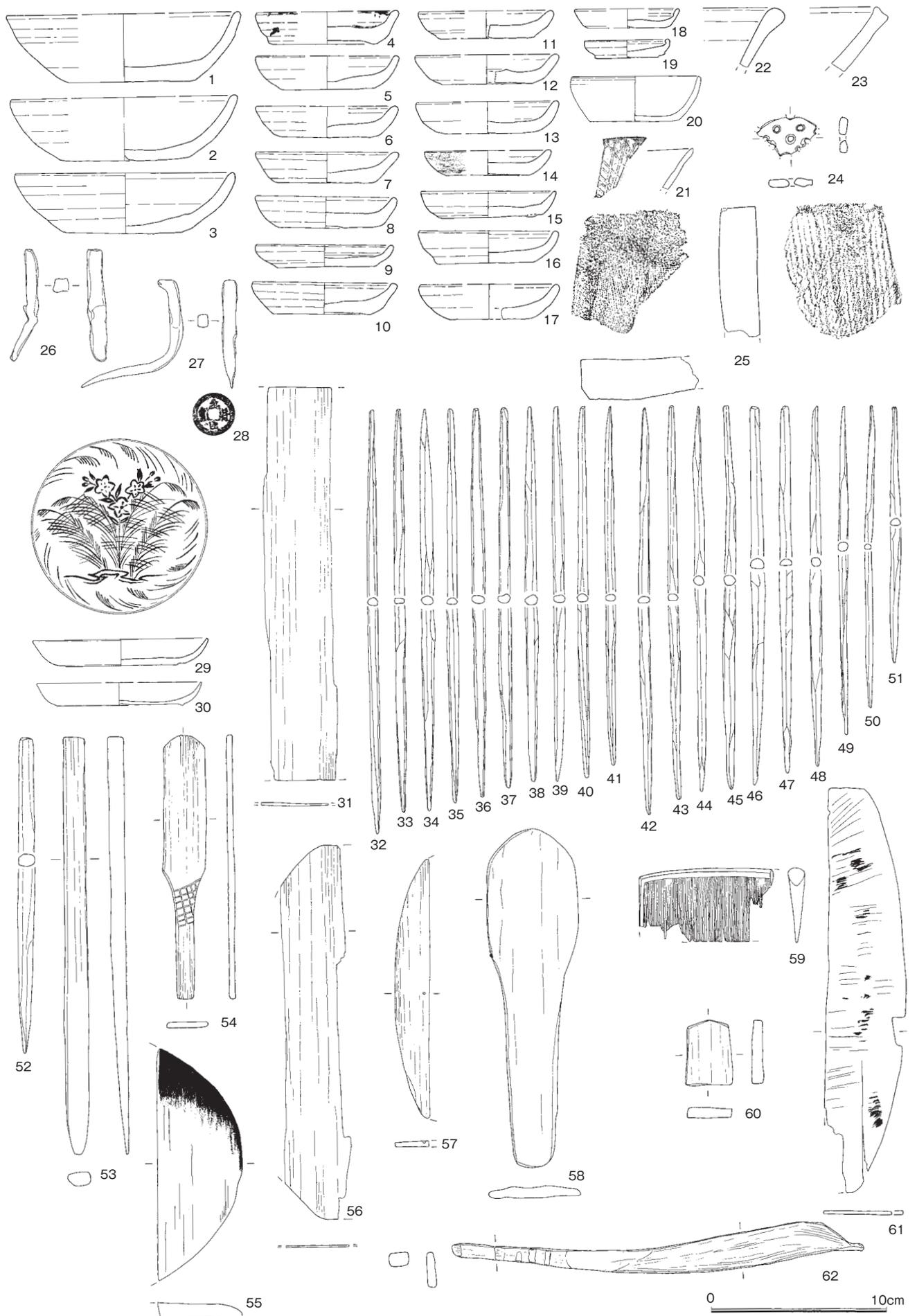


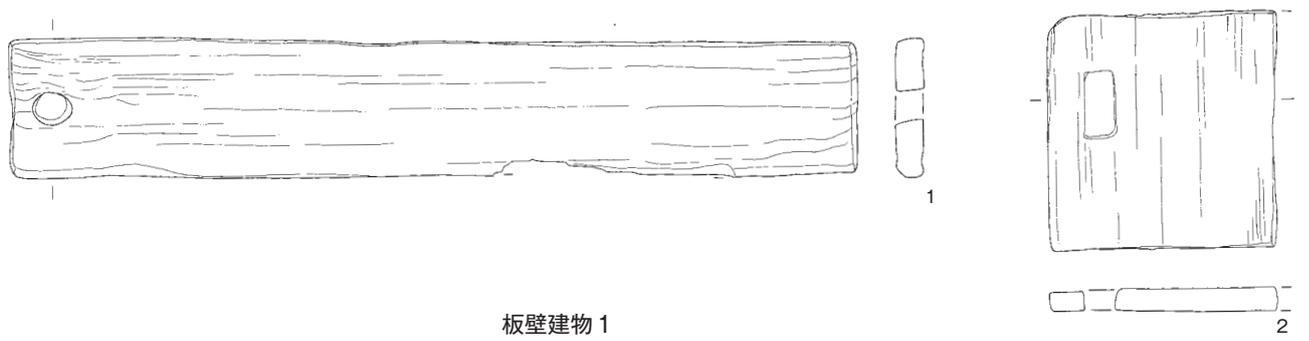
图20 板壁建物1出土遺物(1)

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
20	1	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(13.4)	7.4	3.9	肌色系
20	2	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	7.3	3.6	淡橙色系
20	3	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.1	3.5	肌色系
20	4	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	6.2	1.9	肌色系
20	5	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.6	1.9	肌色系
20	6	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.6	1.8	肌色系
20	7	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	8.2	5.5	1.8	肌色系
20	8	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	8.1	5.7	1.8	淡橙色系
20	9	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	7.9	5.5	1.4	肌色系
20	10	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	8.3	5.7	1.8	肌色系
20	11	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	(5.2)	1.6	橙色系
20	12	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.2	1.7	肌色系
20	13	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(5.8)	1.8	肌色系
20	14	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	(4.6)	1.4	肌色系
20	15	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	7.7	5.7	1.6	肌色系
20	16	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.5	1.9	肌色系
20	17	3面	板壁建物1	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(4.9)	2.0	肌色系
20	31	3面	板壁建物1	木製品	折敷	22.6	[3.8]	0.2	-
20	32	3面	板壁建物1	木製品	箸	24.3	0.6	0.5	-
20	33	3面	板壁建物1	木製品	箸	23.1	0.6	0.5	-
20	34	3面	板壁建物1	木製品	箸	23.0	0.7	0.5	-
20	35	3面	板壁建物1	木製品	箸	22.6	0.6	0.4	-
20	36	3面	板壁建物1	木製品	箸	22.3	0.7	0.5	-
20	37	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.8	0.7	0.5	-
20	38	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.5	0.7	0.6	-
20	39	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.5	0.7	0.4	-
20	40	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.3	0.6	0.5	-
20	41	3面	板壁建物1	木製品	箸	20.6	0.6	0.4	-
20	42	3面	板壁建物1	木製品	箸	23.4	0.6	0.4	-
20	43	3面	板壁建物1	木製品	箸	22.6	0.5	0.4	-
20	44	3面	板壁建物1	木製品	箸	22.1	0.6	0.5	-
20	45	3面	板壁建物1	木製品	箸	22.1	0.7	0.6	-
20	46	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.7	0.8	0.6	-
20	47	3面	板壁建物1	木製品	箸	21.1	0.7	0.4	-
20	48	3面	板壁建物1	木製品	箸	20.7	0.6	0.5	-
20	49	3面	板壁建物1	木製品	箸	18.9	0.6	0.5	-
20	50	3面	板壁建物1	木製品	箸	17.3	0.4	0.3	-
20	51	3面	板壁建物1	木製品	箸	14.7	0.6	0.3	-
20	52	3面	板壁建物1	木製品	棒状製品	18.1	0.9	0.7	-
20	53	3面	板壁建物1	木製品	棒状製品	24.0	1.3	0.8	-
20	54	3面	板壁建物1	木製品	筥状製品	15.0	2.4	0.3	-
20	55	3面	板壁建物1	木製品	円板	[13.2]	[4.8]	0.8	-
20	56	3面	板壁建物1	木製品	円板	[21.5]	[3.6]	0.1	-
20	57	3面	板壁建物1	木製品	円板	[14.8]	[2.0]	0.4	-
20	58	3面	板壁建物1	木製品	杓文字	19.4	5.2	0.6	-
20	59	3面	板壁建物1	木製品	櫛	[7.5]	4.2	0.9	-
20	60	3面	板壁建物1	木製品	将棋の駒?	3.7	2.6	0.6	-
20	61	3面	板壁建物1	木製品	板草履の芯	23.2	[4.5]	0.3	-
20	62	3面	板壁建物1	木製品	鳥形?	23.5	2.0	1.1	-
21	1	3面	板壁建物1	木製品	部材	33.5	5.5	1.1	-
21	2	3面	板壁建物1	木製品	部材	9.3	[8.9]	9.0	-

海拔6.5 m前後に検出された。

落込み1は南部が板壁建物1と重複し、板壁建物1と共に、その大半が調査区外であるため、全様は不明である。あるいは板壁建物1の一部である可能性もある。

板壁建物1はx2ライン北側に検出された東西方向の壁際に板材が検出され、さらに、その東側延長ライン上に北方向に開き倒れた状態で板材が検出された。これは直接板材を壁材として掘り方に設置した板壁建物の最下層部分であろうと考えられる。板材の根本は特に埋められていた様子はない。d-d'間に見られるように土丹が裏込めに設置されているようにも見える検出状況であったが、意図して設



板壁建物 1

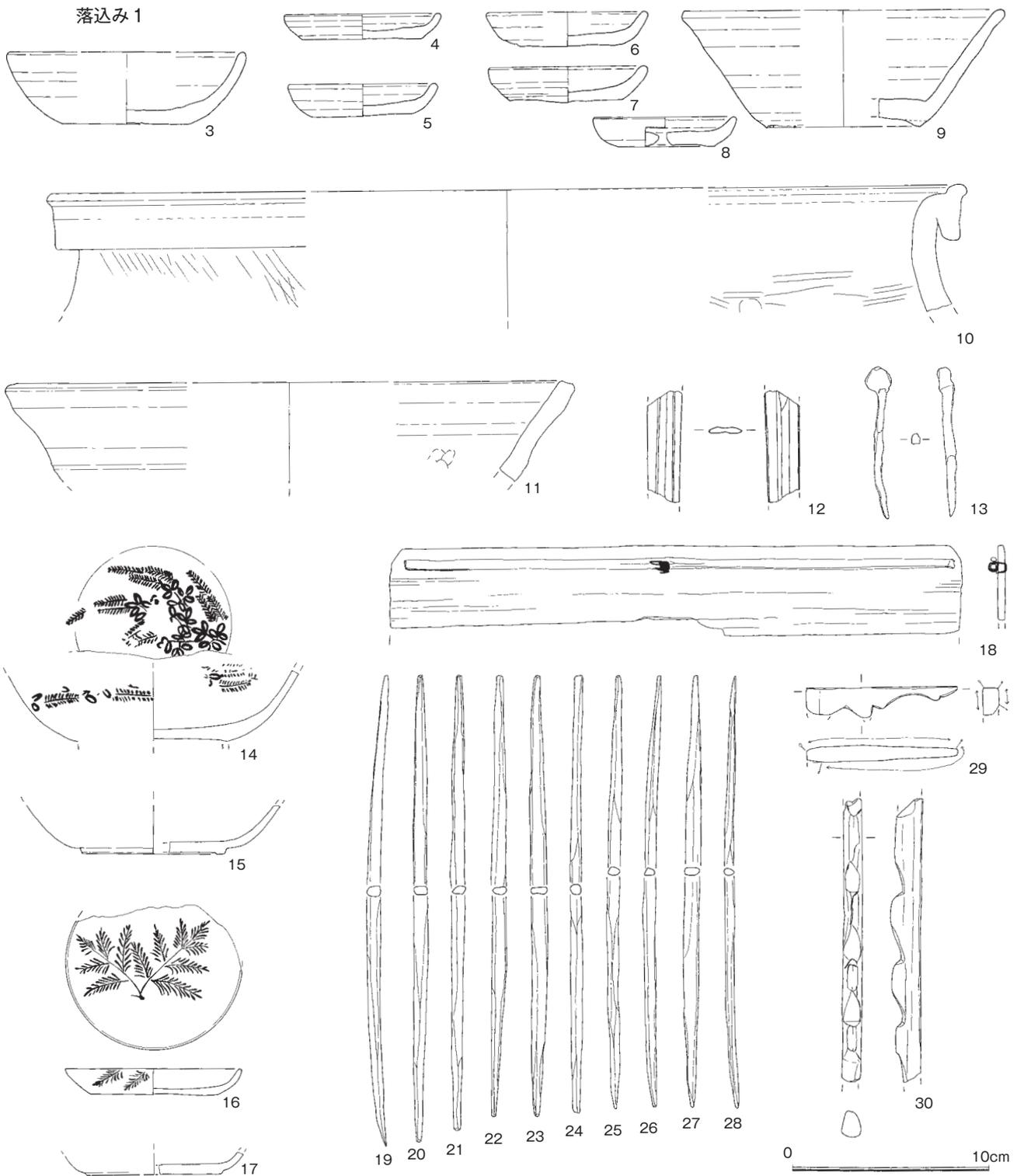


図21 板壁建物 1 (2)、落込み 1 (1) 出土遺物

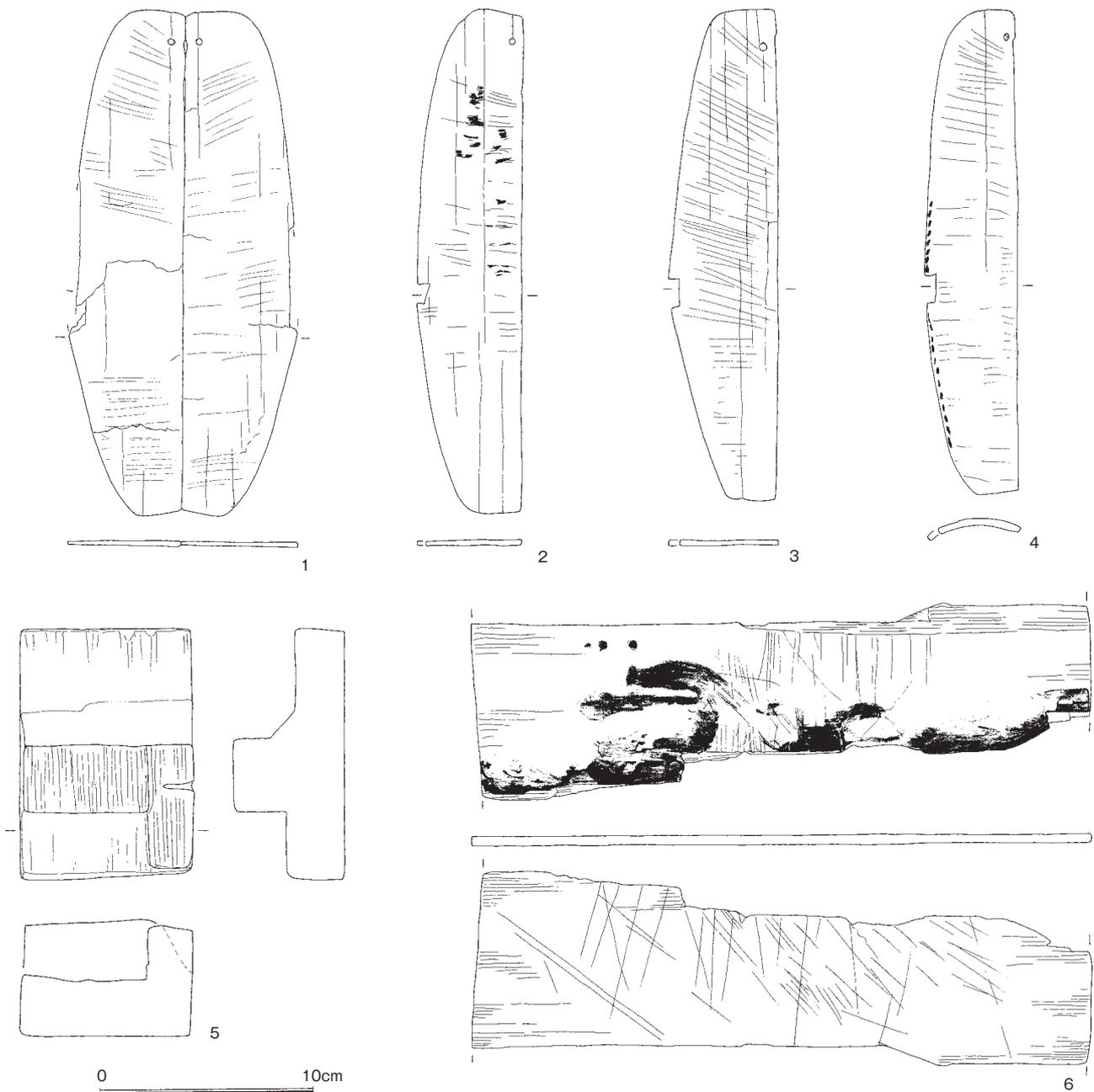


図22 落込み1(2)出土遺物

置されたとは言い切れない。

図20・図21-1・2は板壁建物1出土遺物である。図20-1~17はかわらけ。轆轤成形、底部は糸切りである。1~3は大皿、4~17は小皿である。器壁は丸味を持って立ち上がる。胎土は粉質。色調と寸法は表の通りである。14の器表には全体的に煤が付着している。

図20-18・19は内折れかわらけ。轆轤成形、底部は糸切り。口径(6.0)cm・4.9cm、底径(4.3)cm・3.6cm、器高1.2cm・1.0cmを測る。胎土は粉質で、18は淡橙色、19は肌色を呈す。18の器表には薄く煤が付着している。

図20-20は瀬戸の入れ子。無釉。口縁付近を中心にごく少量の自然釉が掛る。底部は篋削り。胎土は肌色を呈し、胎芯は黒灰色に残る。硬質で緻密。口径7.4cm、底径5.0cm、器高2.6cmを測る。

図20-21は山茶碗。内面におろし目が付けられている。無釉。胎土は肌色を呈し、緻密。硬く焼き締まっている。

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
21	3	3面	落込み1	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	6.6	3.7	淡橙色系
21	4	3面	落込み1	かわらけ	轆轤成形	8.0	6.2	1.3	肌色系
21	5	3面	落込み1	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.2	1.7	橙色系
21	6	3面	落込み1	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.2	1.8	肌色系
21	7	3面	落込み1	かわらけ	轆轤成形	8.1	5.7	1.8	肌色系
21	8	3面	落込み1	穿孔かわらけ	轆轤成形	7.4	5.0	1.5	肌色系
21	9	3面	落込み1	山茶碗	碗	(16.6)	(8.9)	6.0	灰色
21	10	3面	落込み1	常滑	甕	(47.0)	-	-	黒灰色
21	11	3面	落込み1	常滑	こね鉢	(29.0)	-	-	黒灰色
21	12	3面	落込み1	骨製品	筭	[5.6]	1.7	0.3	-
21	13	3面	落込み1	鉄製品	釘	7.8	1.4	0.5	-
21	14	3面	落込み1	漆器	椀	-	(7.6)	-	-
21	15	3面	落込み1	漆器	椀	-	7.2	-	-
21	16	3面	落込み1	漆器	皿	9.0	6.6	1.3	-
21	17	3面	落込み1	漆器	皿	-	(6.8)	-	-
21	18	3面	落込み1	木製品	折敷	29.2	[4.6]	0.9	-
21	19	3面	落込み1	木製品	箸	24.1	0.7	0.6	-
21	20	3面	落込み1	木製品	箸	23.9	0.5	0.5	-
21	21	3面	落込み1	木製品	箸	23.3	0.6	0.4	-
21	22	3面	落込み1	木製品	箸	22.6	0.7	0.4	-
21	23	3面	落込み1	木製品	箸	22.6	0.8	0.4	-
21	24	3面	落込み1	木製品	箸	22.4	0.6	0.5	-
21	25	3面	落込み1	木製品	箸	22.2	0.6	0.4	-
21	26	3面	落込み1	木製品	箸	22.1	0.6	0.4	-
21	27	3面	落込み1	木製品	箸	22.1	0.8	0.4	-
21	28	3面	落込み1	木製品	箸	22.1	0.5	0.4	-
21	29	3面	落込み1	木製品	雲形	[1.5]	7.7	0.8	-
21	30	3面	落込み1	木製品	自在鉤	[14.2]	1.6	1.0	-
22	1	3面	落込み1	木製品	板草履の芯	23.3	10.7	0.3	-
22	2	3面	落込み1	木製品	板草履の芯	23.8	[4.9]	0.3	-
22	3	3面	落込み1	木製品	板草履の芯	23.2	[5.1]	0.3	-
22	4	3面	落込み1	木製品	板草履の芯	22.9	[4.4]	0.3	-
22	5	3面	落込み1	木製品	部材	11.8	8.1	5.5	-
22	6	3面	落込み1	木製品	部材	29.1	[8.2]	0.4	-

図20 - 22は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。口縁は肥厚し、ごく浅く沈線が廻る。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含む。内面には厚く自然釉が掛る。

図20 - 23は常滑のこね鉢の口縁部片。口縁端部は沈線状になっている。器表は紫茶褐色を呈し、胎土は赤橙色を呈す。白色石粒を含み、比較的緻密。

図20 - 24はかわらけの底部の転用品。用途は不明。円板状に削り出され、遺存部で9カ所の穴が穿たれている。図20 - 25は平瓦。凸面には縄目。凹面には布目がある。

図20 - 26・27は鉄製釘。図20 - 28は元符通宝(初铸1098年)。

図20 - 29・30は漆器皿。黒漆塗り。29は内底面に朱漆で桔梗が描かれている。底部は高台が付く。寸法は口径10.0cm・(9.4)cm、底径6.4cm・7.2cm、器高1.5cm・1.3cmを測る。

図20 - 31～62・図21 - 1・2は木製品。木製品の寸法は表の通り。図20 - 31は折敷の破片。図20 - 32～51は箸。図示したもの他に53本出土した。図32 - 52・53は棒状の製品。図32 - 54は筥状製品。柄の根元に斜格子の刻みが施されている。図32 - 55～57は円板。55は一部炭化している。図20 - 58は杓文字。図20 - 59は櫛。漆は確認できなかった。図20 - 60は将棋の駒か。上が三角に切られている。墨書はない。図20 - 61は板草履の芯。藁が一部遺存している。図20 - 62は加工された板材。鳥形の可能性もあるが、詳細は不明。図21 - 1・2は部材。

図示したもの他に骨・貝殻・果核が出土した。内訳は以下の通り。

【骨】イヌ：脛骨1・大腿骨[1]、マダイ：主上顎骨1、スズキ：椎骨1、不明破片(1)

【貝殻】アカニシ2、ハマグリ3、カキ4、アワビ(1) ※2枚貝は片方で1とカウント。

【果核】クルミ3 ※半割で1とカウント。

図21-3～30・図22は落込み1出土遺物である。寸法は表の通りである。図21-3～8はかわらけ。轆轤成形底部は糸切り。3は大皿、4～8は小皿である。4は底径が大きく、浅い。胎土は3が淡橙色、5が橙色、その他は肌色を呈し、微砂を含み粉質。8は底部中央に1カ所穴が穿たれている。図21-9は山茶碗。底部には粗雑な高台が貼り付けられている。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。図21-10・11は常滑。10は甕、11はこね鉢。図21-12は骨製筭。図21-13は鉄製釘。図21-14～17は漆器。いずれも黒漆塗り。14・15は椀。14は内外面に朱漆で藤の文様がスタンプされている。16・17は皿。16は内外面に朱漆で草文が描かれている。図21-18～30・図22は木製品。図21-18は折敷。一辺に籤が遺存している。籤は樹皮で本体に留められている。図21-19～28は箸。総数48本が出土した。図21-29は雲形。黒漆が塗られている。図21-30は自在鉤。図22-1～4は板草履の芯。いずれも藁圧痕が残る。4は縁に縦方向に強く残っている。図22-5・6は用途不明の部材。6は部分的に炭化している。

図示したものの他に骨・貝殻・果核が出土した。

【骨】ノウサギ：橈骨1・尺骨1、テン：上腕骨1

【貝殻】アカニシ3(3)、キサゴ2、ハマグリ7、アワビ(1) ※2枚貝は片方で1とカウント

【果核】クルミ2 ※半割で1とカウント

掘立柱建物1・出土遺物(図19・23)

掘立柱建物1はグリッド(x 10、y 5)付近、海拔6.4m前後に検出された。柱穴2口が南北方向に並び、調査区東壁土層断面にさらに1口柱穴が確認された。その内側は大型土丹によって土台が作られている。Pit10・11間には布掘り状の浅い溝が検出された。溝には板や細い杭が検出された。深さは検出面から18cmを測る。柱穴間の距離は芯々で200cmを測る。柱穴の直径は各々、48cm・60cmを測り、深さはいずれも検出面から30cm前後を測る。Pit11には礎板が2枚据えられていた。建物の内側グリッド(x 9、y 6)付近にPit7と礎板が1枚、グリッド(x 10、y 6)付近にPit9が検出されている。これらも建物の構造の一部である可能性がある。大型土丹土台の北側に大土丹の上に黒色粘土さらに細土丹による地業がなされていることから、掘立柱建物1本体は調査区北および東に展開するものと考えられる。南北軸線方向はN-13°-Eである。

図23-1～7は掘立柱建物1、柱穴間に検出された布掘り状の溝からの出土遺物である。1はかわらけの大皿。轆轤成形、底部は糸切り。口縁端部が若干外反している。胎土は肌色を呈し、微砂を含み粉質。口径(13.0)cm、底径7.8cm、器高3.4cmを測る。2～7は木製品。2～6は箸。7は板草履の芯。藁圧痕が残る。図示したものの他に骨と貝殻が出土している。

【骨】イヌ：上腕骨1(布掘り)、肋骨1(Pit10)

【貝殻】アカニシ(1)・サザエ3・ハマグリ4・バイガイ1(以上、布掘り)、ハマグリ1(Pit10)ハマグリ3(Pit11)

土坑1・出土遺物(図19・23)

土坑1はグリッド(x 4、y 3)付近、海拔6.5m前後に検出された。西部は調査区外だが、平面形はおそらく楕円形を呈し南北幅134cm、深さは検出面から47cmを測る。埋土の土層は以下の通り。

1層：暗褐色粘質土層 かわらけ細片・炭化物・0.5cm大の土丹粒・0.5～1.0cm大の鎌倉石粒を含む。粘性なし。締り良い。

2層：有機物堆積層 炭化物(やや多)・木片・0.5cm大の土丹粒を含む。粘性強い。締り悪い。

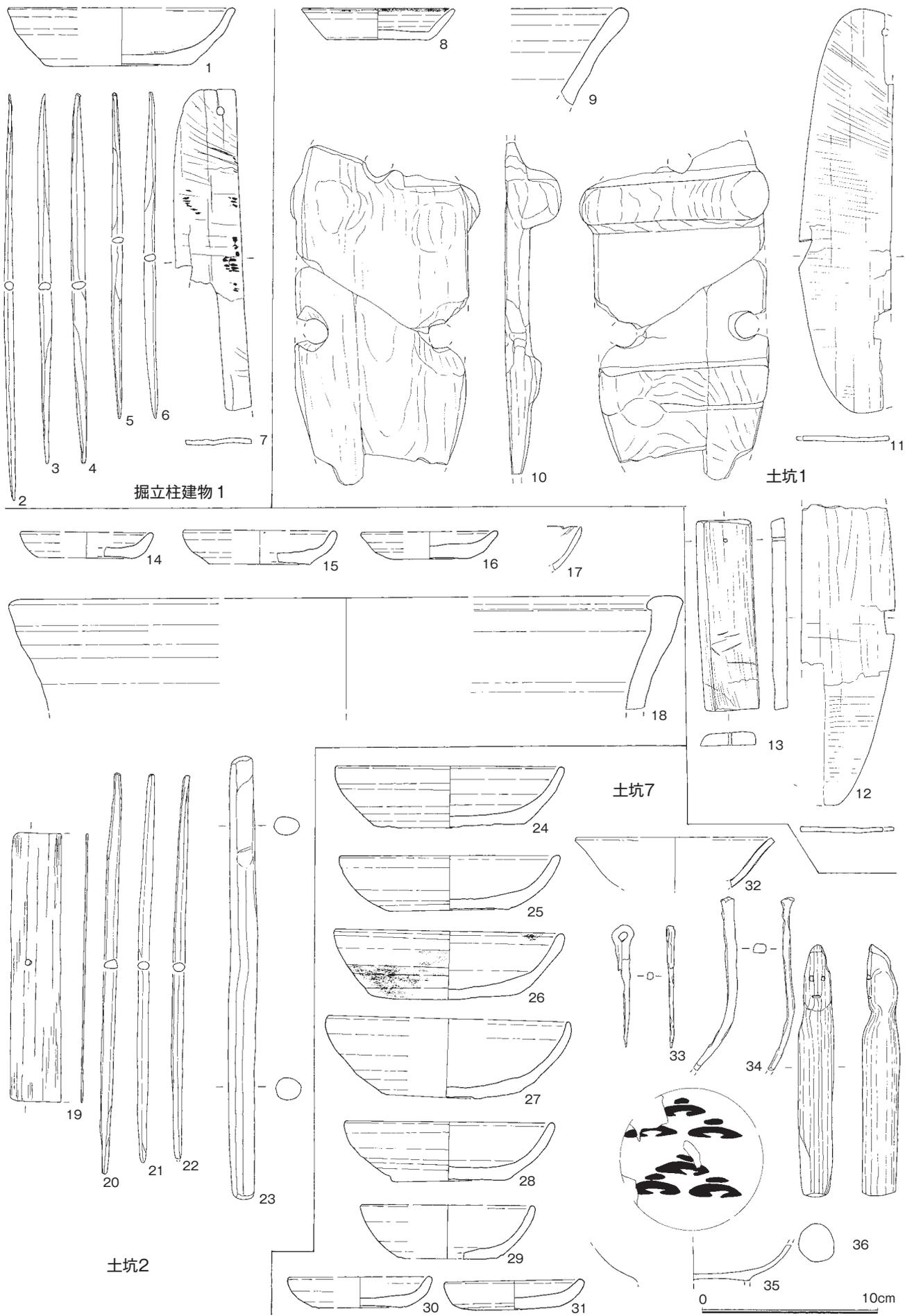


图23 掘立柱建物1·土坑1·2·7出土遺物

3層：有機物堆積層 木片・炭化物・0.5cm大の土丹粒・貝殻片（少）を含む。粘性強い。締り悪い。

4層：有機物堆積層 木片・貝殻片・0.5cm大の土丹粒（微量）を含む。粘性強い。締り良い。

図23-8～13は土坑1出土遺物である。8は白磁口元皿。ほぼ完形。口縁部には覆輪の痕跡が残る。口径8.9cm、底径6.0cm、器高1.8cmを測る。釉調は若干青味のある灰白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈し緻密。9は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。胎土は灰白色を呈し、石粒を多く含み粗い。焼成はやや悪い。10～13は木製品。10は連歯下駄。歯はかなり磨り減っている。11・12は板草履の芯。13は用途不明。この他にアカニシが1点出土している。

土坑2・出土遺物（図19・23）

土坑2はグリッド（x 5、y 5）付近、海拔6.45 m前後に検出された。東部は調査区外。平面形は不整形を呈す。南北幅は最大150cm、深さは検出面から30cmを測る。隅2カ所に板が検出されたが、この土坑に伴うものかは不明である。埋土の土層は以下の通り。

1層：暗褐色粘質土 炭化物・0.5cm大の土丹粒・5～15cm大の鎌倉石・鎌倉石粒・木片（少）を含む。粘性強い。締り良い。

2層：有機物堆積層 炭化物・0.5cm大の土丹粒・木片・貝殻片（少）を含む。粘性強い。締りやや悪い。

3層：暗褐色粘質土 0.5cm大の土丹粒・炭化物（少）・貝殻片（微量）を含む。粘性強い。締りやや悪い。

図23-14～23は土坑2出土遺物である。14～16はかわらけの小皿。轆轤成形、底部は糸切り。14・16は橙色、15は肌色を呈し、微砂を含み粉質。口径（7.6）cm・（8.8）cm・（7.8）cm、底径（5.6）cm・（5.8）cm・4.6cm、器高1.5cm・1.9cm・1.6cmを測る。17は瀬戸の輪花型入れ子。胎土は灰白色を呈し、白色微石粒を含む。口縁部に自然釉が掛る。18は瓦質手焙り。口径は（38.6）cmを測る。器壁上位には孔が穿たれている。器表は黒色処理される。胎土は橙褐色を呈す。比較的硬質。図23-19～23は木製品。19は折敷。20～22は箸。23は棒状製品。用途は不明。この他にアカニシ1・キサゴ2・ヒメクボガイ1・ハマグリ3、クルミ1が出土している。

土坑7・出土遺物（図19・23）

土坑7はグリッド（x 9、y 3）付近、海拔6.5 m前後に検出された。西辺はPit30と切り合っているが、平面形は円形を呈す。南北幅は80cm、深さは検出面から16cm前後を測る。埋土は黒褐色粘質土層、木片・小土丹粒・炭化物をいずれも多く、かわらけ片・貝殻片・有機物を含む。締りやや悪い。

図23-24～36は土坑7出土遺物である。24～31はかわらけ。轆轤成形、底部は糸切り。大皿は器壁は丸味を持ち、底径はやや狭く、深さがある。胎土は25が淡橙色、28・31は橙色、その他は肌色を呈し、微砂を含み粉質。25は灯明皿で器表に煤が付着している。口径13.1cm・12.6cm・13.1cm・（14.0）cm・12.0cm・（10.0）cm・（8.2）cm・8.0cm、底径8.6cm・7.0cm・8.0cm・7.7cm・6.5cm（4.8）cm・（5.2）cm・5.3cm、器高3.5cm・3.2cm・3.9cm・4.5cm・3.5cm・3.1cm・1.8cm・1.7cmを測る。32は白磁口元皿。口径は（11.3）cmを測る。釉調は灰白色を呈し、光沢は良い。素地は暗灰色を呈し、そのため、全体的に発色が悪い。33・34は鉄製釘。35は漆器椀。黒漆塗りに朱漆で松か？文様が描かれている。36は木製人形。この他にノウサギの大腿骨1、サザエ1、サザエ蓋1、キサゴ3、ハマグリ10、クルミ1（半割）が出土している。

3面Pit（図18）

3面からは11口のPitが検出した。内、Pit7・9～11は掘立柱建物1を構成する遺構である。その他のPitは今回の調査範囲内では並びをつかむことはできなかった。Pit27・28・30は礎板を伴っており、柱穴であることは確実である。

3面出土遺物（図24～26）

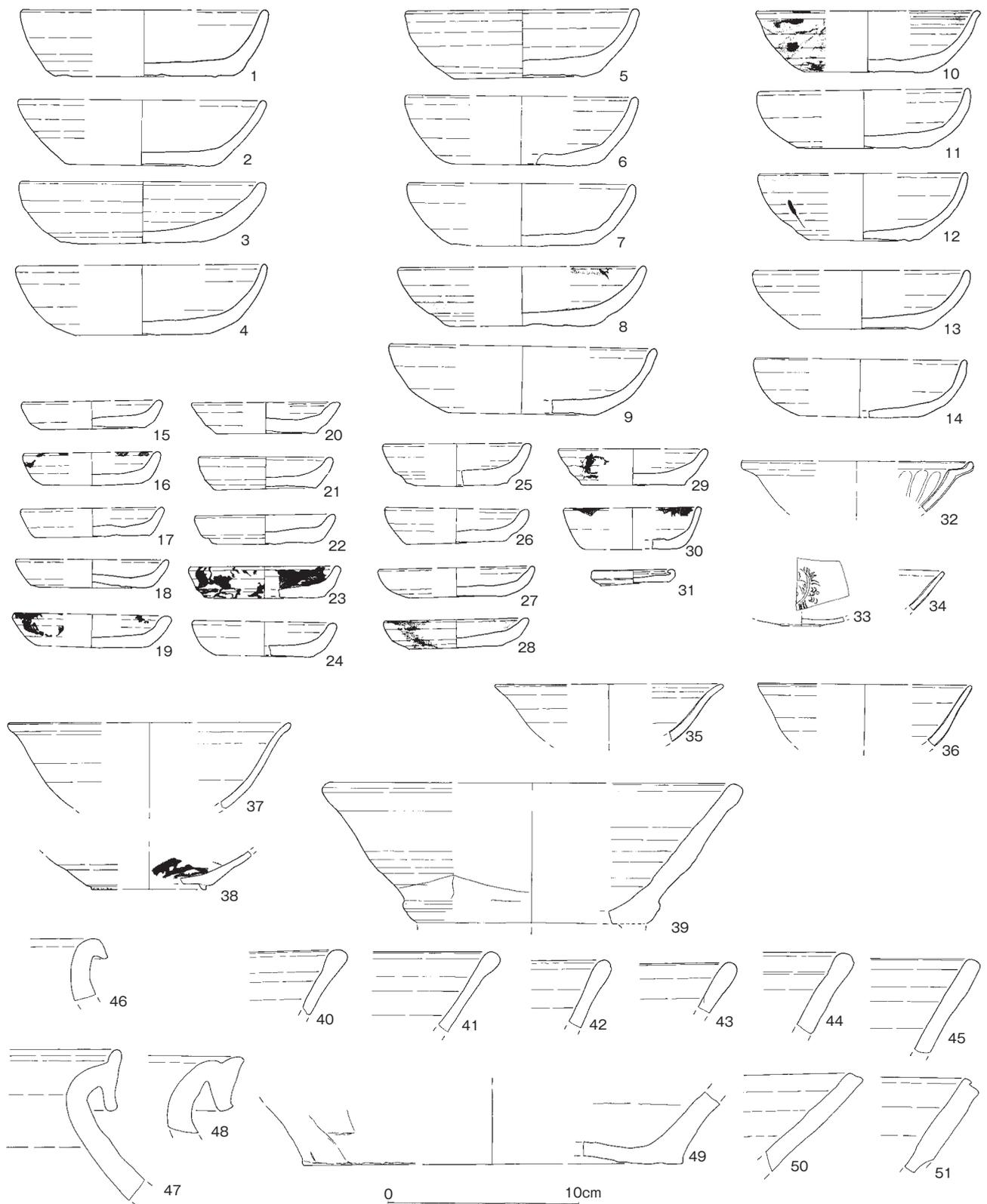


図24 3面出土遺物(1)

図24～26は3面出土遺物である。寸法は表の通り。図24-1～30はかわらけ。轆轤成形、底部は糸切り。1～9は大皿、10～14は中皿、15～30は小皿である。9～14・30は薄手丸深タイプ。15～24は底径が大きく浅いタイプ、その他は丸味があり、深さのあるタイプである。胎土は微砂を含み粉質。8・10・12・16・28・30は灯明皿で器表に煤が付着している。

図24-31は内折れかわらけ。底部は糸切り。

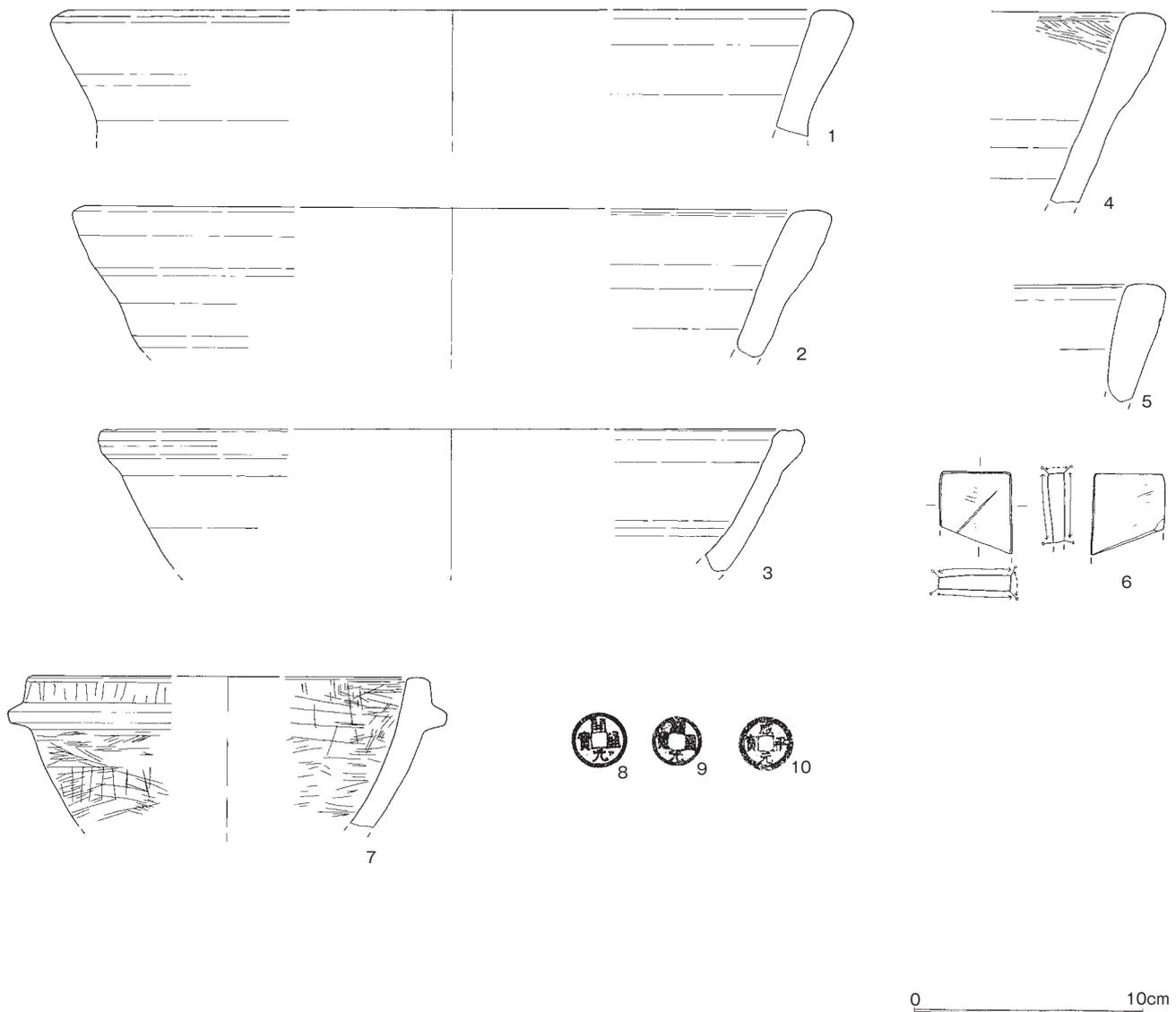


図25 3面出土遺物(2)

図24 - 32 ~ 36は舶載磁器。32は青磁折縁鉢。内側に蓮弁が陰刻される。釉調は青味緑色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈し、微砂を含むが、緻密。33 ~ 36は白磁。33は印花文皿。釉調は白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は白褐色を呈す。34 ~ 36は口兀碗。いずれも釉調は若干青味のある灰白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈し、緻密。

図24 - 37・38は美濃系山茶碗。37は口縁部片、38は底部片である。38は貼付高台で、高台端部には糊痕が残る。胎土は灰白色を呈し、緻密。38の内面には漆が付着している。

図24 - 39 ~ 45は山茶碗窯系こね鉢。39は高台が欠損している。胎土はいずれも灰色を呈し、白色石粒を多く含み硬質で粗い。43は焼成がやや不良である。口縁部から内面にかけて自然釉が掛る。39の内面下位は磨滅している。

図24 - 46 ~ 51は常滑である。46は壺の口縁部片。口縁端部は外側に折り返されている。器表は再火を受け肌荒れしている。胎土は灰色を呈し、硬質で比較的緻密。47 ~ 49は甕。47・48は口縁部片。いずれも器表は暗紫褐色を呈し、自然釉が掛る。胎土は白色石粒を多く含み、硬質で黒灰色を呈す。49は底部片。胎土は橙色を呈し、胎芯は黒灰色に残る。50・51はこね鉢の口縁部片。50の器表は赤茶褐色を呈し、自然釉が掛る。胎土はいずれも黒灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。

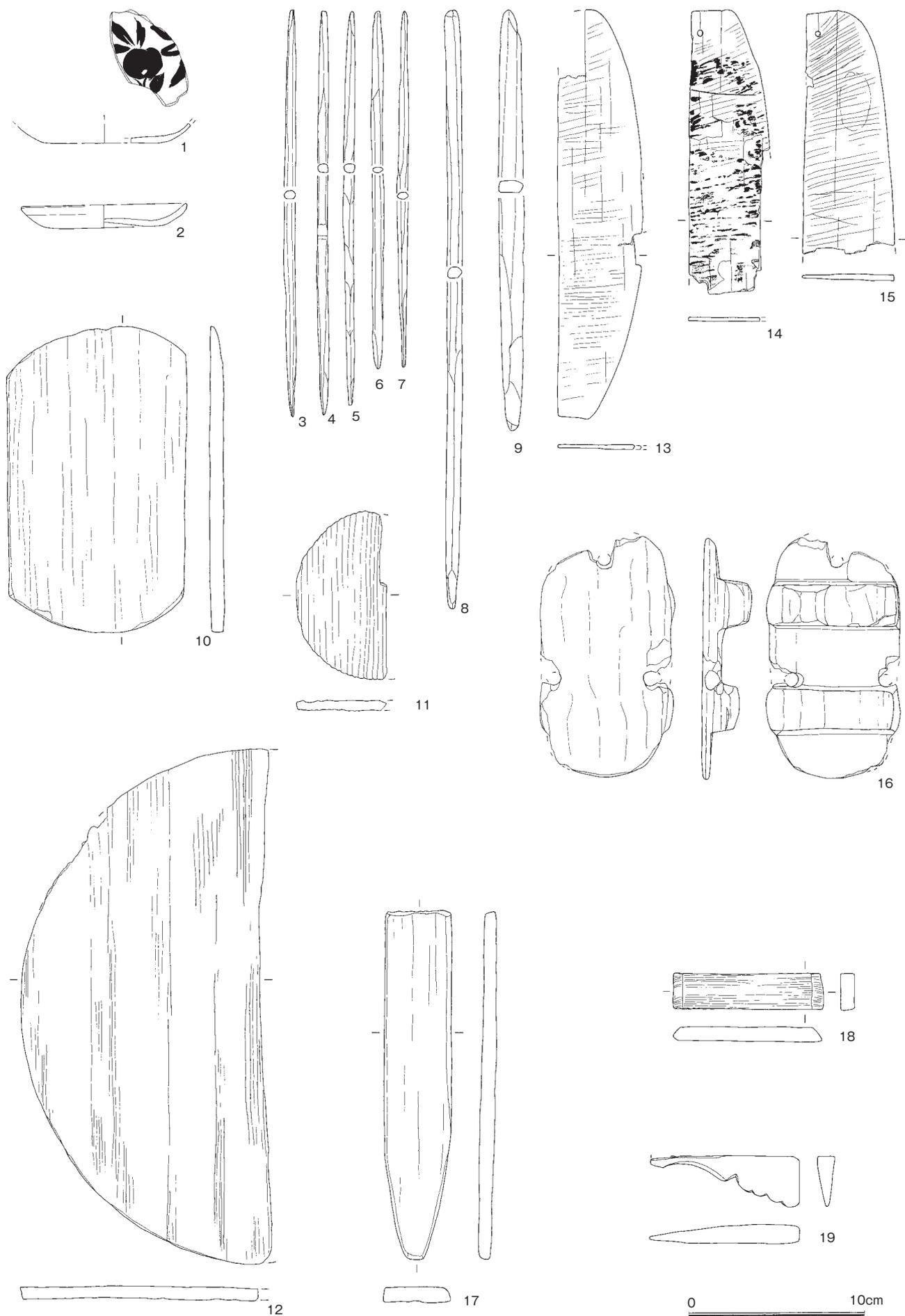


图26 3面出土遺物(3)

図25-1~5は瓦質手焙り。胎土は3が肌色、その他は黒灰色を呈し、微砂を多く含み、粗く脆い。

図25-6・7は石製品。6は鳴滝産仕上げ砥。7は滑石鍋。西彼杵産。

図25-8~10は銭。開元通宝(初鑄960年)・宋通元寶(初鑄960年)・咸平元寶(初鑄998年)。

図26-1・2は漆器皿。1は黒漆塗りに内面に朱漆で橘文が描かれている。2は無文。黒漆地に内側は朱漆が塗られている。

図26-3~19は木製品。3~7は箸。8は菜箸。9は棒状製品。用途は不明。10~12は円板。曲物の底板であろう。13~15は板草履の芯。藁或いは圧痕が残る。16は連歯下駄。かなり小さい。17・18は板材。用途は不明。19は雲形。黒漆塗り。

この他に骨・貝殻・果核が出土している。内訳は以下の通り。

【骨】ヒト(小人):下顎骨(1)前歯6本は欠損している。右第一乳臼歯の下に第一小臼歯が見えている。左の第一大臼歯が生えかかっている。ウマ:肩甲骨(1)、ニホンシカ:上腕骨(1)・尺骨(1)・角(1)加工痕あり。イヌ:上腕骨1・尺骨(1)・橈骨(1)、イノシシ:上顎骨(1)、哺乳類:肩甲骨(1)・肋骨1・中足骨か中手骨2・破片(4)、スズキ:主上顎骨(1)

【貝殻】キサゴ1、ハマグリ13、カキ1

【果核】クルミ5(半割)、スモモ3・半割2

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
24	1	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(9.4)	3.5	淡橙色系
24	2	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	8.0	3.4	肌色系
24	3	3面	-	かわらけ	轆轤成形	12.9	7.3	3.3	橙色系
24	4	3面	-	かわらけ	轆轤成形	13.6	7.1	3.7	橙色系
24	5	3面	-	かわらけ	轆轤成形	12.3	7.3	3.6	淡橙色系
24	6	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	8.0	3.6	橙色系
24	7	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	(7.8)	3.3	淡橙色系
24	8	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(8.0)	3.2	肌色系
24	9	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(14.0)	(8.0)	3.6	淡橙色系
24	10	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.8)	6.6	3.2	肌色系
24	11	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.2)	6.6	3.1	肌色系
24	12	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.0)	6.0	3.6	橙色系
24	13	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.4)	6.3	3.1	肌色系
24	14	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(11.2)	(6.8)	3.1	肌色系
24	15	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	5.6	1.5	橙色系
24	16	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	5.6	1.7	淡橙色系
24	17	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	6.0	1.5	肌色系
24	18	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.8	1.5	肌色系
24	19	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.4)	6.0	1.7	肌色系
24	20	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.3	1.7	肌色系
24	21	3面	-	かわらけ	轆轤成形	9.1	5.4	1.8	橙色系
24	22	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.4	5.3	1.6	淡橙色系
24	23	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.6	1.7	橙色系
24	24	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.0)	1.8	肌色系
24	25	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.2	1.7	肌色系
24	26	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	5.3	1.9	橙色系
24	27	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	5.6	1.6	淡橙色系
24	28	3面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	4.9	1.5	肌色系
24	29	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.8	1.9	肌色系
24	30	3面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	(5.4)	2.2	淡橙色系
24	31	3面	-	内折れかわらけ	轆轤成形	4.4	3.7	0.7	淡橙色系
24	32	3面	-	青磁	折縁鉢	(12.0)	-	-	-
24	33	3面	-	白磁	印花文皿	-	(2.0)	-	-
24	35	3面	-	白磁	口兀碗	(12.0)	-	-	-
24	36	3面	-	白磁	口兀碗	(11.2)	-	-	-
24	37	3面	-	美濃系	山茶碗	(14.8)	-	-	-
24	38	3面	-	美濃系	山茶碗	-	(6.0)	-	-
24	39	3面	-	山茶碗窯系	こね鉢	(22.0)	(12.0)	-	-
24	49	3面	-	常滑	甕	-	(20.0)	-	-

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
25	1	3面	-	手焙り	-	(35.6)	-	-	-
25	2	3面	-	手焙り	-	(33.6)	-	-	-
25	3	3面	-	手焙り	-	(31.2)	-	-	-
25	6	3面	-	石製品鳴滝産	仕上げ砥	[3.6]	3.2	0.7	-
25	7	3面	-	石製品滑石	鍋	(17.8)	-	-	-
26	1	3面	-	漆器	皿	-	(7.0)	-	-
26	2	3面	-	漆器	皿	(9.4)	6.6	1.3	-
26	3	3面	-	木製品	箸	23.2	0.7	0.5	-
26	4	3面	-	木製品	箸	23.1	0.6	0.5	-
26	5	3面	-	木製品	箸	22.5	0.6	0.5	-
26	6	3面	-	木製品	箸	20.4	0.7	0.5	-
26	7	3面	-	木製品	箸	20.3	0.6	0.6	-
26	8	3面	-	木製品	菜箸	34.2	0.9	0.7	-
26	9	3面	-	木製品	棒状製品	24.0	1.4	0.7	-
26	10	3面	-	木製品	底板	17.5	[10.3]	0.8	-
26	11	3面	-	木製品	底板	9.6	[5.1]	0.6	-
26	12	3面	-	木製品	底板	29.5	[13.5]	0.7	-
26	13	3面	-	木製品	板草履の芯	23.4	[4.7]	0.3	-
26	14	3面	-	木製品	板草履の芯	[16.2]	[5.0]	0.3	-
26	15	3面	-	木製品	板草履の芯	[13.6]	[5.2]	0.4	-
26	16	3面	-	木製品	連歯下駄	[13.8]	7.4	2.8	-
26	17	3面	-	木製品	板材	19.9	3.8	0.9	-
26	18	3面	-	木製品	板材	8.5	2.1	0.8	-
25	19	3面	-	木製品	雲形	8.5	2.9	1.0	-

第4面 (図27)

第4面は3面下20～30cm、海拔6.2m前後に検出された。調査区北西隅は非常に細密な土丹地業が施されている。土丹地業の調査区北辺には炭化物がまとめて検出された。遺構は床状遺構1カ所、土坑1基、Pit9口が検出された。また、グリッド(x10、y6)付近に曲物の底部が出土した。

床状遺構 (図28)

床状遺構はグリッド(x5、y3)付近、海拔6.3m前後に検出された。幅7～10cm、厚さ2cm前後の板が、南北方向に敷き詰められ、所々に薄い板状の杭が打たれている。杭が貫通しているため断定はできないが、板張り床が陥没したものではないかと考えられる。調査区が狭いため全体像は不明だが、Pit3やPit33等柱穴が近くに配置され、大きな建物の一部と考えられる。南北軸線方向はN-6°-Eである。

土坑9・出土遺物 (図28・29～30)

土坑9はグリッド(x8、y3)付近、海拔6.2m前後に検出された。西部と南部は調査区外。平面形はおそらく円形を呈す。深さは検出面から10cmを測り、浅い。

図29・30は土坑9出土遺物である。寸法は表の通り。図29-1～4はかわらけの小皿。轆轤成形、底部は

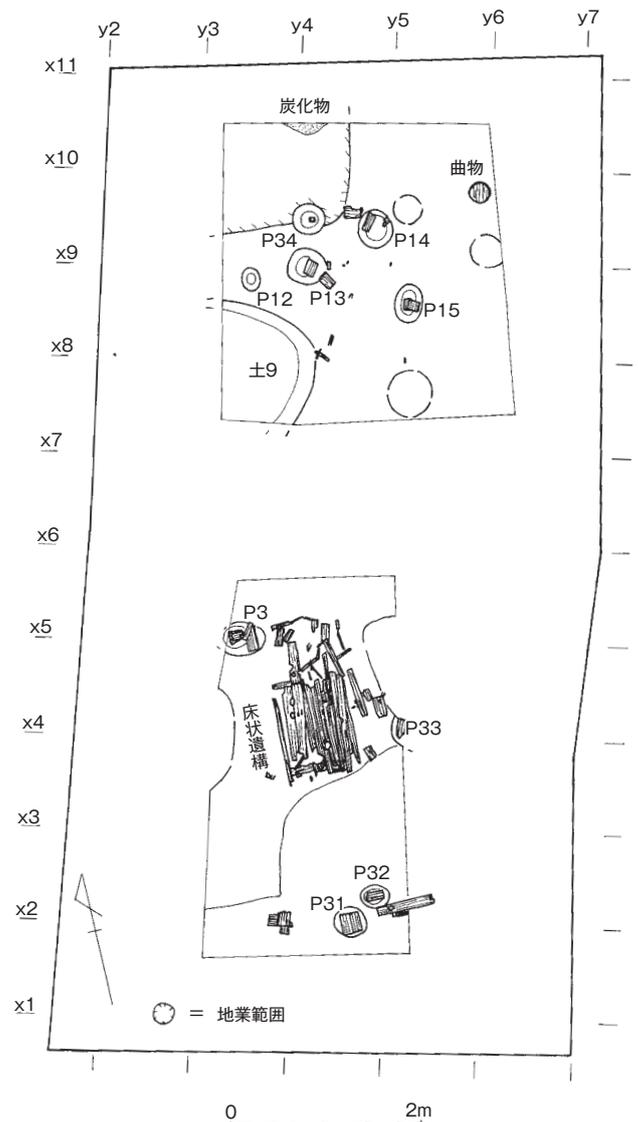


図27 4面遺構配置図

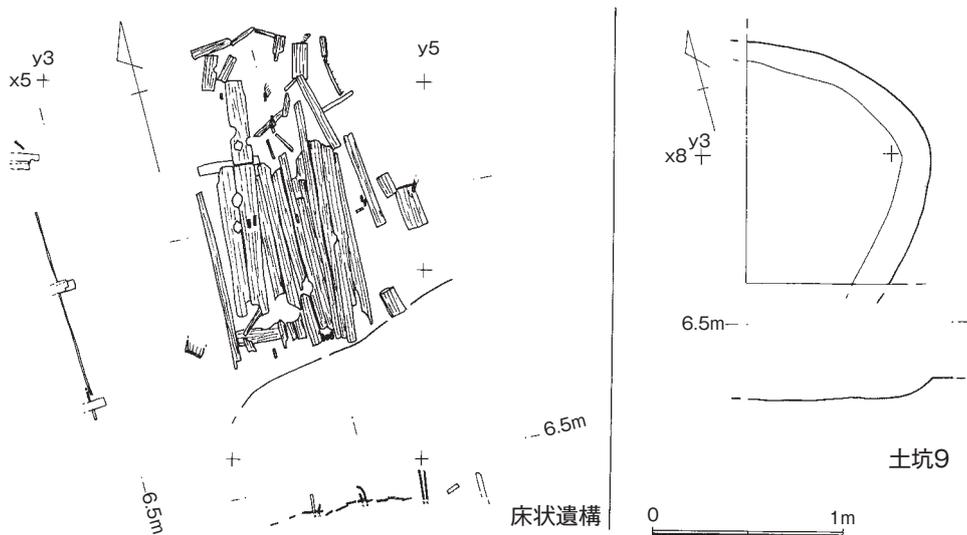


図28 床状遺構・土坑9

糸切り。深さは浅く、器壁は丸味がある。胎土は1・3が肌色、2・4が橙色を呈し、微砂を含み粉質。1～3の器表には煤が付着している。

図29-5は研磨痕のある常滑片。かすかに研磨痕がある。

図29-6・7は漆器。6は椀。黒漆塗りに朱漆で桜のスタンプが内

外面、内底面に施されている。7は皿。黒漆塗りに朱漆で内側全面と外側面上位に秋草文が描かれている。

図29-8～23・図30は木製品。図29-8は杓文字。図29-9～15は箸。図29-16～18は菜箸。図29-19は用途不明の棒状製品。図29-20は板材。先端が削り出されている。図29-21は容器の部材。図29-22・23は部材。用途は不明。23には1ヶ所樹皮が通されている。図30-1～5は円板。曲物の底板あるいは蓋。5には1カ所樹皮が通されている。図30-6は把手。図30-7は板草履の芯。藁圧痕が残る。

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
29	1	4面	土坑9	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.5	1.9	肌色系
29	2	4面	土坑9	かわらけ	轆轤成形	7.5	4.9	1.7	橙色系
29	3	4面	土坑9	かわらけ	轆轤成形	(7.3)	5.2	1.6	肌色系
29	4	4面	土坑9	かわらけ	轆轤成形	(7.4)	5.2	1.7	橙色系
29	5	4面	土坑9	研磨痕のある陶片	常滑甕	7.0	5.5	1.1	-
29	6	4面	土坑9	漆器	椀	-	(8.0)	-	-
29	7	4面	土坑9	漆器	皿	9.8	7.4	1.1	-
29	8	4面	土坑9	木製品	杓文字	23.0	6.5	0.7	-
29	9	4面	土坑9	木製品	箸	22.8	0.8	0.4	-
29	10	4面	土坑9	木製品	箸	[22.8]	0.6	0.5	-
29	11	4面	土坑9	木製品	箸	22.7	0.6	0.3	-
29	12	4面	土坑9	木製品	箸	22.3	0.6	0.5	-
29	13	4面	土坑9	木製品	箸	21.5	0.6	0.4	-
29	14	4面	土坑9	木製品	箸	18.2	0.7	0.4	-
29	15	4面	土坑9	木製品	箸	18.0	0.6	0.5	-
29	16	4面	土坑9	木製品	菜箸	26.6	0.9	0.5	-
29	17	4面	土坑9	木製品	菜箸	[22.2]	0.8	0.6	-
29	18	4面	土坑9	木製品	菜箸	26.4	1.1	0.6	-
29	19	4面	土坑9	木製品	棒状製品	32.8	1.8	1.3	-
29	20	4面	土坑9	木製品	板材	16.3	3.2	0.4	-
29	21	4面	土坑9	木製品	容器	17.9	[8.3]	0.7	-
29	22	4面	土坑9	木製品	部材	5.9	8.3	3.7	-
29	23	4面	土坑9	木製品	部材	30.5	[2.5]	0.6	-
30	1	4面	土坑9	木製品	円板	[37.7]	[6.6]	1.0	-
30	2	4面	土坑9	木製品	円板	[30.0]	[6.7]	0.7	-
30	3	4面	土坑9	木製品	円板	14.7	[6.7]	0.8	-
30	4	4面	土坑9	木製品	円板	[14.3]	[6.0]	0.5	-
30	5	4面	土坑9	木製品	円板	15.0	[6.0]	0.6	-
30	6	4面	土坑9	木製品	把手	2.9	10.0	2.1	-
30	7	4面	土坑9	木製品	板草履の芯	23.3	[4.3]	0.3	-

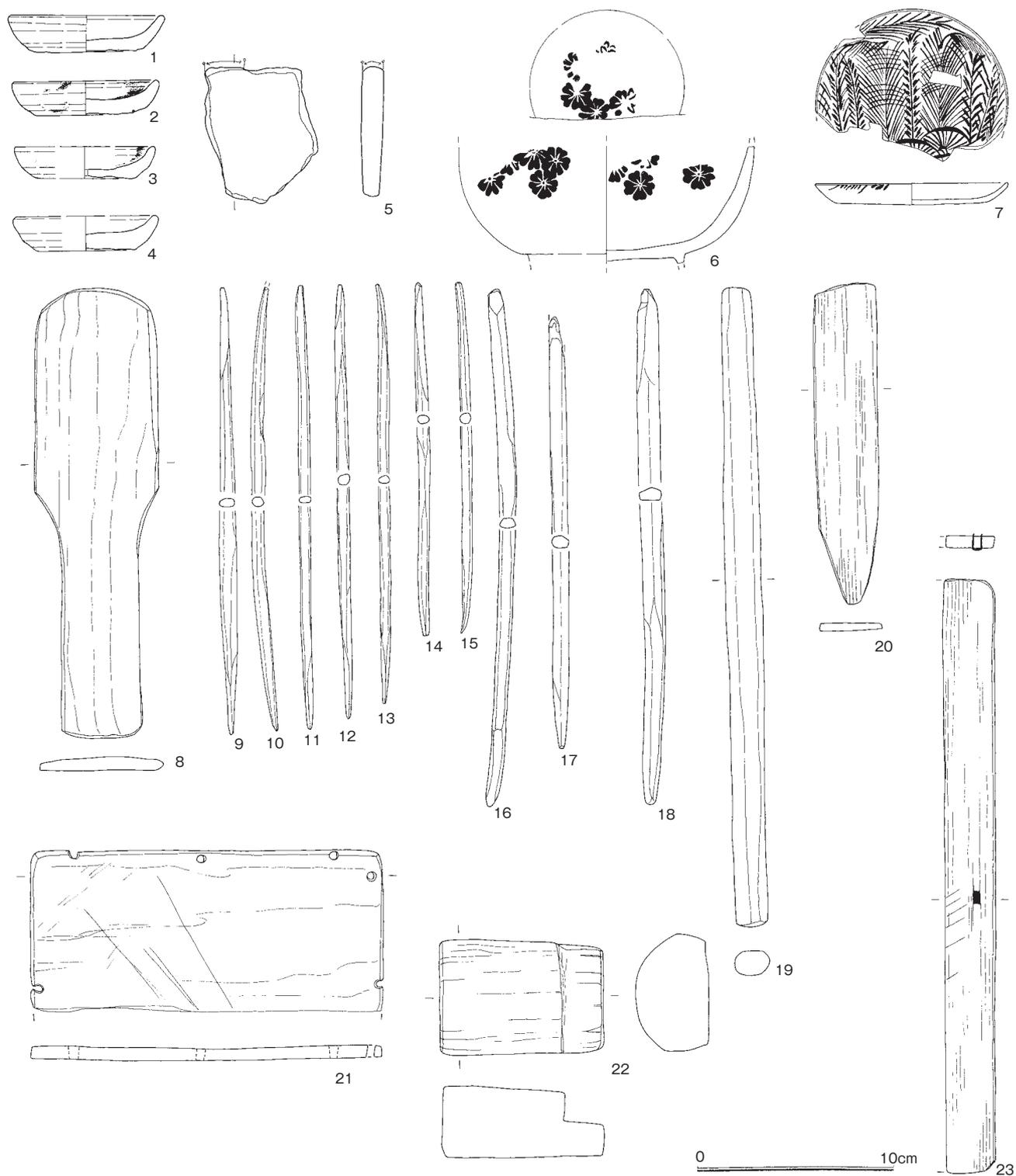


図29 土坑9出土遺物(1)

【貝殻】ハマグリ 33・カキ 1※2枚貝は片方で1とカウント

【果核】スモモ 1と半割 1

4面Pit (図27)

4面からは9口のPitが検出された。Pit12以外は礎板を伴っているが、いずれも掘立柱建物等の並びをつかむことはできなかった。深さは検出面から20～30cm前後を測る。

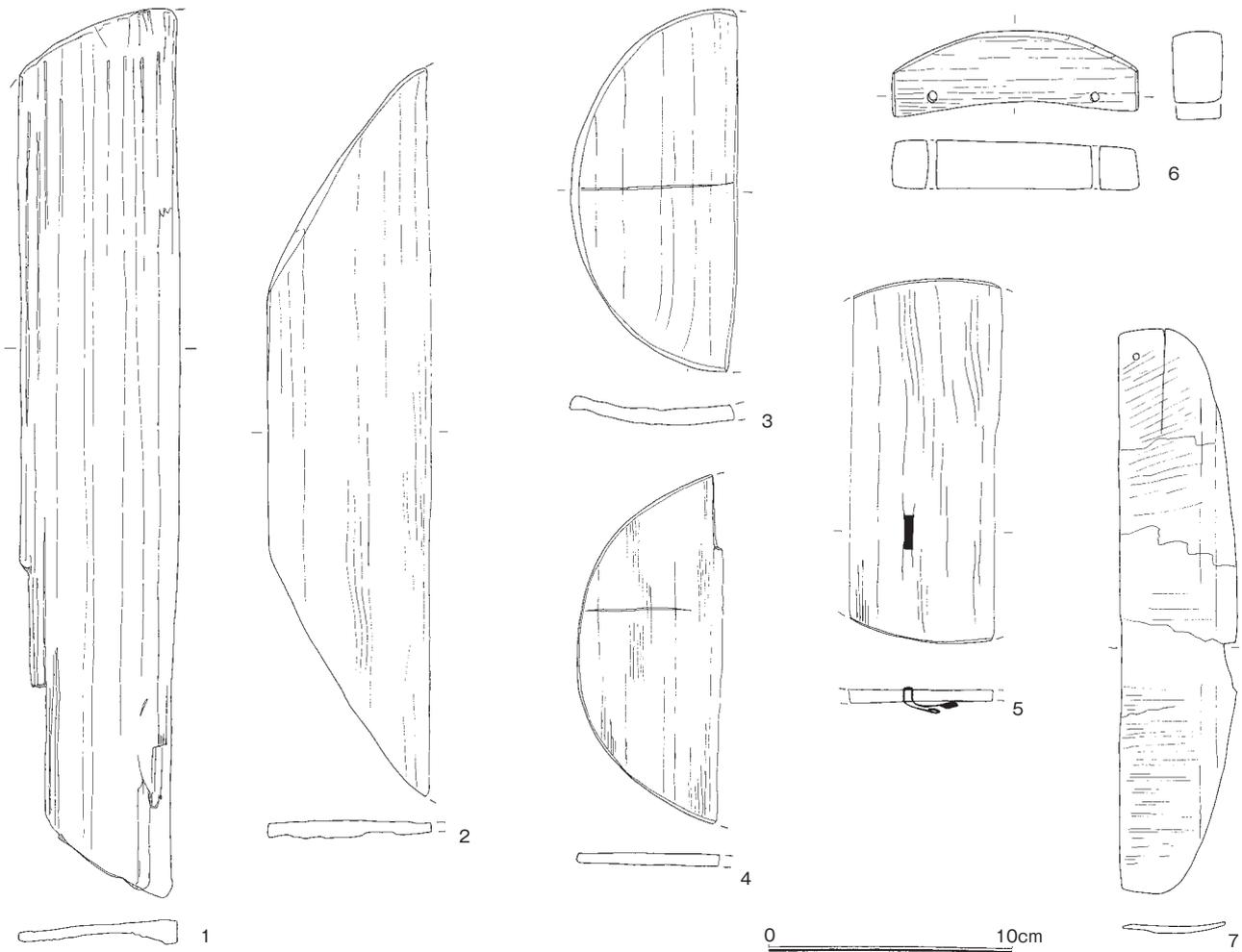


図30 土坑9出土遺物(2)

4面出土遺物(図31～34)

図31～34は4面出土遺物である。寸法は表の通り。図31-1～31はかわらけ。1～11は大皿、12～31は小皿である。大皿は底径が比較的小さく、丸味を持ち、深い。小皿は底径が大きく、浅い。ただし、30・31は器壁が薄手で深い薄手丸深タイプに類する。30の内底面には斜格子状に墨書されている。8・10・13・26・29・31は灯明皿で、器表に煤が付着している。図31-32は内折れかわらけ。轆轤成形、底部は糸切り。

図31-33～41は舶載陶磁器。33～35は青磁蓮弁文碗。釉調は33が灰色、34が緑青色、35が緑灰色を呈し、いずれも光沢は良いが、34・35は微気泡多く失透する。素地はいずれも灰色を呈す。36～38は白磁口元。36は碗、37・38は皿である。釉調は36が灰白色を呈し、微気泡多く、光沢・透明度共に悪い。37は青味のある白色、38は灰白色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地はいずれも灰白色を呈す。37・38の口縁には覆輪の痕跡が見られる。39・40は青白磁。39は梅瓶の口縁部片。釉調は水青色を呈し、微気泡多く白濁している。素地は灰味白色を呈す。40は小壺の口縁部片。放射状に条線が施される。釉調はくすんだ水青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈す。41は黄釉の盤の口縁部片。口縁端部は断面四角形を呈す。釉は内面は全面、口縁内側から外面にかけては横方向の縞状に掛けられている。釉調は黄褐色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈し粘性があり、石粒を多く含む。

図31-42は美濃系山茶碗。胎土は白褐色を呈し、緻密。底部は糸切りで、貼付高台で端部には粘痕が残る。内面にはごく少量自然釉が掛る。

図31-43～49は山茶碗窯系こね鉢。胎土は概ね灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。43・44・

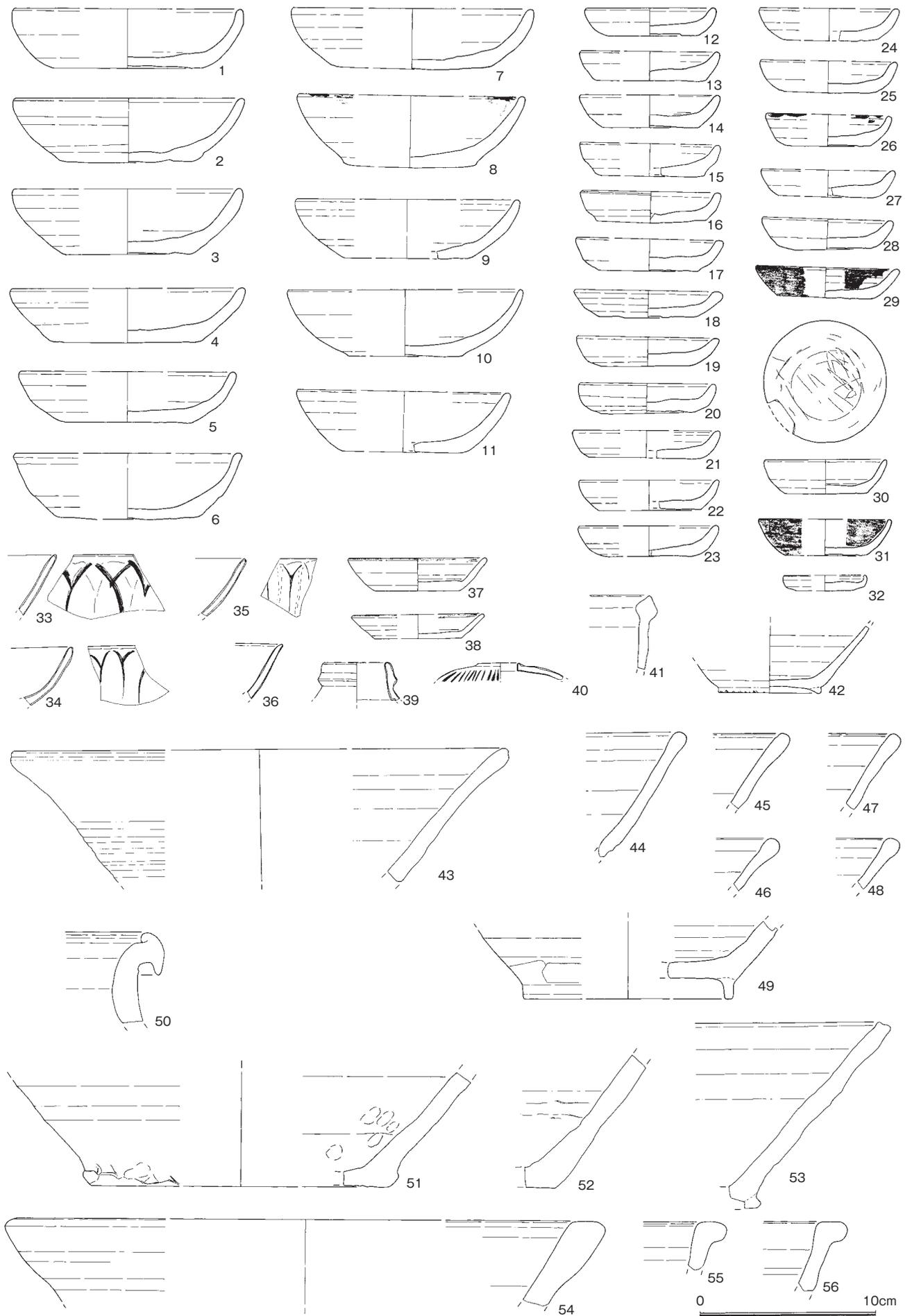


图31 4面出土遺物(1)

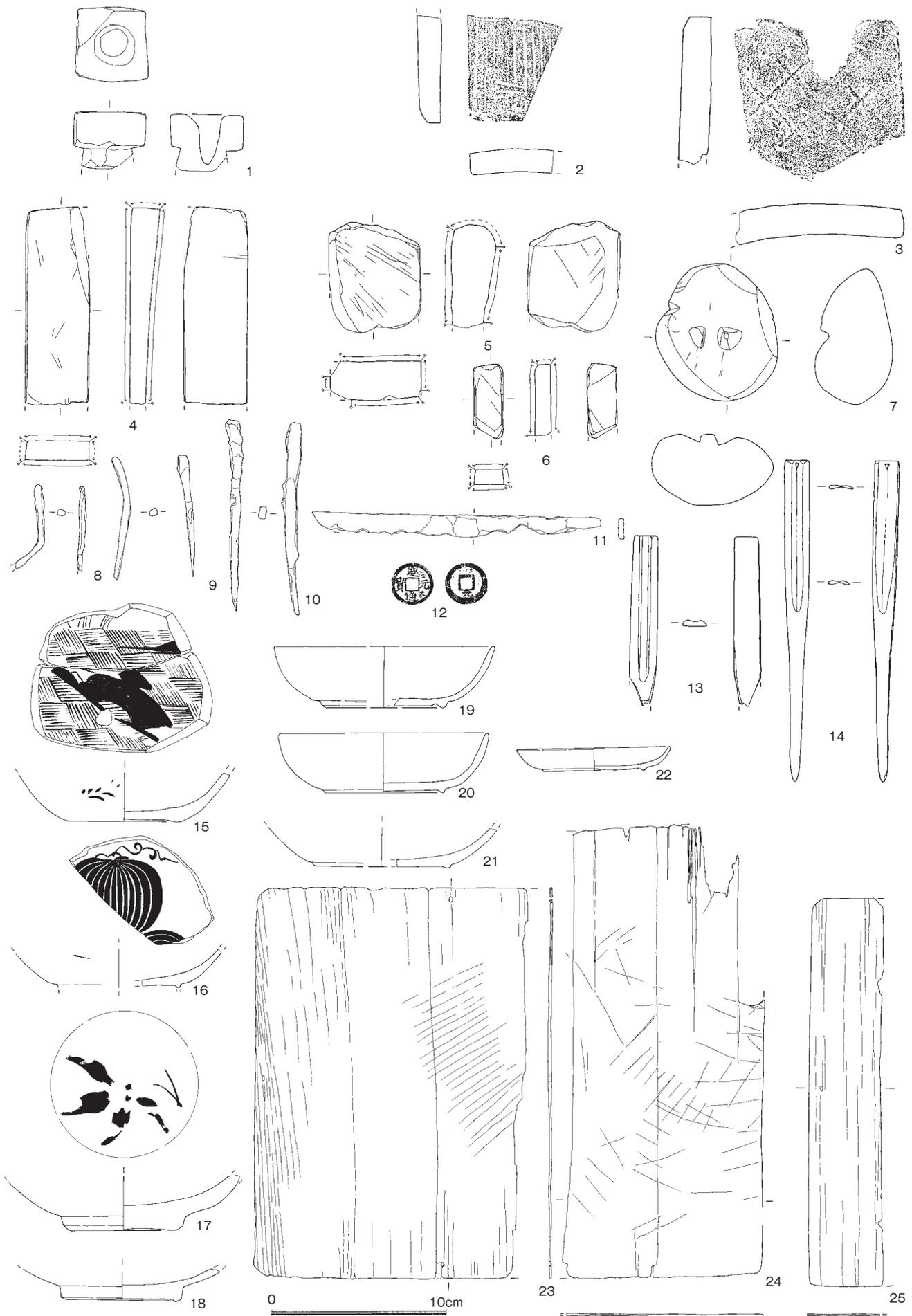


图32 4面出土遺物(2)

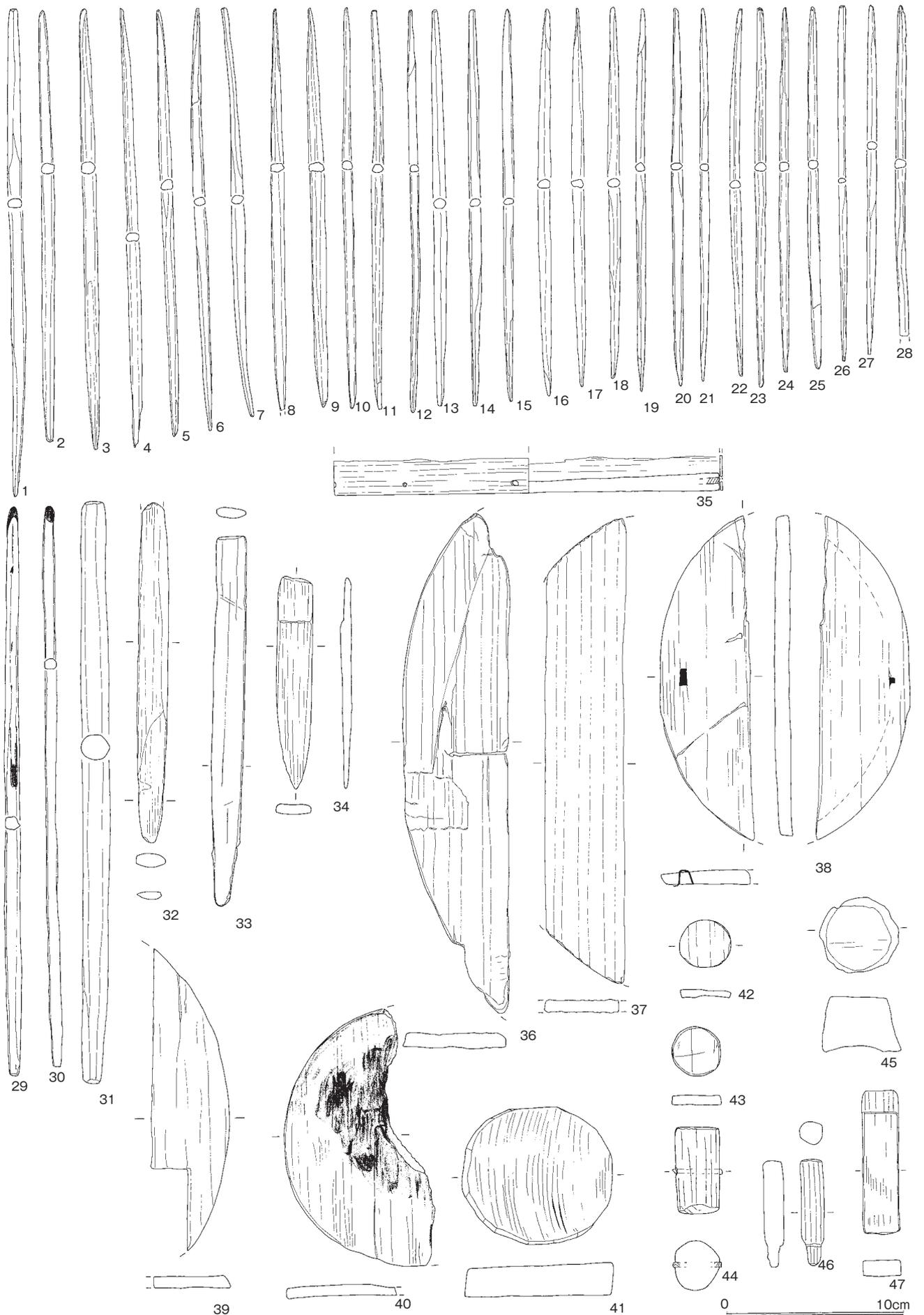


图33 4面出土遺物(3)

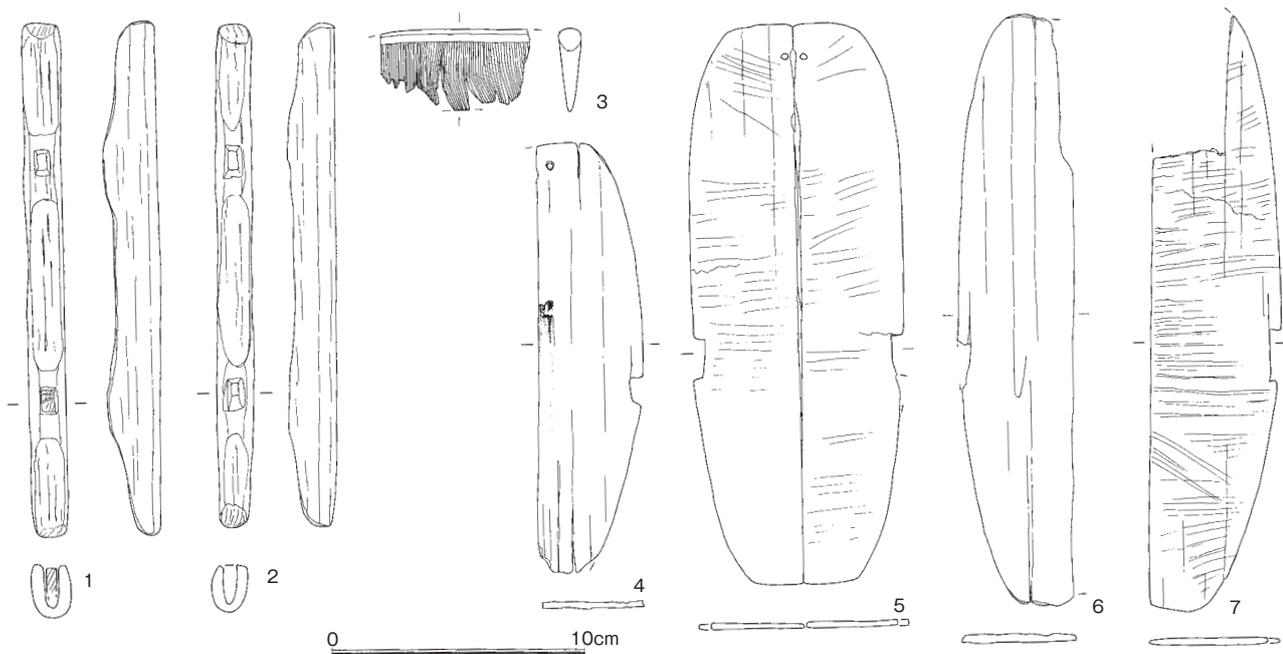


図34 4面出土遺物(4)

49の内面は磨滅している。49は貼付高台。

図31 - 50 ~ 53は常滑。50 ~ 52は甕、53はこね鉢である。器表は茶褐色~赤茶褐色を、胎土は灰色を呈す。

図31 - 54 ~ 56は手焙り。54は瓦質。胎土は暗灰色を呈し、微砂を多く含み粗い。55・56は同一個体の可能性が高い。土器質。胎土は肌色、胎芯は暗灰色を呈し、白色微粒を多く含む。口縁端部は外側に張り出している。

図32 - 1は土製品。土製五輪塔の地輪部分であろう。

図32 - 2・3は平瓦。3の凸面には格子叩き目。胎土は濃灰色を呈し、硬質。

図32 - 4 ~ 6は砥石。4は鳴滝産仕上げ砥。5は伊予産中砥。6は上野産中砥。

図32 - 7は土丹製品。土丹を加工しているが、用途は不明。

図32 - 8 ~ 11は鉄製品。8 ~ 10は釘。11は刀子。

図32 - 12は銭。慶元通宝・背元(初鑄1195年)。

図32 - 13・14は角製筭。

図32 - 15 ~ 22は漆器。15 ~ 21は黒漆塗り椀。22は黒漆塗り皿。15は波を意匠した情景文、16は瓜、17は花が描かれている。15は高台がない。

図32 - 23 ~ 25・図33・34は木製品である。図32 - 23 ~ 25は折敷。23・25の遺存する縁には籤を留めた穴が穿たれている。図33 - 1 ~ 28は箸。総数71本出土している。図33 - 29・30は菜箸。先端が炭化している。図33 - 31は棒状製品。菜箸の可能性もある。図33 - 32 ~ 34は籠状製品。図33 - 35は曲物の底部付近。図33 - 36 ~ 43は円板。36 ~ 40は曲物の底板か蓋。38には縁部に圧痕があり、樹皮が1カ所通されている。42・43は小型の曲物の底板の可能性もある。図33 - 44 ~ 46は栓。44の体部には棒が通されている。図33 - 47は用途不明の部材。図34 - 1・2は糸巻き。両側の部品。図34 - 3は櫛。黒漆が塗られている。図34 - 4 ~ 7は板草履の芯。藁圧痕が残る。

【骨】ニホンシカ：橈骨(1)、ノウサギ：大腿骨2・上腕骨1・下顎骨(2)・脛骨1・腓骨(1)、魚類：頭蓋骨(1)

【貝殻】アカニシ8、サザエ14、サザエ蓋7、キサゴ2835、ダンベイキサゴ26、バテイラ4、ホソウミニナ14、ゴマフニナ16、クボガイ1、タカラガイ1、ツメタガイ2、バイ1、アワビ4、ハマグリ447、サルボウ1、シオフキ1、イタヤガイ1、イガイ1、※2枚貝は片側で1とカウント

【果核】クルミ半割4、スモモ2

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
31	1	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	7.5	3.4	肌色系
31	2	4面	-	かわらけ	轆轤成形	13.2	8.0	3.7	肌色系
31	3	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.2)	7.4	3.8	肌色系
31	4	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.4)	8.6	3.1	橙色系
31	5	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.4)	7.3	2.9	肌色系
31	6	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	8.2	3.8	肌色系
31	7	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.8)	(8.0)	3.5	淡橙色系
31	8	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(7.6)	4.1	淡橙色系
31	9	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.8)	(7.0)	3.4	橙色系
31	10	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.4)	(6.5)	3.8	橙色系
31	11	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.2)	(7.3)	3.5	淡橙色系
31	12	4面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.6	1.6	肌色系
31	13	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(6.4)	1.7	淡橙色系
31	14	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.6	1.9	肌色系
31	15	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(6.2)	1.9	橙色系
31	16	4面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	6.3	1.8	橙色系
31	17	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.4)	5.8	1.9	肌色系
31	18	4面	-	かわらけ	轆轤成形	8.4	5.8	1.6	肌色系
31	19	4面	-	かわらけ	轆轤成形	8.1	5.3	1.7	橙色系
31	20	4面	-	かわらけ	轆轤成形	7.8	5.4	1.8	肌色系
31	21	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.4)	6.1	1.6	肌色系
31	22	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.8)	1.8	肌色系
31	23	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.3)	1.8	淡橙色系
31	24	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.4)	1.9	肌色系
31	25	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.8)	5.6	1.8	橙色系
31	26	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	5.0	1.8	橙色系
31	27	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(5.5)	1.5	橙色系
31	28	4面	-	かわらけ	轆轤成形	7.5	5.2	1.9	橙色系
31	29	4面	-	かわらけ	轆轤成形	8.2	5.4	1.7	肌色系
31	30	4面	-	かわらけ	轆轤成形	7.0	4.7	1.9	橙色系
31	31	4面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.6)	(4.6)	2.1	肌色系
31	32	4面	-	内折れかわらけ	轆轤成形	(4.8)	(3.3)	0.9	肌色系
31	37	4面	-	白磁	口兀皿	7.9	4.8	1.9	-
31	38	4面	-	白磁	口兀皿	(7.6)	(4.9)	1.4	-
31	39	4面	-	青白磁	梅瓶	(3.6)	-	-	-
31	40	4面	-	青白磁	小壺	(2.2)	-	-	-
31	42	4面	-	美濃系	山茶碗	-	5.9	-	-
31	43	4面	-	山茶碗窯系	こね鉢	(28.0)	-	-	-
31	49	4面	-	山茶碗窯系	こね鉢	-	(12.0)	-	-
31	51	4面	-	常滑	甕	-	(17.0)	-	-
31	54	4面	-	瓦質	手焙り	(34.4)	-	-	-
32	1	4面	-	土製品	五輪塔(地輪)	[3.4]	3.8	3.8	-
32	2	4面	-	平瓦	-	[6.0]	[5.5]	-	-
32	3	4面	-	平瓦	格子叩き目	[8.5]	[9.7]	-	-
32	4	4面	-	鳴滝産	仕上げ砥	[11.3]	3.6	1.6	-
32	5	4面	-	伊予産	中砥	[6.0]	5.2	2.5	-
32	6	4面	-	上野産	中砥	[4.3]	1.7	0.9	-
32	7	4面	-	土丹製品	不明	8.0	7.0	4.1	-
32	8	4面	-	鉄製品	釘	4.9	1.5	0.4	-
32	9	4面	-	鉄製品	釘	7.0	0.7	0.4	-
32	10	4面	-	鉄製品	釘	11.1	0.6	0.8	-

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
32	11	4面	-	鉄製品	刀子	[16.5]	[1.3]	0.3	-
32	12	4面	-	銭	慶元通宝	2.4	2.4	-	-
32	13	4面	-	角製品	筭	[9.8]	1.5	0.3	-
32	14	4面	-	角製品	筭	18.4	1.4	0.3	-
32	15	4面	-	漆器	椀	-	6.4	-	-
32	16	4面	-	漆器	椀	-	(7.0)	-	-
32	17	4面	-	漆器	椀	-	6.1	-	-
32	18	4面	-	漆器	椀	-	6.8	-	-
32	19	4面	-	漆器	椀	(12.6)	(7.2)	3.4	-
32	20	4面	-	漆器	椀	(12.0)	6.8	3.5	-
32	21	4面	-	漆器	椀	-	(7.8)	-	-
32	22	4面	-	漆器	皿	8.8	5.8	1.3	-
32	23	4面	-	木製品	折敷	22.5	[15.5]	0.2	-
32	24	4面	-	木製品	折敷	26.0	[11.3]	0.2	-
32	25	4面	-	木製品	折敷	22.3	[4.1]	0.1	-
33	1	4面	-	木製品	箸	27.8	0.8	0.5	-
33	2	4面	-	木製品	箸	24.6	0.8	0.6	-
33	3	4面	-	木製品	箸	25.2	0.8	0.7	-
33	4	4面	-	木製品	箸	25.0	0.7	0.5	-
33	5	4面	-	木製品	箸	24.3	0.7	0.6	-
33	6	4面	-	木製品	箸	24.1	0.6	0.5	-
33	7	4面	-	木製品	箸	23.4	0.7	0.5	-
33	8	4面	-	木製品	箸	23.5	0.7	0.5	-
33	9	4面	-	木製品	箸	22.8	0.8	0.5	-
33	10	4面	-	木製品	箸	22.9	0.6	0.5	-
33	11	4面	-	木製品	箸	22.7	0.6	0.5	-
33	12	4面	-	木製品	箸	22.9	0.5	0.4	-
33	13	4面	-	木製品	箸	22.6	0.7	0.6	-
33	14	4面	-	木製品	箸	22.6	0.6	0.4	-
33	15	4面	-	木製品	箸	22.4	0.6	0.3	-
33	16	4面	-	木製品	箸	22.1	0.7	0.5	-
33	17	4面	-	木製品	箸	21.6	0.7	0.5	-
33	18	4面	-	木製品	箸	21.1	0.7	0.5	-
33	19	4面	-	木製品	箸	21.8	0.5	0.5	-
33	20	4面	-	木製品	箸	21.5	0.7	0.4	-
33	21	4面	-	木製品	箸	21.2	0.5	0.4	-
33	22	4面	-	木製品	箸	20.9	0.6	0.5	-
33	23	4面	-	木製品	箸	21.7	0.6	0.5	-
33	24	4面	-	木製品	箸	20.8	0.6	0.5	-
33	25	4面	-	木製品	箸	20.6	0.6	0.5	-
33	26	4面	-	木製品	箸	20.3	0.4	0.3	-
33	27	4面	-	木製品	箸	19.9	0.6	0.5	-
33	28	4面	-	木製品	箸	[18.0]	0.6	0.5	-
33	29	4面	-	木製品	菜箸	32.5	0.8	0.7	-
33	30	4面	-	木製品	菜箸	32.0	0.7	0.6	-
33	31	4面	-	木製品	棒状製品	33.2	1.6	1.5	-
33	32	4面	-	木製品	筥状製品	[19.4]	1.7	0.8	-
33	33	4面	-	木製品	筥状製品	21.1	1.7	0.6	-
33	34	4面	-	木製品	筥状製品	12.0	2.0	0.6	-
33	35	4面	-	木製品	曲物	(22.0)	22.0	[2.0]	-
33	36	4面	-	木製品	円板	[28.5]	[5.8]	0.9	-
33	37	4面	-	木製品	円板	[26.5]	[4.5]	0.8	-
33	38	4面	-	木製品	円板	[18.3]	[5.1]	0.9	-
33	39	4面	-	木製品	円板	[17.5]	[4.5]	0.7	-
33	40	4面	-	木製品	円板	[14.6]	[8.0]	0.6	-
33	41	4面	-	木製品	円板	7.5	8.2	1.8	-
33	42	4面	-	木製品	円板	2.7	2.9	0.5	-
33	43	4面	-	木製品	円板	2.2	2.8	0.6	-

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
33	44	4面	-	木製品	栓	5.0	2.6	2.8	-
33	45	4面	-	木製品	栓	3.0	4.4	4.2	-
33	46	4面	-	木製品	栓	6.1	1.3	1.3	-
33	47	4面	-	木製品	用途不明	8.2	2.0	0.9	-
34	1	4面	-	木製品	糸巻き	20.4	2.1	1.5	-
34	2	4面	-	木製品	糸巻き	20.0	1.9	1.4	-
34	3	4面	-	木製品	櫛	3.3	[5.9]	0.9	-
34	4	4面	-	木製品	板草履の芯	17.1	[4.2]	0.3	-
34	5	4面	-	木製品	板草履の芯	22.2	8.4	0.3	-
34	6	4面	-	木製品	板草履の芯	23.6	[4.6]	0.4	-
34	7	4面	-	木製品	板草履の芯	[22.0]	[5.0]	0.3	-

第4b面 (図35)

第4b面はⅡ区のみにも4面下10cm、海拔6.1m前後に検出された。やや弱い地業面である。

板壁建物2 (図36)

板壁建物2はグリッド(x10、y2)付近、海拔6.1m前後に検出された。杭2本と板材が東西方向の同一軸線状に検出された。杭と板の先端は炭化している。東西軸線方向はE-7°-Sである。

4b面出土遺物 (図37)

図37は4b面出土遺物である。寸法は表の通り。

1～11はかわらけ。1は手づくねかわらけの小皿。
 2～11は糸切り底のかわらけ。1・5～8などの13世紀前半のかわらけが混入しているが、4b面は4面から5面への移行期13世紀後半～末葉であろう。
 12は青白磁合子の蓋である。菊花文の型押し成形。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に良い。内側面は露胎。胎土は白色を呈す。
 13は山茶碗。胎土は淡橙色を呈し、白色小粒を含む。
 14は山茶碗窯系こね鉢の底部片。胎土は灰色を呈し、石粒を含み粗い。内面は磨滅している。
 15は平瓦。凸面は磨滅している。
 16～18は鉄釘。19は銭。景祐元寶(初鑄1034年)。
 20～40は木製品。20は折敷。遺存部分では穴が3カ所に穿たれている。
 21～30は箸。出土総数は16本。31は菜箸。32～34は棒状製品。35は篋状製品。
 36は用途不明の板。37は黒漆塗りの櫛。38は円板。曲物の底板。39・40は板草履の芯。

【骨】イヌ：大腿骨1、小型哺乳類：橈骨(1)・部位不明(1)、魚類：主鰓蓋骨(1)

【貝殻】アカニシ4、サザエ1、サザエの蓋1、ダンベイキサゴ6、バテイラ1、ハマグリ28、マガキ2、マダカアワビ1※2枚貝は片側を1とカウント。

【果核】クルミ半割2

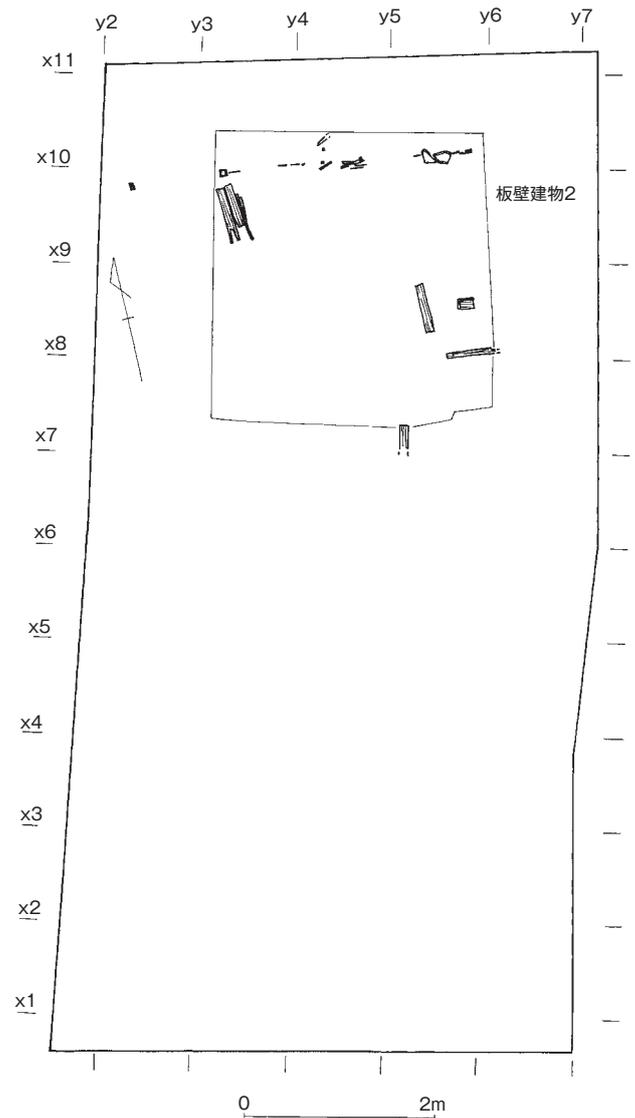


図35 4b面遺構配置図

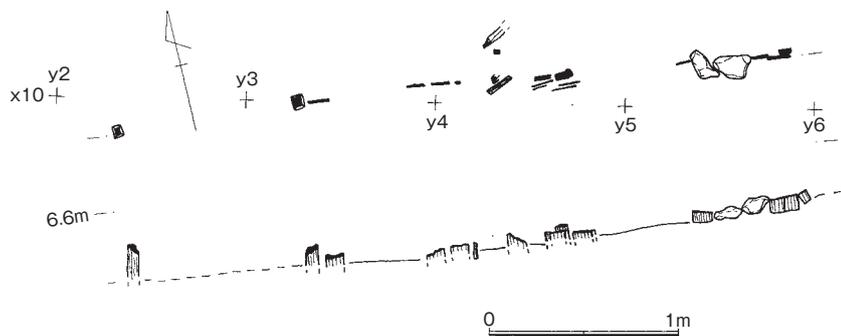


図36 4b面板壁建物2

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
37	1	4b面	-	かわらけ	手づくね	(8.2)	-	1.8	淡橙色系
37	2	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	12.8	7.2	3.6	肌色系
37	3	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.6)	7.6	3.1	淡橙色系
37	4	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(12.0)	7.2	3.5	肌色系
37	5	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.8)	6.3	1.6	肌色系
37	6	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	5.9	1.6	肌色系
37	7	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(5.9)	1.6	肌色系
37	8	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	(6.1)	1.8	橙色系
37	9	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	8.0	4.6	2.1	橙色系
37	10	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	7.6	5.0	2.3	橙色系
37	11	4b面	-	かわらけ	轆轤成形	(7.2)	4.8	2.2	肌色系
37	12	4b面	-	青白磁	合子の蓋	6.5	6.0	2.3	-
37	13	4b面	-	-	山茶碗	-	(8.0)	-	-
37	15	4b面	-	平瓦	-	[8.1]	[9.0]	-	-
37	16	4b面	-	鉄製品	釘	6.5	0.5	0.5	-
37	17	4b面	-	鉄製品	釘	5.2	0.5	0.3	-
37	18	4b面	-	鉄製品	釘	5.6	0.5	0.4	-
37	19	4b面	-	銭	景祐元寶	2.4	2.4	-	-
37	20	4b面	-	木製品	折敷	21.6	[9.8]	0.2	-
37	21	4b面	-	木製品	箸	21.2	0.8	0.6	-
37	22	4b面	-	木製品	箸	22.0	0.8	0.8	-
37	23	4b面	-	木製品	箸	22.7	0.7	0.4	-
37	24	4b面	-	木製品	箸	22.0	0.8	0.6	-
37	25	4b面	-	木製品	箸	22.5	0.7	0.6	-
37	26	4b面	-	木製品	箸	22.5	0.7	0.6	-
37	27	4b面	-	木製品	箸	23.0	0.8	0.3	-
37	28	4b面	-	木製品	箸	23.5	0.8	0.6	-
37	29	4b面	-	木製品	箸	24.4	0.8	0.4	-
37	30	4b面	-	木製品	箸	23.9	0.5	0.5	-
37	31	4b面	-	木製品	菜箸	32.1	1.2	0.6	-
37	32	4b面	-	木製品	棒状製品	[21.5]	1.5	1.2	-
37	33	4b面	-	木製品	棒状製品	19.5	1.4	0.6	-
37	34	4b面	-	木製品	棒状製品	14.3	1.2	1.3	-
37	35	4b面	-	木製品	筥状製品	[10.3]	1.5	0.5	-
37	36	4b面	-	木製品	用途不明	[5.0]	2.4	0.3	-
37	37	4b面	-	木製品	櫛	4.2	[5.5]	0.9	-
37	38	4b面	-	木製品	円板	[38.0]	[7.1]	0.9	-
37	39	4b面	-	木製品	板草履の芯	23.8	[5.2]	0.5	-
37	40	4b面	-	木製品	板草履の芯	23.9	[5.4]	0.4	-

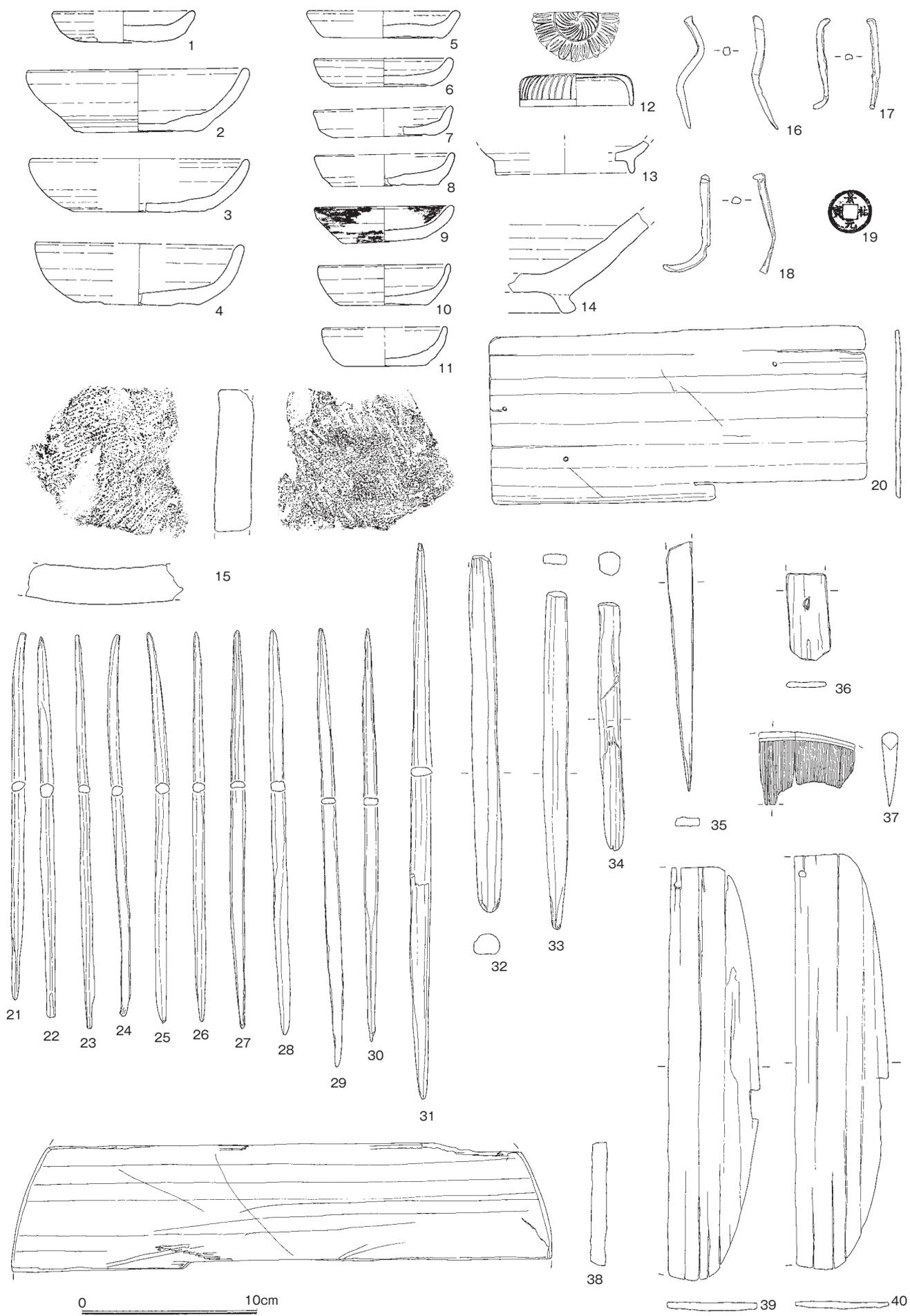


图37 4b面出土遺物

第5面 (図38)

第5面は4面下20～30cm、海拔5.9～6.0m前後に検出された。暗褐色粘質土の平坦な面である。土坑2基、Pit2口が検出された。

土坑3・出土遺物 (図39・40)

土坑3はグリッド(x4、y4)付近、海拔5.9m前後に検出された。平面形は若干南北に長い円形を呈す。南北幅83cm、東西幅70cm、深さは検出面から18cmを測る。

図40-1・2は土坑3出土遺物である。1・2はかわらけ。1は手づくね。胎土は橙色を呈し、微砂を含み粉質。寸法は口径(9.2)cm、器高1.9cmを測る。2は轆轤成形糸切り。寸法は口径(9.2)cm、底径(6.6)cm、器高1.7cmを測る。

土坑10・出土遺物 (図39・40)

土坑10はグリッド(x9、y4)付近、海拔6.0m前後に検出された。平面形は不整形円形を呈す。幅は長軸260cm、短軸190cm、深さは検出面から45cmを測る。埋土の土層は以下の通り。

1層：有機物堆積層 木片・貝殻片を含む。締り悪い。

2層：黒褐色粘質土層 貝殻細片(やや多)・砂粒・炭化物・木片を含む。粘性強い。締り良い。

3層：有機物堆積層 木片・貝殻片を含む。締り悪い。

図40-3～33は土坑10出土遺物である。3～9はかわらけ。3～5は手づくねの小皿。胎土は肌色を呈し、粉質。寸法は口径(10.0)cm・(8.8)cm・(8.6)cm、器高1.9cm・1.6cm・1.7cmを測る。6～9は

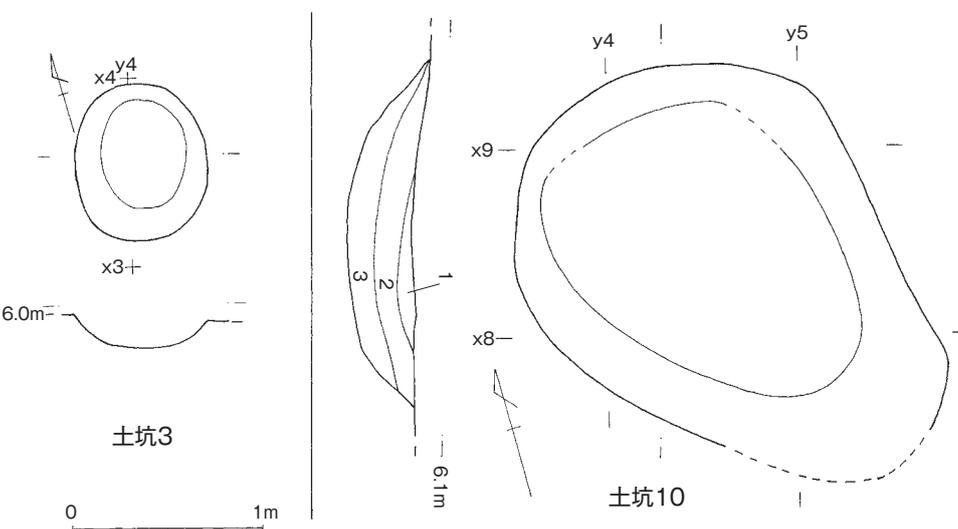


図39 5面土坑3、土坑10

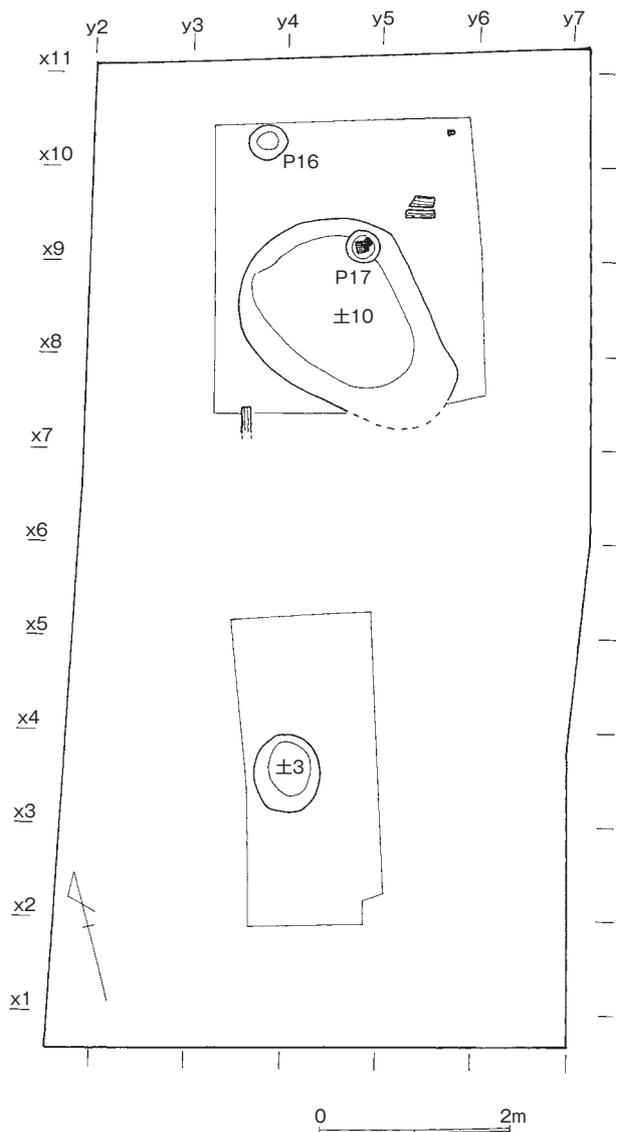


図38 5面遺構配置図

轆轤成形糸切り。胎土は6・7が橙色、8・9が肌色を呈す。7は小皿にしては大きく、器厚も厚い。寸法は口径(13.2)cm・(10.6)cm・(8.2)cm・(8.2)cm、底径は(8.7)cm・(8.0)cm・(6.0)cm・5.6cm、器高3.5cm・2.4cm・1.7cm・1.8cmを測る。7は器表に煤が付

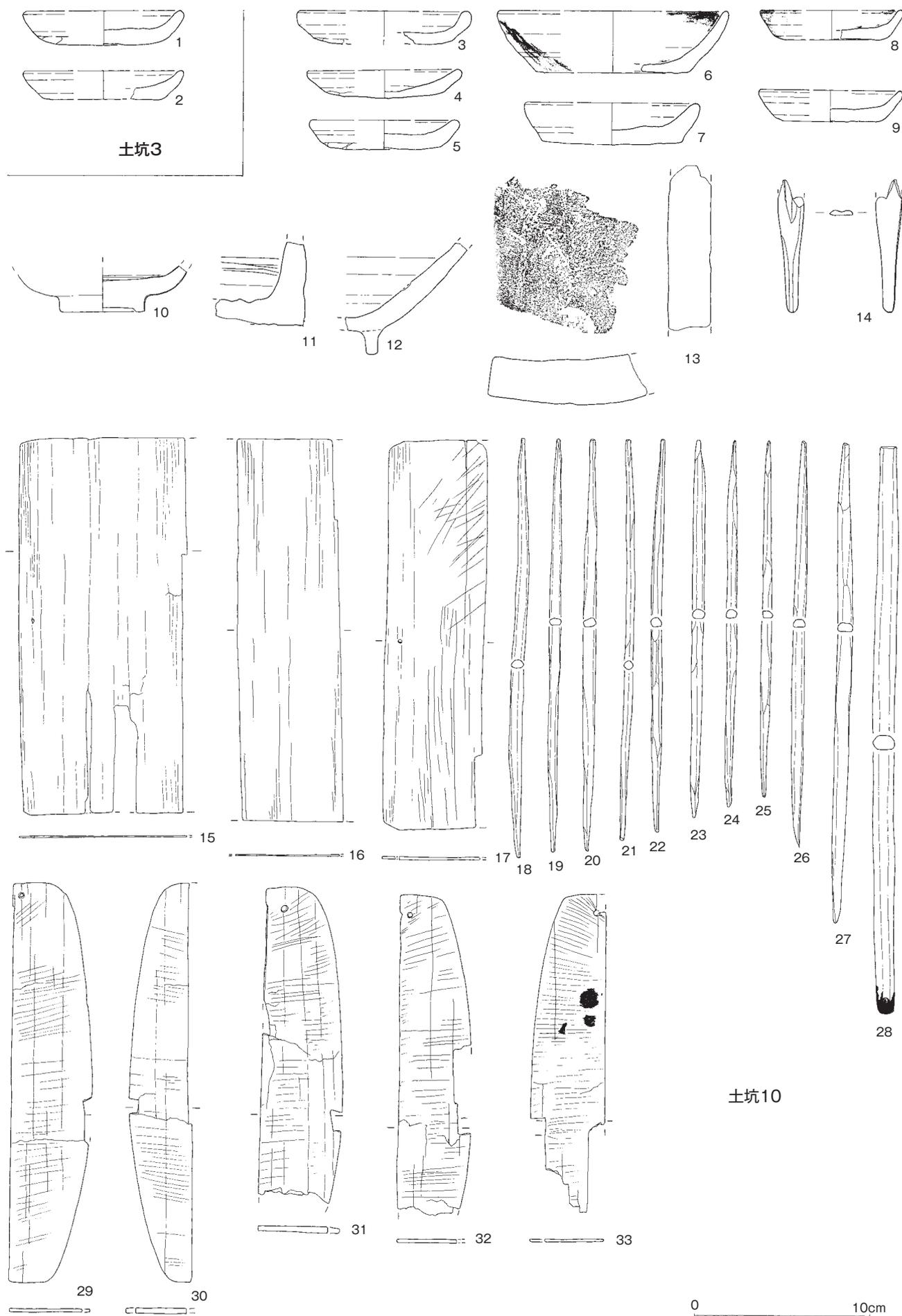


图40 土坑3·10出土遗物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
40	13	5面	土坑10	平瓦	-	[6.2]	[9.0]	-	-
40	14	5面	土坑10	角製品	筭	[7.6]	1.5	0.3	-
40	15	5面	土坑10	木製品	折敷	21.6	[9.3]	0.1	-
40	16	5面	土坑10	木製品	折敷	22.0	[5.9]	0.1	-
40	17	5面	土坑10	木製品	折敷	22.3	[5.6]	0.2	-
40	18	5面	土坑10	木製品	箸	24.1	0.7	0.5	-
40	19	5面	土坑10	木製品	箸	23.8	0.7	0.4	-
40	20	5面	土坑10	木製品	箸	23.7	0.7	0.5	-
40	21	5面	土坑10	木製品	箸	23.1	0.5	0.5	-
40	22	5面	土坑10	木製品	箸	22.6	0.6	0.5	-
40	23	5面	土坑10	木製品	箸	21.7	0.7	0.5	-
40	24	5面	土坑10	木製品	箸	21.1	0.6	0.5	-
40	25	5面	土坑10	木製品	箸	20.5	0.6	0.4	-
40	26	5面	土坑10	木製品	箸	23.4	0.9	0.5	-
40	27	5面	土坑10	木製品	箸	27.6	0.9	0.5	-
40	28	5面	土坑10	木製品	棒状製品	32.6	1.3	0.8	-
40	29	5面	土坑10	木製品	板草履の芯	23.0	[4.6]	0.2	-
40	30	5面	土坑10	木製品	板草履の芯	22.9	[3.3]	0.3	-
40	31	5面	土坑10	木製品	板草履の芯	[18.1]	[4.7]	0.3	-
40	32	5面	土坑10	木製品	板草履の芯	[18.4]	[4.1]	0.2	-
40	33	5面	土坑10	木製品	板草履の芯	[18.3]	[4.2]	0.2	-

着し、灯明皿である。10は青磁劃花文碗の底部片。底径は4.9cmを測る。釉調は灰味緑色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰色を呈す。11は渥美の小壺の底部片。器表には自然釉が特に内面に厚く掛る。胎土は黒灰色を呈し、堅緻。12は山茶碗窯系こね鉢の底部片。胎土は灰白色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。内面は磨滅している。13は平瓦。胎土は黒灰色を呈す。14は角製筭。15～33は木製品。寸法は表の通り。15～17は折敷。18～27は箸。出土総数は44本。28は棒状製品。先端は炭化している。29～33は板草履の芯。藁圧痕が残る。

【骨】ノウサギ：寛骨(1)、ネズミ：頭蓋骨(1)、肩甲骨(1)、クロダイ：主鰓蓋骨(1)

【貝殻】ダンベイキサゴ2、ツメタガイ1、サルボウガイ1、ハマグリ61、マガキ4、アワビ2

※2枚貝は片側を1とカウント

5面Pit (図38)

5面からは2口のPitが検出された。Pit17は礎板を伴っている。いずれも深さは検出面から30cm前後を測る。

5面出土遺物 (図41・42)

図41・42は5面出土遺物である。寸法は表の通り。図41-1～10はかわらけ。1・2は手づくねの大皿と小皿。3～10は轆轤成形底部は糸切り。3～7は大皿、8～10は小皿である。胎土は微砂を含み粉質。6は器表に煤が付着し、灯明皿である。

図41-11～13は舶載磁器。11は青磁蓮弁文碗。釉調は緑味灰色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は濃灰色を呈す。12は青磁折縁鉢。釉調は緑青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は白色を呈す。13は青磁蓮弁文大皿。内面に印刻で蓮弁文が施される。釉調は緑青色を呈し、光沢は良いが、微気泡多く、貫入が細かく入る。素地は灰色を呈す。

図41-14は山茶碗窯系こね鉢の口縁部片。胎土は灰色を呈し、白色石粒を多く含み粗い。

図41-15・16は常滑の甕の口縁部片。胎土は黒灰色を呈し、石粒を多く含み粗い。器表は自然釉が掛り、光沢がある。15は厚く掛る。

図41-17は内折れ白かわらけ。胎土は白色を呈し、水簸されきめ細かい。

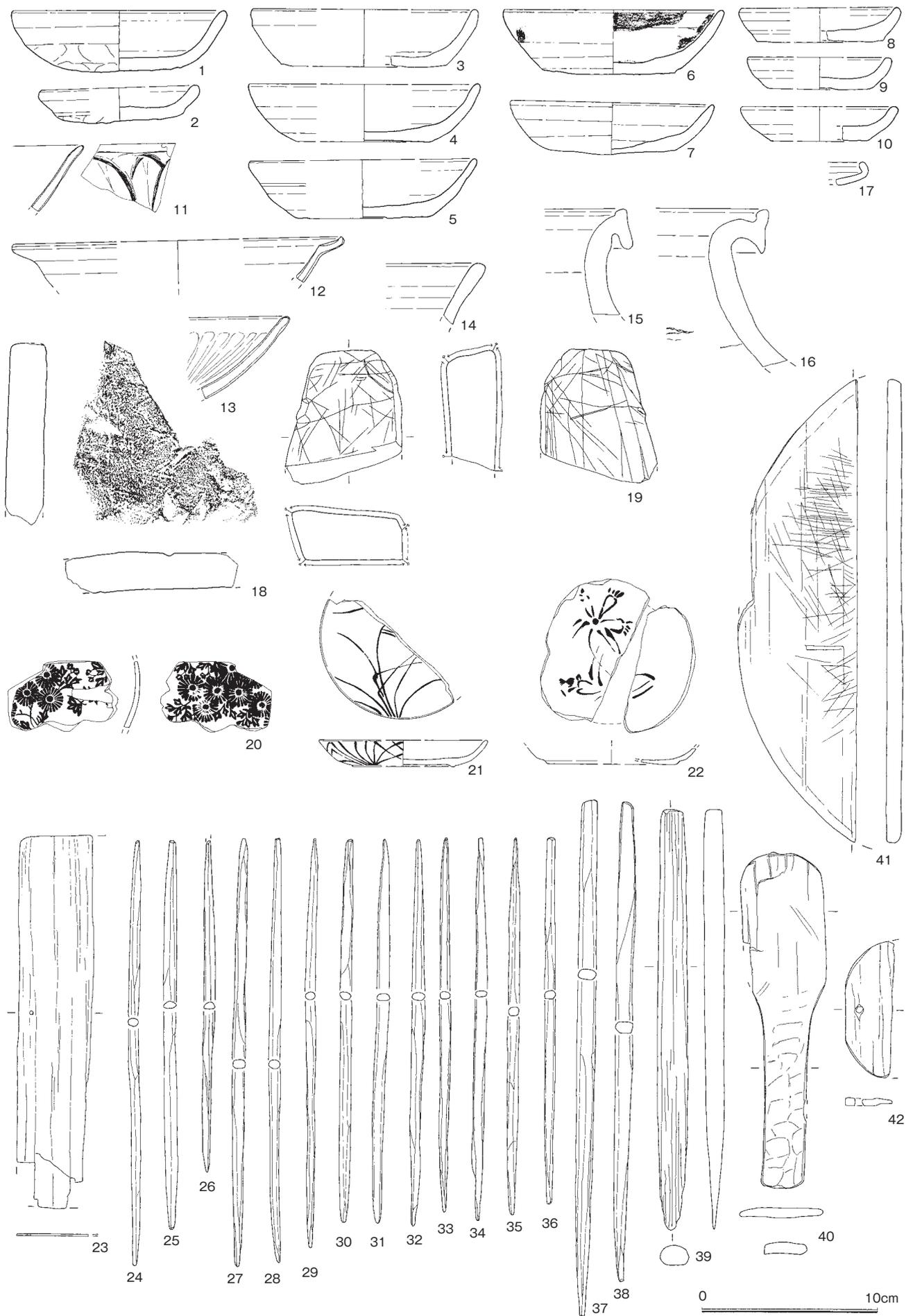


图41 5面出土遺物(1)

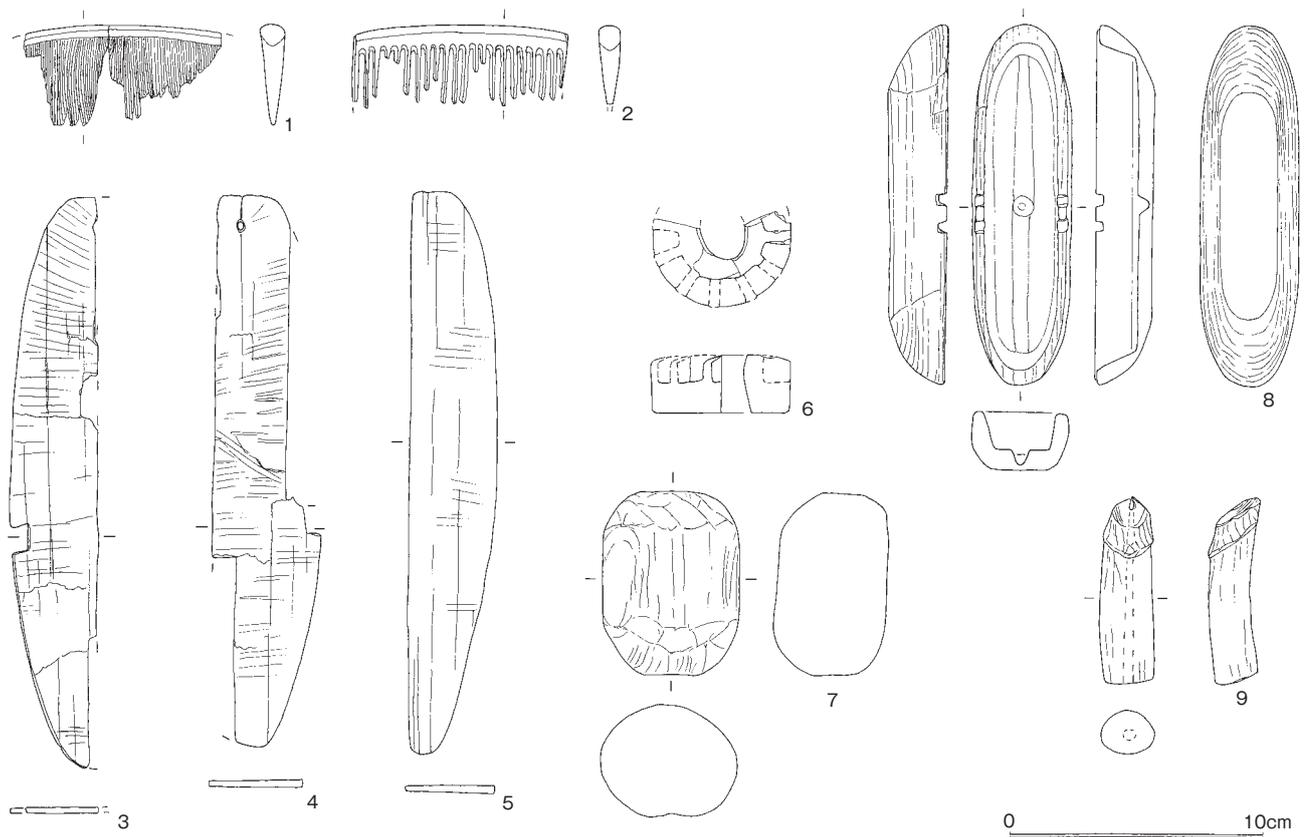


図42 5面出土遺物(2)

図41-18は平瓦。凸面には格子叩き目。胎土は灰色を呈す。

図41-19は石製品。産地は不明。若干青味のある濃灰色を呈し、細かく硬い。表面は滑らかで砥石の可能性はある。

図41-20～22は漆器。20は椀、21・22は皿。黒漆塗りで、朱漆で20は内外面に菊花をスタンプで、21・22は草花を手書きで描いている。

図41-23～42・図42は木製品。23は折敷。縁に籤を留める穴が開いている。24～36は箸。37・38は菜箸。39は棒状製品。40は杓文字。41は円板。図42-1・2は櫛。図42-3～5は板草履の芯。藁圧痕が残る。図42-6は傘轆轤。図42-7は球状製品。図42-8は舟形。舟艇中央に帆柱を立てる穴、舷側に帆柱を支える桁を装着する刻みが各々2ヶ所付けられている。図42-9は陽物の形代。

【骨】イヌ：下顎骨(1)

【貝殻】アカニシ7、サザエ1、サザエの蓋1、ダンベイキサゴ27、バテイラ1、ツメタガイ2、ハマグリ141、マガキ10、マダカアワビ4 ※2枚貝は片側を1とカウント

【果核】クルミ半割6、スモモ半割1

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
41	1	5面	-	かわらけ	手づくね	12.3	-	3.0	肌色系
41	2	5面	-	かわらけ	手づくね	(9.2)	-	2.0	橙色系
41	3	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(9.4)	3.3	橙色系
41	4	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	(7.6)	3.3	肌色系
41	5	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(13.0)	8.0	3.4	肌色系
41	6	5面	-	かわらけ	轆轤成形	12.6	7.5	3.7	淡橙色系
41	7	5面	-	かわらけ	轆轤成形	11.6	7.2	3.0	肌色系
41	8	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.2)	(7.2)	2.0	肌色系
41	9	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.2)	(5.9)	1.8	肌色系

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
41	10	5面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.0)	(5.6)	2.0	肌色系
41	12	5面	-	青磁	折縁鉢	(19.0)	-	-	-
41	18	5面	-	平瓦	格子叩き目	[10.4]	[9.9]	-	-
41	19	5面	-	石製品	用途不明	[6.8]	6.1	2.8	-
41	21	5面	-	漆器	皿	(9.6)	(5.8)	1.5	-
41	22	5面	-	漆器	皿	-	(7.4)	-	-
41	23	5面	-	木製品	折敷	21.4	[4.1]	0.1	-
41	24	5面	-	木製品	箸	24.5	0.6	0.5	-
41	25	5面	-	木製品	箸	22.4	0.7	0.5	-
41	26	5面	-	木製品	箸	[19.1]	0.6	0.4	-
41	27	5面	-	木製品	箸	24.6	0.7	0.5	-
41	28	5面	-	木製品	箸	24.3	0.7	0.5	-
41	29	5面	-	木製品	箸	23.5	0.6	0.5	-
41	30	5面	-	木製品	箸	22.0	0.6	0.5	-
41	31	5面	-	木製品	箸	22.0	0.7	0.4	-
41	32	5面	-	木製品	箸	22.2	0.8	0.4	-
41	33	5面	-	木製品	箸	21.5	0.6	0.4	-
41	34	5面	-	木製品	箸	22.0	0.7	0.3	-
41	35	5面	-	木製品	箸	21.7	0.6	0.5	-
41	36	5面	-	木製品	箸	21.0	0.6	0.5	-
41	37	5面	-	木製品	菜箸	29.7	1.0	0.6	-
41	38	5面	-	木製品	菜箸	27.6	1.0	0.7	-
41	39	5面	-	木製品	棒状製品	24.1	1.7	1.2	-
41	40	5面	-	木製品	杓文字	19.2	4.7	0.6	-
41	41	5面	-	木製品	円板	[26.5]	[6.8]	0.9	-
41	42	5面	-	木製品	円板	[7.8]	[3.3]	0.5	-
42	1	5面	-	木製品	櫛	4.0	[7.8]	0.9	-
42	2	5面	-	木製品	櫛	[3.2]	[8.5]	0.9	-
42	3	5面	-	木製品	板草履の芯	22.6	[3.5]	0.3	-
42	4	5面	-	木製品	板草履の芯	21.8	[4.3]	0.4	-
42	5	5面	-	木製品	板草履の芯	22.4	[3.5]	0.4	-
42	6	5面	-	木製品	傘轆轤	2.3	5.5	[3.0]	-
42	7	5面	-	木製品	球状製品	7.3	5.4	4.3	-
42	8	5面	-	木製品	舟形	14.4	3.9	2.3	-
42	9	5面	-	木製品	陽物形	7.5	2.1	1.7	-

第6面 (図43)

第6面は5面下20cm、海拔5.7m前後に検出された。混入物のほとんどない黒褐色粘質土の平坦な面である。Pit11口が検出された。Pitはその形態および配置から柱穴列2列を確認することができた。これらは掘立柱建物の可能性は十分あるが、2口のみを検出であるので、柱穴列として報告する。

柱穴列2 (図44)

柱穴列2はグリッド(x4、y4)付近、海拔5.7m前後に検出された。南北方向に並ぶ2口のPitである。芯々間の距離は210cmを測る。平面形は直径40cm前後の円形を呈し、深さは検出面から20cm前後を測る。南北軸線方向はN-8°-Eである。

柱穴列3 (図44)

柱穴列3はグリッド(x9、y3)付近、海拔5.7m前後に検出された。東西方向に並ぶ2口のPitである。芯々間の距離は210cmを測る。平面形は直径40～45cmを測る円形を呈し、深さは検出面から50cmを測る。いずれのPitにも最大径20cm前後を測る不整形の太い柱が検出された。Pit18は3枚の礎板が、Pit19は土丹が入れられていた。東西軸線方向はE-6°-Sである。

6面Pit (図43)

6面からは11口のPitが検出された。内、4口は柱穴列2・3を構成していた。その他のPitはPit36・37以外は礎板を伴っていた。しかし、いずれも掘り込みが10cm前後と浅く、上層面の掘り

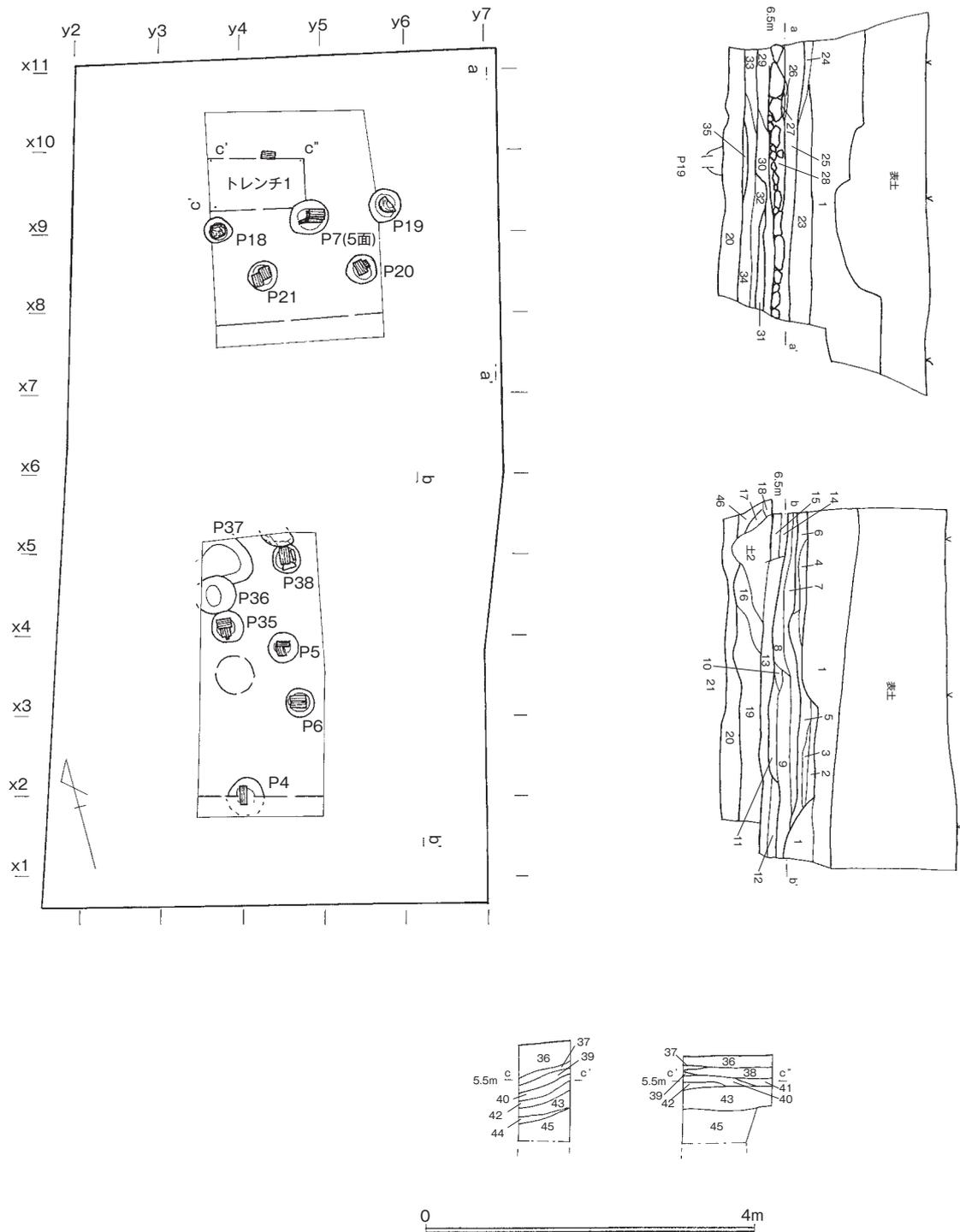


図43 6面遺構配置図

残しが第6面になって検出された可能性が高い。また、掘立柱建物等の並びをつかむことはできなかった。

6面出土遺物 (図45)

図45は6面出土遺物である。寸法は表の通り。1～21はかわらけ。1～10は手づくね。1～4は大皿、5～10は小皿である。口径が大きく、器壁中位に稜を持つ。胎土は微砂を含み粉質。11～20は轆轤成形糸切り底の小皿。11～19は口径・底径共に大きく、浅い。11～15は特に底径が大きく、器壁は直線的、やや外反して立ち上がる。胎土は微砂を含み粉質。16・17は橙色を呈し、微砂を多く含み、砂質で硬く焼き締まっている。21は内折れかわらけ。1・4・18は器表に煤が付着し、灯明皿である。

22～26は舶載陶磁器。22・23は青磁劃花文碗の口縁部片。釉調は緑灰色を呈し、光沢・透明度共に良い。

素地は灰色を呈す。24は白磁端反碗の口縁部片。釉調は白褐色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰味白色を呈す。25は青白磁合子の身。釉調は水青色を呈し、光沢・透明度共に良いが、微気泡多い。素地は白色を呈す。26は緑釉の盤の底部片。釉調は濃緑色を呈し、不透明。内面は銀化している。内面には暗文が施されている。素地は灰色を呈し、石粒等を多く含む。

27は瀬戸の入れ子。器表には自然釉が掛る。

28・29は渥美。28は壺の底部片、29はこね鉢の口縁部片である。胎土は暗灰色を呈し、堅緻。

30～33は平瓦。30・32の凸面には縄目、31は粗い、32は細かい格子叩き目がある。

34～36は鉄釘。

37～39は漆器。黒漆塗りの皿。37の内面には朱漆で菊花文がスタンプされる。

40～45は木製品。40は折敷。41～45は箸。45の先端は炭化している。

【骨】シカ：脛骨(1)、哺乳類：脛骨(1)、腓骨(1)、部位不明(3)

【貝殻】アカニシ3、ダンベイキサゴ1、サザエ2、サザエの蓋1、ツメタガイ2、ハマグリ37、マダカアワビ4 ※2枚貝は片側を1とカウント。

【果核】クルミ半割1、スモモ1

【スラグ】73.2 g、74.4 g

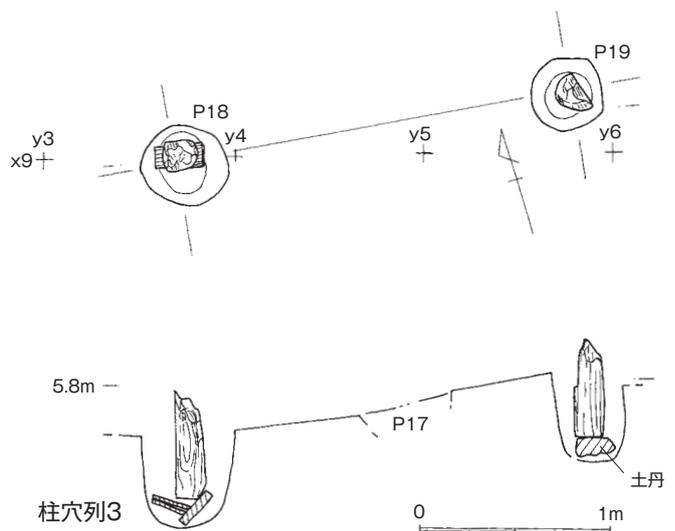
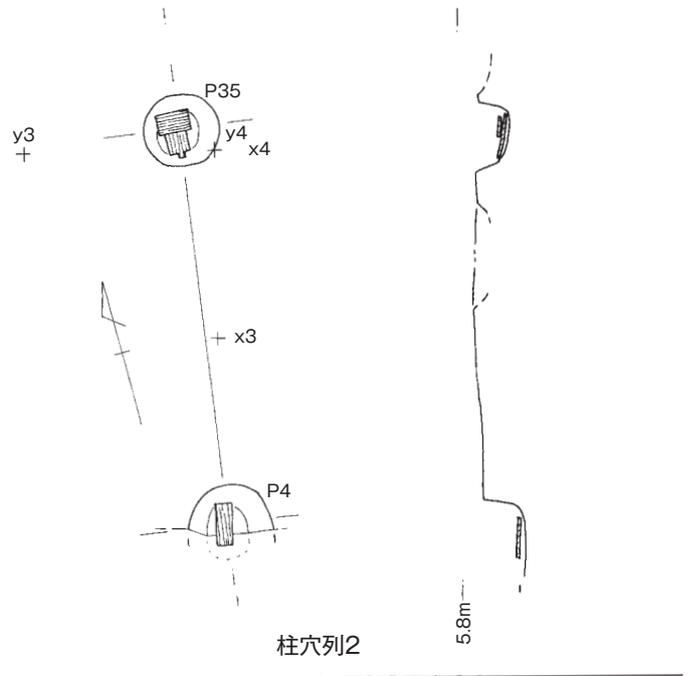


図44 6面柱穴列2・3

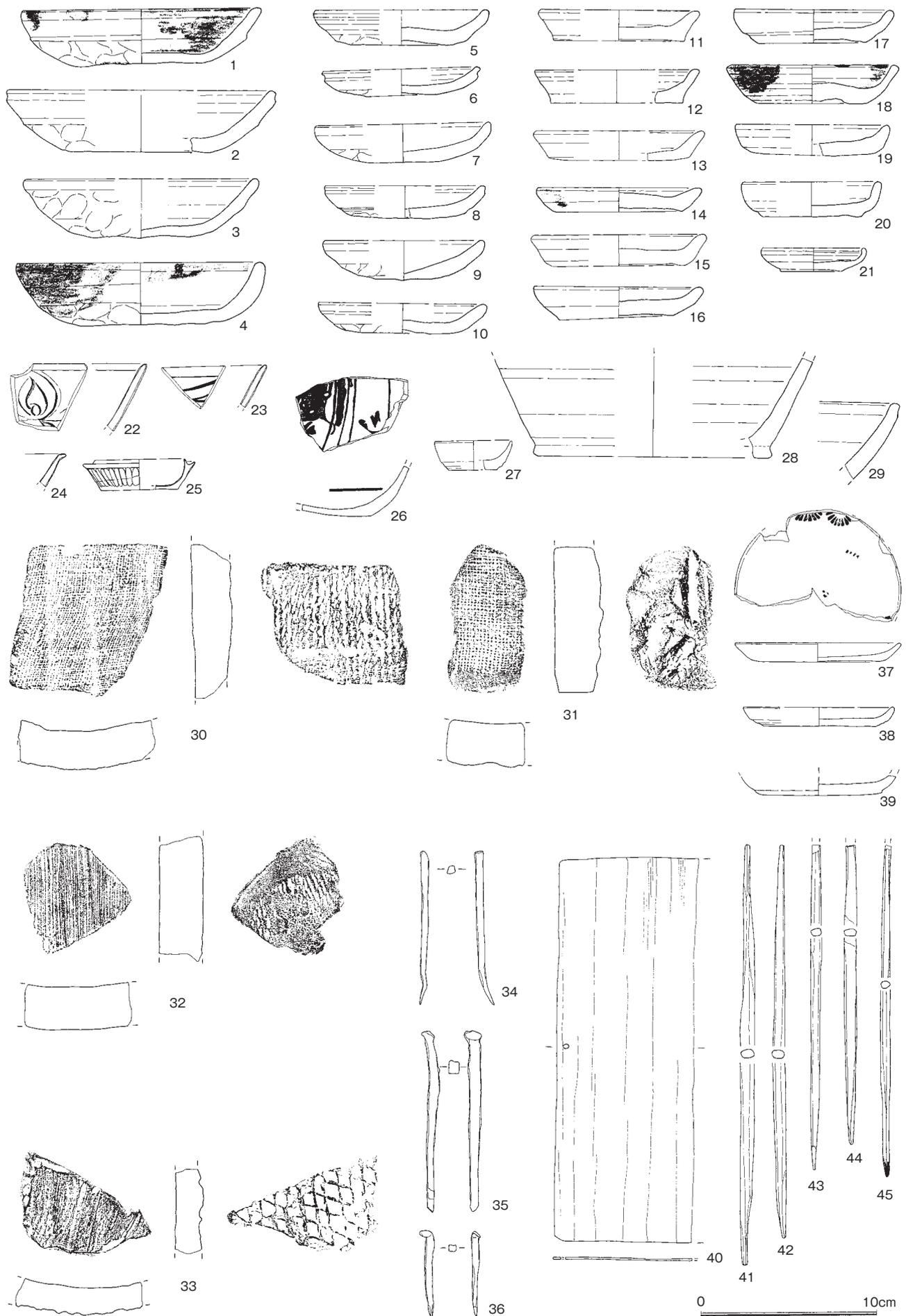


图45 6面出土遺物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
45	1	6面	-	かわらけ	手づくね	13.7	-	2.3	淡橙色系
45	2	6面	-	かわらけ	手づくね	15.4	-	3.5	肌色系
45	3	6面	-	かわらけ	手づくね	(13.4)	-	3.4	淡橙色系
45	4	6面	-	かわらけ	手づくね	14.2	-	3.6	淡橙色系
45	5	6面	-	かわらけ	手づくね	(10.0)	-	2.0	肌色系
45	6	6面	-	かわらけ	手づくね	(9.0)	-	1.6	肌色系
45	7	6面	-	かわらけ	手づくね	(10.0)	-	2.2	肌色系
45	8	6面	-	かわらけ	手づくね	(9.2)	-	1.9	橙色系
45	9	6面	-	かわらけ	手づくね	(9.2)	-	2.3	橙色系
45	10	6面	-	かわらけ	手づくね	(9.6)	-	1.7	橙色系
45	11	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.2)	(7.4)	1.8	淡橙色系
45	12	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.4)	(7.6)	1.9	橙色系
45	13	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(9.8)	(8.0)	1.7	橙色系
45	14	6面	-	かわらけ	轆轤成形	9.4	7.3	1.4	淡橙色系
45	15	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(10.0)	(7.6)	1.8	肌色系
45	16	6面	-	かわらけ	轆轤成形	9.6	6.6	1.9	橙色系
45	17	6面	-	かわらけ	轆轤成形	9.1	6.3	2.0	橙色系
45	18	6面	-	かわらけ	轆轤成形	9.8	6.4	2.2	肌色系
45	19	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.8)	(7.2)	1.8	橙色系
45	20	6面	-	かわらけ	轆轤成形	(8.0)	5.6	2.0	肌色系
45	21	6面	-	内折れかわらけ	轆轤成形	6.0	3.5	1.4	淡橙色系
45	25	6面	-	青白磁	合子の身	(5.0)	(4.3)	1.8	-
45	27	6面	-	瀬戸	入れ子	(4.4)	(2.7)	1.7	-
45	28	6面	-	渥美	壺	-	(13.6)	-	-
45	30	6面	-	平瓦	縄目	[8.8]	[7.7]	-	-
45	31	6面	-	平瓦	格子叩き目	[8.4]	[4.4]	-	-
45	32	6面	-	平瓦	縄目	[7.1]	[6.0]	-	-
45	33	6面	-	平瓦	格子叩き目	[4.9]	[7.2]	-	-
45	34	6面	-	鉄製品	釘	8.9	0.5	0.5	-
45	35	6面	-	鉄製品	釘	10.4	0.6	0.7	-
45	36	6面	-	鉄製品	釘	5.0	0.4	0.4	-
45	37	6面	-	漆器	皿	9.4	6.8	1.1	-
45	38	6面	-	漆器	皿	(8.7)	(6.2)	1.1	-
45	39	6面	-	漆器	皿	-	7.2	-	-
45	40	6面	-	木製品	折敷	22.0	[7.9]	0.1	-
45	41	6面	-	木製品	箸	24.1	0.7	0.5	-
45	42	6面	-	木製品	箸	22.5	0.7	0.5	-
45	43	6面	-	木製品	箸	[18.6]	0.6	0.4	-
45	44	6面	-	木製品	箸	[17.2]	0.7	0.4	-
45	45	6面	-	木製品	箸	[19.0]	0.5	0.4	-

トレンチ1・出土遺物 (図44・46)

第6面は混入物のほとんどない黒褐色粘土であったが、地山ではなかったため、グリッド(x10、y3)付近に東西60cm、南北30cmのトレンチを設定して下層を確認した。6面下1m、海拔4.7m前後まで掘り下げたが、明確な地山は検出されなかった。これ以上は安全確保のため掘り下げることはできなかった。以下、トレンチの土層は表の通りである。

番号	色調	土質	内容	粘性	締り
36	黒褐色	粘質土層	かわらけ片・0.5cm大の小土丹粒・炭化物(いずれも少)	つよい	よい
37	黒褐色	粘質土層	炭化物(とても多)・貝殻細片・木片	つよい	ややわるい
38	暗茶褐色	粘質土層	木片・貝殻片・炭化物(いずれも少)	つよい	よい
39	暗茶褐色	粘質土層	下層に木片(多)・土丹粒(少)	つよい	わるい
40	-	有機物堆積層	炭化物を帯状に含む	あり	わるい
41	黒褐色	粘質土層	灰色砂をブロック状に含む・木片・貝殻片	つよい	わるい
42	-	炭化物層	-	-	-
43	黒褐色	粘質土層	木片・かわらけ片	つよい	わるい
44	-	炭化物層	-	-	-
45	暗灰黒褐色	粘質土層	木片・土丹粒・土師片	つよい	わるい

図46はトレンチ1出土遺物である。寸法は表の通り。1・2は手づくねかわらけ。2の胎土は橙色を呈し精緻で、胎芯は黒灰色に残るが、硬く焼き締まっている。3～5は舶載磁器。3は白磁劃花文碗。釉調は灰白褐色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈す。4は白磁端反碗。釉調は灰白褐色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は灰白色を呈す。5は青白磁小壺の印花文蓋。釉調は濃水青色を呈し、光沢・透明度共に良い。素地は白色を呈す。内面は露胎。6・7は平瓦。6の凸面には縄目が、6・7の凹面には布目が付く。8～21は木製品。8～19は箸。20は菜箸。先端が炭化している。21は板草履の芯。藁圧痕が残る。

【貝殻】ハマグリ1 ※2枚貝は片側を1とカウント。

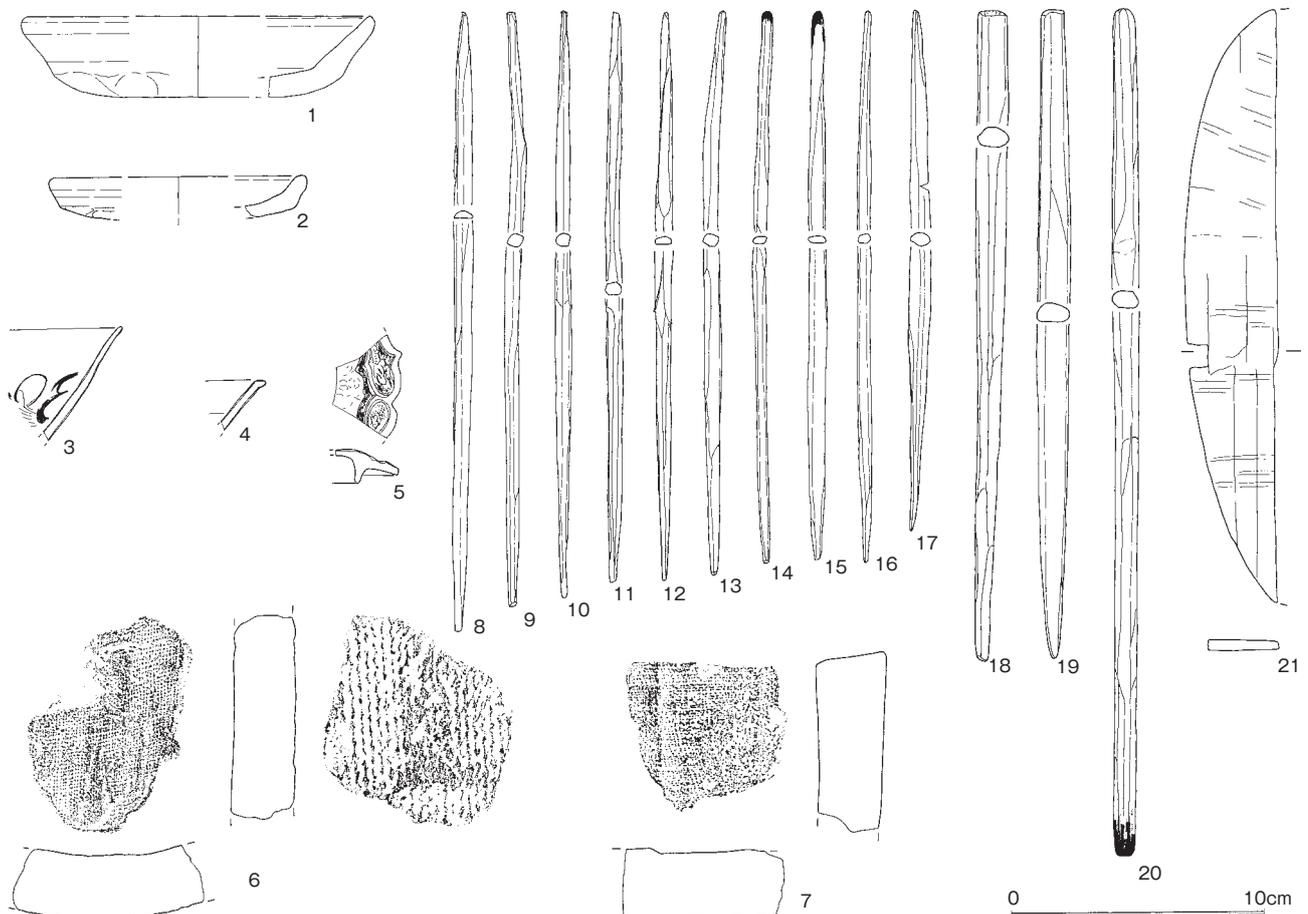


図46 トレンチ1出土遺物

図版番号	遺物番号	層位	遺構	製品名/産地	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	色調
46	1	-	トレンチ1	かわらけ	手づくね	(13.4)	-	3.4	橙色系
46	2	-	トレンチ1	かわらけ	手づくね	(10.2)	-	1.7	橙色系
46	6	-	トレンチ1	平瓦	縄目	[8.1]	[7.0]	-	-
46	7	-	トレンチ1	平瓦	-	[7.0]	[6.4]	-	-
46	8	-	トレンチ1	木製品	箸	24.6	0.8	0.3	-
46	9	-	トレンチ1	木製品	箸	23.3	0.6	0.5	-
46	10	-	トレンチ1	木製品	箸	23.3	0.6	0.5	-
46	11	-	トレンチ1	木製品	箸	22.7	0.7	0.5	-
46	12	-	トレンチ1	木製品	箸	22.6	0.7	0.3	-
46	13	-	トレンチ1	木製品	箸	22.4	0.6	0.5	-
46	14	-	トレンチ1	木製品	箸	21.9	0.5	0.3	-
46	15	-	トレンチ1	木製品	箸	21.8	0.7	0.3	-
46	16	-	トレンチ1	木製品	箸	21.9	0.5	0.4	-
46	17	-	トレンチ1	木製品	箸	20.9	0.8	0.6	-
46	18	-	トレンチ1	木製品	棒状製品	25.9	1.3	0.8	-
46	19	-	トレンチ1	木製品	棒状製品	25.8	1.3	0.8	-
46	20	-	トレンチ1	木製品	棒状製品	33.7	1.0	0.7	-
46	21	-	トレンチ1	木製品	板草履の芯	[23.6]	[2.8]	0.4	-

中世層出土の古代遺物 (図 47)

今回の調査からは中世層から須恵器の破片が数片出土している。1は坏身。2は坏蓋。3は広口壺の口縁部片。4～11は甕の胴部片。いずれも小破片のため詳細は不明である。

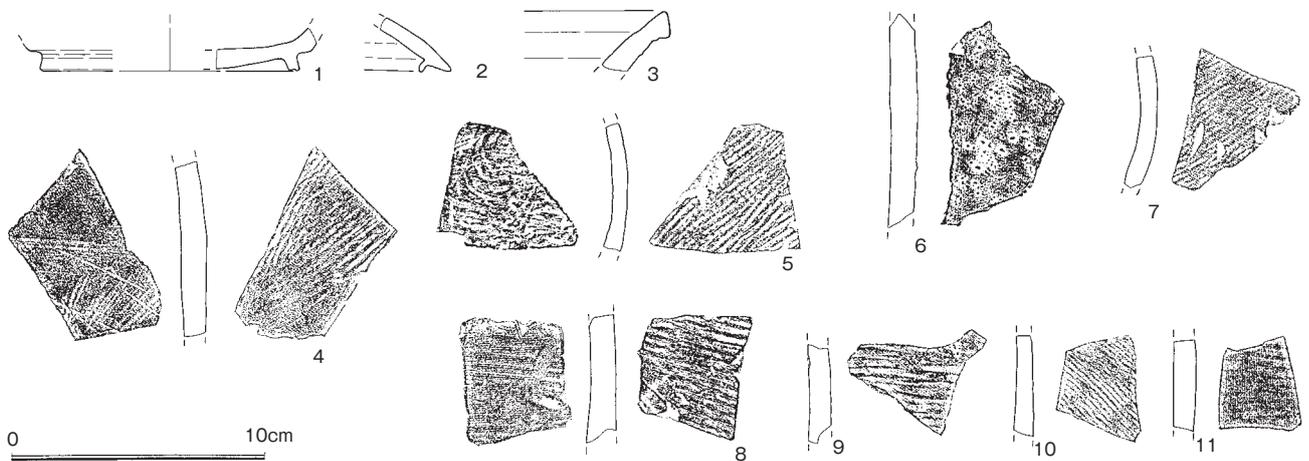


図 47 中世層出土の古代遺物

第四章 まとめ

今回の調査では第3章で詳細を報告したように、合計6面にわたる生活面が検出された。遺跡は重層的で、かなりの深さがあったため、下層に調査が進むに従って調査面積を狭めざるを得なかった。また、廃土の都合上、調査区を2分割して調査を行ったため、調査区中央部に空白ができてしまっている。しかし、検出された部分からはそれを補うほどの成果が得られたといえよう。

各面の時代区分は以下の通りである。

第6面（13世紀初頭～前半）

第5面（13世紀前半～中葉）

第4 b 面（13世紀後半～末葉）

第4面（14世紀初頭）

第3面（14世紀初頭～前半）

第2面・第1面（14世紀前半）

今回の現地発掘調査の直後に第1章に記述したように西隣りの敷地（御成町171番1外地点）で、規模の大きい発掘調査が実施されている。その調査結果を踏まえ、今回の調査を概観すると生活面の検出枚数に多少の差があるものの、中世期に関してはそれに沿った結果が得られたといえよう。ただ、比較すると、調査区がかなり狭かったため、柱穴群は確認されたものの、掘立柱建物等の1棟すべてを検出することはできなかった。

結論としては、当遺跡は西隣の遺跡で発見された「権力を有する御家人クラスの屋敷地か庇護の厚い寺院など」の敷地の一部に当ることは位置関係からみても確実である。検出遺構は板壁建物や掘立柱建物など、建物遺構が多く、土坑等のいわゆるゴミ穴は少ない。また、覆土から貝殻が多く出土しているが、これは地業材として使用している可能性がある。当遺跡地が屋敷内でのどのような性格を持った地区なのかははっきりとはしないが、母屋等の屋敷内の中心施設ではない付属施設的な性格の建物が建っていた場所のようである。

また、古代については西隣の調査地点で7世紀～9世紀の遺構群が検出されているが、当調査区においては中世層からの須恵器の破片の出土に留まっている。安全確保のため地山まで調査することは今回断念せざるを得なかったが、さらに下層に古代遺跡が当然ながら存在しているであろう。

今回の調査では本来ならば断片的な成果となるどころ、再三引き合いに出しているように、タイミング良く隣地で大規模な調査が実施され重要な遺跡が発見されたため、当地点の成果もそれに伴ってその性格についてある程度の限定ができた。

調査地点が含まれるこの谷戸は近年、やや大規模な調査が続いている。それらの成果から、谷戸全体として入り口付近に「有力御家人の屋敷」（安達一族の屋敷の可能性が高いと指摘されている。）、谷戸奥には「寺院施設」（本堂等は発見されていないが、安達氏庇護の寺院「無量寺」関連と推定される。）が配置されていた様相が徐々に解明されてきている。今回の調査も、その一端を担ったものとなった。

《参考文献》

『今小路西遺跡（No.201）発掘調査報告書（御成町171番1外地点）』2008年3月 株式会社齊藤建設



▲A. I区1面全景(東より)



▲B. II区1面全景(北より)



▲A. I区1面据甕1出土状況(北より)



▲B. I区1面据甕1内土層断面



▲A. 据甕1三鱗叩き文



▲B. 据甕1完掘(北より)



▲A. I区2面全景(南より)



▲B. II区2面全景(北より)



▲A. I区3面全景(南より)



▲B. II区3面全景(北より)



◀ A. I区3面建物1東部(西より)

B. II区3面掘立柱建物1(北より) ▶

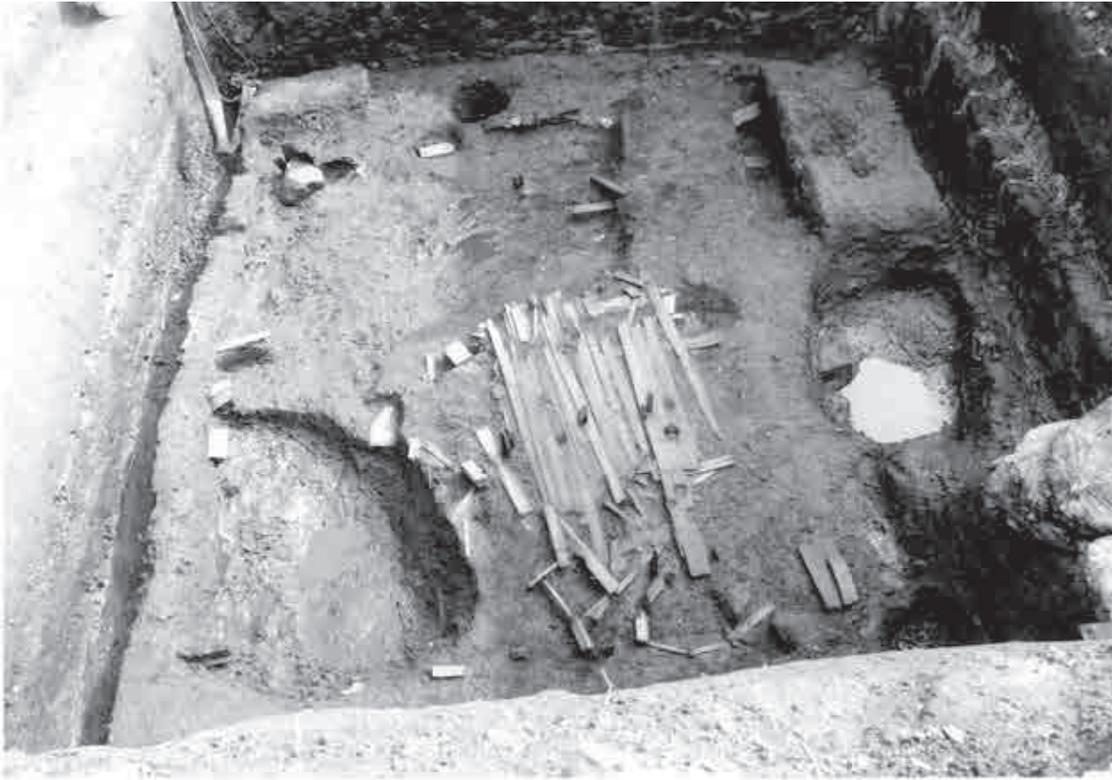




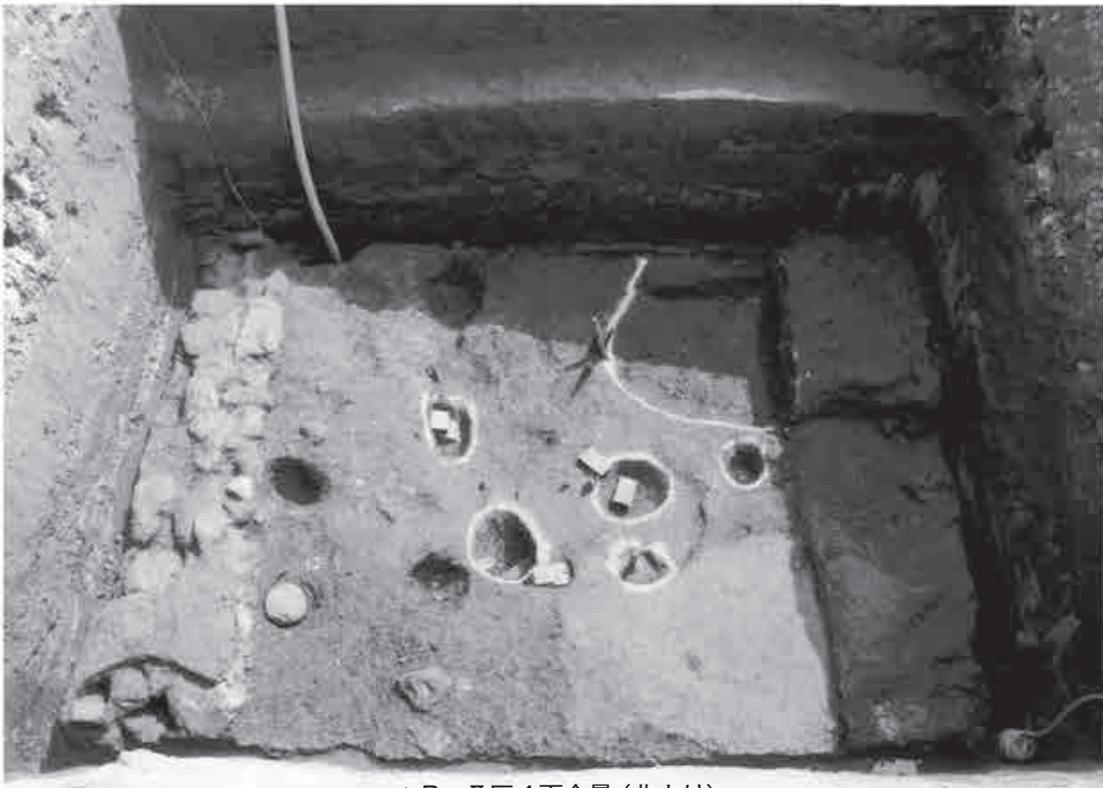
▲A. II区3面土坑7人形出土状况



▲B. I区4面漆器出土状况



▲A. I区4面全景(北より)



▲B. II区4面全景(北より)



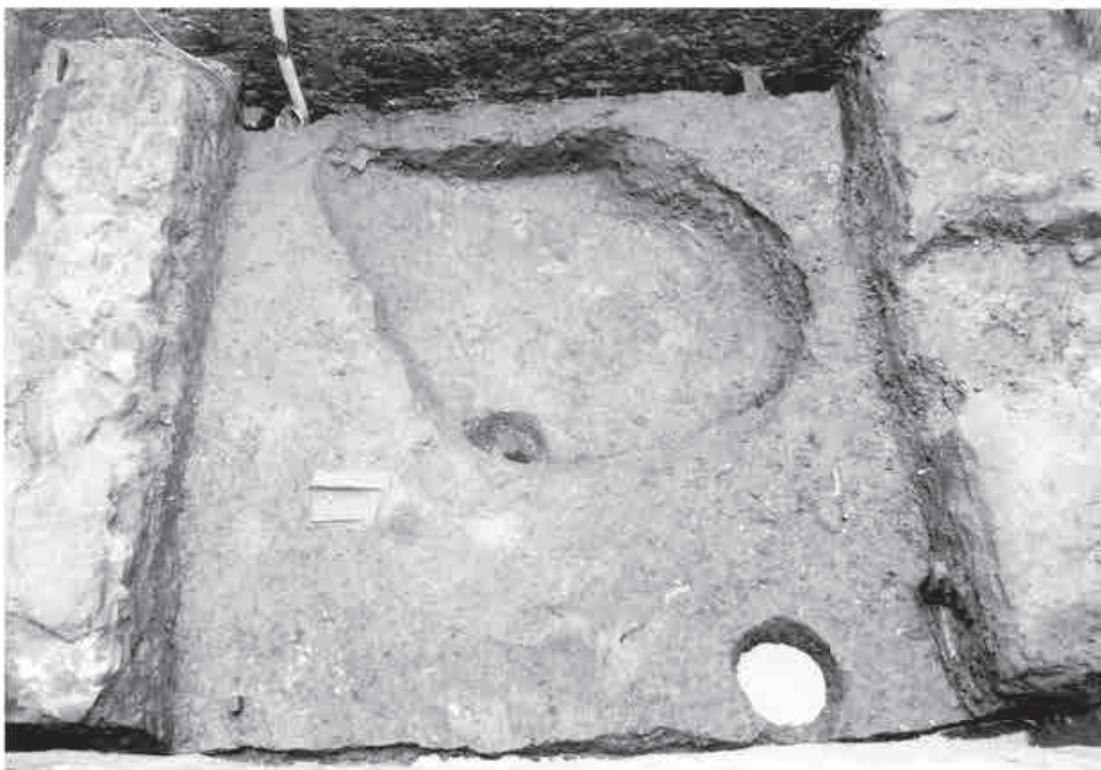
▲A. I区4面床状遺構(北より)



▲B. II区4b面全景(北より)



▲A. I区5面全景(北より)



▲B. II区5面全景(北より)



▲ A. II区5面舟形出土状况



▲ B. I区5面宝塔出土状况



▲A. I区6面全景(北より)



▲B. II区6面全景(北より)



▲A. II区6面Pit19 (東より)



▲B. トレンチ1 (北壁)



▲A. I区東壁土層断面



▲B. II区東壁土層断面



7-4



7-7



8-1



8-2



8-4



8-5



8-12



9-8



9-11



9-12



9-13



9-15



9-27



9-32



9-35



9-40



9-41



9-42



9-44



9-47



9-48



9-52



9-61



9-67



9-68

出土遺物(1)

图版 16



10-1



10-3



10-18



13-1



13-2



13-4



15-3



15-9



15-15



15-21



15-23



15-24



15-25



15-26



15-36



15-41



15-45



15-57



15-58



15-59



15-62



15-64



15-71

出土遺物(2)



17-15



20-7



20-8



20-16



20-19



20-20



20-21



20-24



20-60



21-4



21-7



21-8



21-9



23-24



23-36



23-28

出土遺物 (3)

图版 18



24-3



24-12



24-21



24-22



24-28



24-31



24-32



24-36



24-37



24-38



24-39



24-35



24-47



25-7



31-2



31-4



31-20



31-28



31-33



31-34



31-37



31-38



31-39



31-40



31-50



32-1



32-7



31-41



31-42

出土遺物(4)



37-2



37-6



37-10



37-12



41-1



41-2



41-6



41-11



41-12



41-13



41-15



41-16



42-8



45-5



45-16



45-8



45-10



45-17



45-1



45-22



45-25



45-21



46-3



46-3



46-5



45-26

出土遺物 (5)

